

〈特集〉ソヴィエトの世紀 IV 藤井一行とソ連研究

米共産党日本人部研究序説

——藤井一行教授遺稿の公開によせて——

加藤 哲郎 ●一橋大学名誉教授

一 社会思想史家・藤井一行の生涯と活動

二〇一五年二月二五日、藤井一行教授逝く

本誌本号は、ロシア革命一〇〇年の特集だという。私自身も寄稿を求められたが、私の旧ソ連研究の多くは、富山大学名誉教授・藤井一行氏との二人三脚で進められた。そのかけがえのない師で「同志」とよぶべき先輩を、二〇一五年二月二五日に、喪うことになった。享年八二歳。住まいが近所であった私は、ご遺族と共に、その穏やかで安らかな最期を見届けることができた。

ただしその訃報は、ご遺族の意向で、ごく狭い範囲のご親族と友人たちにはのみ知らされた。それも、家族葬を済まされた一ヵ月後であった。金沢大学・富山大学時代の同僚・教え子たち、一橋大学大学院金子幸彦ゼミの仲間たち、それに本誌小島編集長を含むごく親しい研究上の友人たちが、それぞれに追悼の会を持った。最後の研究仲間の会で世話役

をつとめた私が、本誌の小島編集長から藤井教授の業績を偲ぶ小特集の提案があつたことを出席者に伝え、列席したご遺族の了解も得て、公式には、本誌上での追悼文により、藤井教授のご逝去を、社会的に公表することにした。

したがって、藤井一行教授の永眠は、新聞・雑誌等では、これまで伝えられていない。本誌が初めて公にするものである。日本語版ウィキペディアも、二〇一七年八月一日現在、生前のままである。

藤井一行（ふじい かずゆき、一九三三年三月三〇日―）は、日本の政治学者、ロシア思想史学者、富山大学名誉教授である。経歴・人物 宮城県鬼首村（現大崎市）生まれ。一九五一年岩手県立黒沢尻高等学校卒業、東京外国語大学ロシア語学科入学。三年生に進級したあと、肺結核のため二年間休学。一九五七年同大学卒業。同年、一橋大学大学院社会学研究科入学、金子幸彦に師事。一九六五年一橋大学大学院博士課程満期退学。一九六七年、札幌大学外国語学部ロシア語学科助教授。一九七二年金沢大学教養部助教授（ロシア語）。一九七八年富山大学人文学部教授（ロシ



藤井一行教授。『トロツキーとゴルバチョフ』（上島武、中野鐵三との共著、窓社、1987年）出版を祝う会にて

ア語ロシア文学コース担当。一九九八年、富山大学を定年退官、名誉教授。一九世紀ロシアの民主主義思想、二〇世紀初頭のロシア・マルクス主義（とりわけレフ・トロツキー）、スターリン主義体制、北朝鮮体制などを研究してきた。著書『社会主義と自由』青木書店、一九七六年、『民主集中制と党内民主主義——レーニン時代の歴史的考察』青木書店、一九七八年、『反逆と真実の魂——ベリンスキイの生涯と思想』青木書店、一九八〇年、『共産党組織のペレストロイカ』窓社、一九八九年、『レーニン「遺書」物語——背信者はトロツキーかスターリンか』教育史料出版会、一九九〇年、『新ロシア革命——エリツイン政権の基本的性格』窓社、一九九二年、『翻訳の品格——「新訳」にだまされるな』著者自家出版、二〇一二年。（以下、共編著六点、翻訳書八点は略）

インターネット上で生き続ける藤井教授の遺産

右の膨大な著作・翻訳書リストからも、藤井一行教授の幅広い関心と執筆活動、研究上の業績がうかがわれるが、それには留まらない。

藤井教授は、早くから研究ツールとしてのインターネットに注目し、自身のサイト「藤井一行研究室」を運用してきた。ロシアや世界から直接情報を集めるのみならず、研究成果を世界に発信してきた。いくつかのサイトは、ご逝去に伴い閉鎖ないしリンク切れとなったが、グーグルに「藤井一行」と入れると、なおいくつかは生き残っている。

その一つが、本誌に未公開遺稿を収録する土台となった「藤井一行研究室（予備）」というホームページ（<http://book.geocities.jp/itjio/>）と、「トロツキー翻訳研究室」（<http://www.geocities.jp/itjii1/>）「翻訳出版の責任を問う（藤井一行・中島章利主宰）」（<http://book.geocities.jp/itjii3/>）にもリンクされている。つまり、ウェブ上では、ウィキペディアの記述のみならず、実際の業績のいくつかもそのまま読めるようになっており、その研究の魂は生き続けている。

「藤井一行研究室」には「簡単な自己紹介」として、略歴に加え、「研究面では、一九世紀ロシアの民主主義思想、二〇世紀初頭のロシア・マルクス主義（とりわけトロツキー）、スターリン主義体制などについて研究してきた。最近では、東洋的スターリン主義体制というべき北朝鮮体制にも重大な関心を寄せている。当面の課題は、日本における歪められたトロツキー像の是正、ロシア思想史・日本社会主義運動史の検証など」と述べている（ウェブページは二〇一七年八月一日閲覧、以下同）。

このうち藤井教授の盟友中野徹三教授、橋下剛教授、佐々木洋教授等らと共に、私も大月書店編集者として刊行に関わった『スターリン問題研究序説』（一九七七年）については、本誌『アーリーナ』第一六号（二

〇一三年一二月）が「エピソードとなった『序説』への研究序説——『スターリン問題研究序説』と七〇年代後期の思潮」という小特集を組んでいて、藤井教授も私も、率直に当時の問題意識と主張を述べている。私たちは、四〇年来のスターリン主義批判の「同志」だった。

以来、季刊雑誌『窓』や教育史料出版会『日本共産党への手紙』（一九九〇年）への寄稿など、ロシア革命後のソ連と国際共産主義運動の歴史を、スターリン主義批判、特に民主集中組織論批判の観点から、批判的に検討する共同作業を進めてきた。『日本共産党への手紙』への藤井教授の寄稿「日本共産党にもペレストロイカとルネサンスを！」は、なおウェブ上で読むことができる（<http://book.geocities.jp/ifuji0/cpi060505.html>）。私自身の『手紙』への寄稿「科学的真理の審問官ではなく、社会的弱者の護民官に」も、私の個人ホームページ「ネチズンカレッジ」に公開されている（<http://netizen.html.xdomain.jp/tegami.html>）。

こうした公開での日本共産党への批判的提言が当時の同党指導者の気に障ったためか、一九九四年に刊行された日本共産党の（おそらく最後の）公式党史『日本共産党の七十年』では、二人とも実名で「反共攻撃」論者と名指しで批判される「栄誉？」にも授かった（下巻、三七五頁）。私たちの「インターネットは民主集中制を超える」という主張は、その後出版物と共に、ウェブをも使って展開されることになった。

その共同作業の重要な素材が、いわゆる旧ソ連秘密文書であり、その解説であった。特に旧ソ連でスターリン粛清の犠牲者となったソ連在住日本人犠牲者約一〇〇〇人の生涯の探求では、私が発掘収集した資料のうちロシア語のものは、ほとんどが藤井教授により翻訳・解説された。

きっかけは、私がワイマール期ドイツで活動した日本人反帝グループ



の指導者、元東大医学部助教国崎定洞を追って、ソ連崩壊後に閲覧可能になった国崎定洞の一九三二年ソ連亡命、三七年粛清死の秘密記録を入手したことであった。野坂参三の日本共産党除名のきっかけとなった小林峻一・加藤昭『闇

の男—野坂参三の百年』（文藝春秋社、一九九三年）には、本文ではなく巻末資料の中に国崎定洞に関するものがあつた。著者たちに問いあわせ、「国崎定洞ファイル」を入手してみると、私の求めていたドイツ語・日本語・英語の履歴書等関係資料のほかに、粛清経過説明に必要なロシア語資料と、モスクワで国崎が交流した多くの日本人らの記録があつた。そのロシア語資料の日本語訳・解説は、『闇の男』の精査・吟味を含め、藤井教授にお願いすることになった。特に国崎定洞粛清の鍵となつていた、元片山潜秘書勝野金政の一九三〇年代粛清・ラーゲリ体験の記録の発掘・解説では、藤井教授が中心になり、勝野家ご遺族（本誌にも寄稿している長女・稲田明子さんら）と共に、後に「日本のソルジェニツイン」として名誉回復を進める先頭に立つた。

それらのオリジナル資料を求めて、私たちは、幾度かロシアを訪れた。藤井教授と共に、黒海に面したソチまで、日本人ラーゲリ体験者寺島儀蔵氏夫妻宅を訪れたのも、今は遠い思い出の一コマになってしまった（寺島『長い旅の記録—わがラーゲリの二〇年』中公文庫、一九九六年）。

二 藤井一行遺稿「コミンテルンと日本人粛清」の来歴

藤井一行教授の未発表遺稿編纂にあたって

藤井教授の没後、本誌小島編集長と藤井家ご遺族から、藤井教授追悼のための未発表論文の整理と選択による遺稿の寄稿を托された。素材の多くは、書籍に入っていない学術雑誌への寄稿文と、トロツキーの著作などロシア語文献の日本語訳に関するものだった。

前者の「トロツキー」と『田中上奏文』（『トロツキー研究』誌、五一号、二〇〇七年冬、所収）、「トロツキーと日露戦争」（『ロシア史研究』第七九号、二〇〇六年十一月）、「田中上奏文」は本当に偽書か？―新発掘史料で『昭和史の謎』を追う」（『労働運動研究』二〇〇六年八月）などは、藤井教授が、かつては論敵であった晩年の犬丸義一氏と意気投合して進めていた田中メモランダム研究で、本誌『アリーナ』第一六号別冊「田中上奏文の再検討」（二〇一三年）のもとになった作品である。私自身が資料を提供した「コミンテルンと天皇制―片山・野坂は三二年テーズの天皇制絶対化に懐疑的だった」（『労働運動研究』二〇〇六年四月）もある。ウェブ上にかつてはあったらしい「勝野金政とゴリキー」および「日本におけるロシア革命史研究Ⅱロシア革命史記述への疑問」は、残念ながらリンク切れになっていて、今回の遺稿編纂には使えなかった。後者のロシア語翻訳については、幸い中島章利氏との共同作業である「翻訳出版の責任を問う」及び「トロツキー翻訳研究室」が、ウェブ上に残されている。「トロツキー翻訳研究室」では、大家から若手まで、トロツキーの著作の日本語訳の問題点が容赦なく批判的に検討されている。その問題意識は、以下のように述べられている。

海外の革命家・思想家で、トロツキーほど日本で歪められて紹介された人間はいないであろう。その主な原因は、日本の共産党をはじめとする左翼が、スターリン支配下のコミンテルンの「指導」のもとで、当否を確かめることもなく、トロツキーをロシア革命の裏切者として喧伝してきたことにある。

しかし、それだけではない。トロツキー紹介の労をとった研究者・翻訳者たちが、故意にはないにしても、トロツキーの著作を必ずしも的確に日本の読者につたえなかったという事情もあった。戦前の一時期をのぞけば、トロツキー紹介は主として英訳された著作からの重訳ですすめられた。しかも、英訳者の翻訳力はトロツキー自身もしばしば嘆いていたように的確ではなかった。驚くことに、そうした欠陥英訳がいまだにそのまま改訳されることもなく世界で流布している！ しかもトロツキー派の出版社自体がそうした事態に無頓着に見える。日本では長いことそうした英訳にもとづいて邦訳がすすめられてきた。だが重訳者の学力も疑わしいものであった。『裏切られた革命』の例をあげれば足りる。

ここには第一次資料にもとづき、原文の言語に忠実に、歴史的事情や資料の性格に即して批判的に解読していく、藤井教授の徹底した態度が示されている。

この点では、戦後生まれの政治学者で、主に英語・ドイツ語文献で国家論と国際共産主義運動を研究していた私とも、時に微妙な解釈と評価の違いが生まれた。ロシア革命とレーニン評価は、私は主にグラムシに依拠し「マルクスから疑え」であつたから、当然レーニンもトロツキーも相対化される。十月革命については政治学的には「クーデタ」とも評言してきた。しかし藤井教授は、そうした評価に慎重であつた。

共通の対象である民主集中制組織論については、私は民主主義の原理



かとう てつろう◎「橋大学名誉教授。一九四七年生まれ、東京大学法学部卒業、博士（法学）。専門は政治学・比較政治・現代史。インターネット上で「ネチズンカレッジ」主宰。著書に本文中で触れたもののほか、『ミントレルンの世界像』（青木書店）『社会と国家』（岩波書店）『象徴天皇制の起源』（平凡社新書）『情報戦の時代』（花伝社）など多数。二〇一七年三月に早稲田大学客員教授を退任し、新著『飽食した悪魔』の戦後——七三一部隊と二木秀雄「政界ジープ」』（花伝社）を公刊した。

論からしてその「上意下達」、「鉄の軍隊的規律」、「一枚岩主義」を問題にするのに対して、藤井教授は「少数意見の尊重」、「異論排除」について、レーニン時代とスターリン時代の歴史的運用の違いに注目した。そこには一回り年長の藤井教授らのロシア革命・ソ連観と、戦後生まれで文化大革命やプラハの春の時代に社会主義に関心をもった私たちの世代の、時代認識や問題関心の微妙な差異も孕まれていた。

インターネット出版「日露文化関係史・粛清記録編」の行方

こうした経緯を踏まえ、本誌には、藤井一行教授の遺稿として、ウェブ上の「藤井一行研究室」の中核であったが今日では閲覧が困難で断片的にしか拾えない、米国からソ連に亡命しスターリン粛清の犠牲になった日本人についての研究を復元することにした。

それは、もともと藤井教授が富山大学に在職中に立ち上げた研究ホームページ「藤井一行研究室」に、「日露文化関係史・粛清記録編」として、一九九六年二月に初出・発信されたものだった。「紙のメディアによらない初めての『出版』の試み」と自負して、逐次改訂・増補が予定されていたらしい。

私が当時保存した富山大学ホームページ内の記録によると、第一回「野坂竜の逮捕をめぐって」、第二回として「粛清されていた邦人日本語教

師たち」「ソ連に亡命した渡米移民の運命」と挙げられ、その「目次」として、「はじめに」「1 アメリカでの革命運動」「2 労働者の祖国ソ連で——モスクワ東洋専門学校・細胞生活」「3 総粛清——逮捕から処刑への記録」「4 粛清のメカニズム」「5 復権の歩み」の五章構成になっている。そして、「3 総粛清」のなかに、番号なしで、[Image] 照屋忠誠、[Image] 宮城与三郎、[Image] 山下尚、[Image] 島袋正栄、[Image] [Image] 箱盛改造、[Image] 山城次郎、[Image] 福永与平、[Image] 又吉淳、[Image] レニングラード東洋専門学校が入っていた。[Image] とあるのは、そこに各人の写真や関連資料が写真版で入っていて、そこをクリックするとそれぞれのファイルに直接アクセスできるように、また各章・各ファイルの間も自由にリンクで往き来できるように、インターネットの特性を活用したものだだった。

ところが藤井教授の一九九八年富山大学定年退職によって、大学の公式サイトのアカウントが失われ、「藤井一行研究室」にアクセスできなくなかった。それに気づいた藤井教授は、民間プロバイダー geocities に「藤井一行研究室（予備）」を設けた。「万一の事態にそなえての予備サイト」として今日も残されているが、そこには前掲「トロツキー翻訳研究室」などは残されているのに、「日露文化関係史・粛清記録編」は入っておらず、リンクもされていない。わずかに「スターリン体制下での粛清の論理とメカニズム」という関連ファイルのみがリンクされ、残存している（「遺稿」第二部第四章に「粛清のメカニズム」として収録、<http://book.geocities.jp/fujio/shukuseironi.html>）。

おそらく「予備」サイトのほかに、上位の「藤井一行研究室（本サイト）」の全体も富山大学から移設され、一時は「日露文化関係史・粛清記録編」がそのトップで中心であったと思われるが、藤井教授の没した

二〇一五年頃には、プロバイダーにより消去されたものらしい。したがって、先に挙げた三つの生き残りサイトからは、「日露文化関係史・粛清記録編」にはアクセスできない。

ところが「野坂竜の逮捕」や「粛清」などのキーワードで検索すると、もともとは「日露文化関係史・粛清記録編」の下位におかれていたらしいファイルに、アクセスできる。野坂竜については、ファイルのカバー写真も入っている。

藤井一行遺稿「コミンテルンと日本人粛清」の構成と監修

こうして「野坂竜の逮捕をめぐる」<http://www.geocities.jp/ifuji2/ryu.html>「粛清されていた邦人日本語教師たち」<http://www.geocities.jp/ifuji2/Preface.html>「コミンテルンと粛清」<http://www.geocities.jp/ifuji2/km-shukusei.html>という三つのサイトに辿りついた。このうち「以下は私が在職していた富山大学のサイト（退官後に勝手に削除された）から修復・移設したもの」と注釈のある「コミンテルンと粛清」というページに、番号はないが「野坂竜の逮捕をめぐる」「粛清されていた邦人日本語教師たち―ソ連に亡命した渡米移民の運命」「粛清のメカニズム」「復権の歩み」の四本のファイルが、目次風に掲げられている。これが、富山大学サイト時代の「日露文化関係史・粛清記録編」に最も近い内容と判断できるため、本誌では、これを底本として、藤井教授の遺稿を編むことにした。

ファイルの中には、「以下の記述には、『剣持』が『健物』だったことなど、のちに加藤哲郎氏の調査によって不正確であることが明らかになった事項が一部含まれたままであることを記しておく。二〇〇九年七月三日」など、富山大学退官後に加えたと思われる改訂の断り書きがある。

また「粛清されていた邦人日本語教師たち―ソ連に亡命した渡米移民の運命」ファイルの末尾には、「一九九七年五月一日追記」として「永浜（姓は正しくは長浜でなく、永浜でした）夫妻の身元が判明しました。妻のサヨさんの実弟から連絡がありました」と註記し、「永浜夫妻の身元」という新たなファイルが加えられ、リンクされている。「復権の歩み」の末尾には「寺島儀蔵氏にたいする現ロシア政府の補償（一九九七年）」「勝野金政氏の名誉回復（一九九六年二月）」「勝野金政氏WEB記念館」へのリンクが張られているが、現在ではつながらない。

何よりも残念なのは、第二部「粛清されていた邦人日本語教師たち―ソ連に亡命した渡米移民の運命」の中核を成す「照屋忠誠（後に忠盛と訂正）」以下犠牲者たちの分析ファイル（第三章）は、「照屋忠誠」以外にはカバーに名前があるのみで、ファイルそのものが存在しない。ウェブ上では、本論本体の中核部分の多くを見ることができない。そこで、この部分のみは、私の保存した富山大学時代のファイルから、復元することにした。

最終的には、富山大学時代の「目次」風記録と、残されたファイルとを、私の責任で組み合わせ編纂し、本誌に、遺稿として発表することにした。主タイトルは、富山大学サイトの「日露文化関係史・粛清記録編」と、残存ファイルの「コミンテルンと粛清」が考えられるが、内容に留意して「コミンテルンと日本人粛清」とする。また第一部「野坂竜の逮捕をめぐる」は、省略することも可能であったが、第二部とした本論「粛清されていた邦人日本語教師たち―ソ連に亡命した渡米移民の運命」の前座として、内容的にも方法的にも重要な貴重資料の解析・公開と考え、第一部として収録することにした。

その結果、藤井一行遺稿「コミンテルンと日本人粛清」は、ウェブ上

の横書きを本誌用に縦書きとし、数字は洋数字を漢数字に直し、遺稿の原型をできるだけとどめつつ、必要最小限の編注「加藤注」を加え、以下のように、構成することにした（正確に言えば加藤哲郎編ないし監修であるが、「加藤注」とファイルの順序以外での改変はなく、完成度の高い原文のままなので、敢えて付さない）。

藤井一行遺稿「コミンテルンと日本人粛清」目次

第一部 野坂竜の逮捕をめぐって

はじめに

一 野坂竜、除名を申請

二 竜の逮捕

三 尋問

四 釈放・その謎

第二部 粛清されていた邦人日本語教師たち——ソ連に亡命した渡米移民の運命

はじめに

第一章 アメリカでの革命運動

第二章 「労働者の祖国」ソ連——疑心暗鬼と密告の世界・モスクワ

東洋学専門学校党細胞

第三章 総粛清——逮捕から処刑への記録

一 照屋忠盛

二 宮城与三郎

三 山下 尚

四 島袋正栄

五 箱盛改造

六 山城次郎

七 福永与平

八 又吉 淳

九 レニングラード東洋専門学校

第四章 粛清のメカニズム

一 治安機関の裁判ぬき判決・処刑システム

二 刑法第五八条

三 粛清の論理

四 エジョフ体制

五 外国人・日本人敵視

六 上意下達システム

第五章 コミンテルンの粛清責任

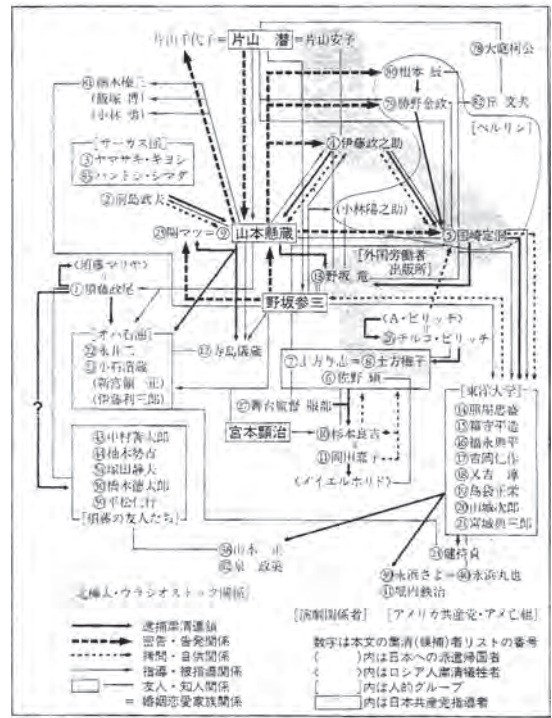
第六章 復権の歩み 永浜丸也・サヨの身元が判明

三 なぜ米国共産党日本人部か

——藤井教授遺稿の深化のために

私の旧ソ連日本人粛清犠牲者研究と、藤井教授遺稿のオリジナルな成果本誌には私自身も寄稿することになっているが、藤井教授の追悼のための遺稿編纂にかなりの時間をとられ、かつ、遺稿そのものが一冊の書物になりうる八万字超の大部のものとなった。そこで私は、右の藤井教授遺稿の理解を深めるために、米国共産党日本人部研究という補助線を引くことによって、本誌への責めを果たすことにした。

特集テーマのロシア革命一〇〇年については、「現存した社会主義の



●図3 在ソ連日本人の疑心暗鬼と粛清連鎖

崩壊」の問題として、『東欧革命と社会主義』、『ソ連崩壊と社会主義』、『二〇世紀を超えて―再審される社会主義』（いずれも花伝社）など、一九九〇年代に多くの著作・論文で述べたものを、現時点で繰り返す意欲は湧かない。スターリン主義批判は、それらの全体に貫かれている。

日本における社会主義・共産主義運動については、三・一一東日本大震災・福島原発事故の衝撃を受けてであるが、『日本の社会主義―原爆反対・原発推進の論理』（岩波現代全書、二〇一三年）で、この一〇〇年のあり方を批判的に論じてある。

二一世紀に入つての私の関心とフィールドは、ゾルゲ事件や関東軍七三一部隊、ソ連のNKVD・KGBからアメリカのCIAへと広がった。海外での資料収集・調査は、アメリカ、ヨーロッパ諸国、それに客員教授で滞在したインドやメキシコ、中国がほとんどになった。いずれの国

でも、ロシア革命への思い入れやコミンテルン型共産党の歴史は過去のものとなり、政治的理想郷はおおむね北欧諸国に、社会運動のモデルはアナキズムや自立した市民運動、少数派抵抗運動に向かっていた。

旧ソ連における日本人粛清については、藤井教授の協力を得て、『モスクワで粛清された日本人』（青木書店、一九九四年）、『人間 国崎定洞』（川上武と共著、勁草書房、一九九五年）、『国民国家のエルゴロジ』（平凡社、一九九四年、後に『国境を越えるユートピア』平凡社ライブラリー、二〇〇二年）の三冊の書物で、学術的に語れる限りのことは論じた。『国境を越えるユートピア』では、上図のような疑心暗鬼と粛清連鎖の相関図にまとめた。ただし、その後の研究で、②は健物貞一、②⑥は松田照子と本名が訂正された。藤井一行教授の今回の研究で、①⑦の「吉岡仁作」は「山下尚」と訂正される。

当時のコミンテルンは、「世界共産党」をうたつて世界中で活動していた。各国共産党は、モスクワに本部をおくコミンテルンの各国支部であった。コミンテルンの規約では、共産主義者は、基本的にその居住地の共産党に属した（コミンテルンの属地主義）。だから海外の日本人共産主義者は、ドイツ共産党、米共産党、中国共産党などの中で活動し、同時にある程度の人数になると、当該国共産党の日本人部に属した。日本共産党にも中国人、朝鮮人党员がいた。マックス・ビッカートンのようにニューヨークランド人で日本共産党に加入申請した事例もあった。

ただし、事実上のものであるソ連共産党だけは、入党審査が厳格で、他国から入った共産党员が自動的にソ連共産党員になることはなかった。そのため三〇年代モスクワには、コミンテルン本部のもとに各国共産党代表部があったが、ヒトラーに迫られてソ連に亡命したがソ連共産党には入れなかったドイツ共産党员や、「労働者の祖国」にあこがれて

ソ連に來たが共産黨員になれなかった外国人活動家（例えば佐野碩など文学・芸術家、知識人）も多数在住していた。藤井教授遺稿が分析した野坂参三夫人野坂龍は、日本共産党からソ連共産党へ転籍できたが、米国共産党からの「アメリカ亡命組」（通称「アメリ亡組」）は、野坂参三・山本懸蔵が代表の日本共産党の指揮下にあつたのに、ソ連では「非黨員」扱いだった。

私はその後、ドイツ共産党日本人部の国崎定洞、千田是也らの活動を『ワイマール期ベルリンの日本人』（岩波書店、二〇〇八年）にまとめ、その限りで肅清犠牲者国崎定洞、モスクワから国外追放された佐野碩・土方与志らのソ連時代に言及することはあつたが、むしろ九〇年代に判明した日本人肅清犠牲者のご遺族・ご親族を訪ねて、遺品と言うべき肅清文書を手交し死亡事情・命日・埋葬地などを伝えるボランティア活動を続けてきた。

その過程で、勝野金政ご遺族稲田明子さんと健物貞一ご遺族と共にロシアを訪問し、また、モスクワ在住の須藤政尾遺児ミハイル・スドー氏や山本正美遺児ヴィクトリアさん、健物貞一遺児アラン・ササキ氏らロシア人関係者とも交流したが、研究そのものは、インターネット上の「ネチズンカレッジ」に「情報収集センター」「旧ソ連日本人肅清犠牲者・候補者一覧」を設け、約百人の肅清犠牲者・行方不明者についての情報を逐次提供し、同時に新たな情報を求めてきた (<http://neizen.html.xdomain.jp/Moscow.html>)。

最新では、二〇一五年に、藤井教授遺稿にも登場するカンジョ前島武夫のほか、富川敬三、恩田茂三郎らのロシア側一九三七・三八年銃殺記録と日本側の本籍地・家族等の行方がわかり、新たに公開した。これらでは、藤井教授との共同研究というよりも、ホームページ読者からの

情報提供、ご遺族・友人等からの問いあわせ、それに、新聞社等マスコミ関係者の調査への協力が情報源となった。

したがって、今回遺稿として発表する藤井教授の「コミンテルンと日本人肅清」は、資料は一緒に集め、私が提供したものであるが、その解説と分析そのものは、藤井教授のオリジナルな労作である。

特に、①「野坂竜ファイル」等犠牲者個人ファイルの解説に示された、第一次資料と当時のソ連刑法に則した肅清メカニズムの分析、②「照屋忠盛ファイル」からの無実を主張した法廷闘争の抽出、③「闇の男」に影響された私の研究では欠けていた「山下尚」「永浜丸也・サヨ」らの探求は、トロツキー翻訳で培った藤井教授の周到かつ綿密な独創的方法での解説の実証的成果で、歴史的・学術的に貴重なものである。

出発点としての米国共産党ロングビーチ事件

藤井教授は、一九二〇・三〇年代にアメリカ西海岸で共産主義運動・労働運動に加わり、「労働者の祖国」ソ連へと亡命して、スターリン肅清の犠牲となった無名の日本人に共感し、注目した。彼らのほとんどが、第二部のタイトルにあるように、モスクワ及びレニングラード（現サンクトペテルブルク）の東洋学専門学校の日本語教師であつた。

私は、当時のソ連での日本語教育の実態がわからず、『闇の男』に準じて「東洋大学」「東洋学院」等と表記してきたが、確かに日本語では「専門学校」が適切であろう。自身が日本で長くロシア語教育に尽力した藤井教授ならではの訳語である。

ただし、彼らのほとんどは、日本共産黨員ではない。多くは沖縄等から仕事を求めてアメリカに渡り、そこでの人種差別や低賃金労働を体験して社会主義・共産主義に近づいた。一九二九年恐慌により失業者が激

増、米国共産党日本人部に所属して、中国人・朝鮮人・フィリピン人などと共に、飢餓行進などの労働運動に加わった人々である。

彼らのソ連亡命に当たって重要だったのは、一九三二年一月の「ロングビーチ事件」である。これについて、私はかつて『沖繩を知る事典』中で、以下のように述べた（日外アソシエーツ、二〇〇〇年）。

アメリカ・ロスアンジェルス郊外ロングビーチで、一九三二年一月五日、失業者集会・飢餓行進を組織したアメリカ共産党が弾圧された。百人以上が逮捕され四五名が起訴されたが、その中に九名の日本人移民が含まれていた。内五名は沖繩本島出身の在米沖繩青年会活動家であった。又吉淳、宮城与三郎（ゾルゲ事件被告宮城与徳の従兄）、照屋忠盛、山城次郎、島正栄で、彼らは国外追放になり、同様の事件で先にソ連に渡ったアメリカ共産党日本人部指導者健物貞一らにならない、三二年一月二十九日にニューヨークから船に乗り、ドイツ経由で「労働者の祖国」ソ連へと亡命した。旧ソ連在住日本人の中で「アメ亡組」と称され、クートベ（東洋勤労者共産主義大学）に学んだ後、モスクワ東洋学専門学校の日本語教師となった。

彼らの消息はソ連亡命後途絶え、戦後も手がかりがなかった。ところが一九九一年ソ連崩壊により、「アメ亡組」全員がスターリン粛清最盛期に「日本のスパイ」として逮捕され、銃殺・強制収容所送りとなったことが明るみに出た。旧ソ連秘密警察文書によると、沖繩出身の五人も三八年三月一日照屋、同二二日に宮城・又吉・山城・島が「日本のスパイ」として逮捕され、五月二十九日に又吉・山城・島、一〇月二日に宮城が銃殺された。強制自白を拒んで無実を主張し続けた照屋も、三九年一月に五年の強制労働刑に処されて後、行方不明となった。

これら粛清裁判は一九八九年に、過去に遡って無効とされ、又吉・宮城・

山城・島は名誉回復された。しかし遺族に事実が伝えられたのは、九一年のマスコミ報道によってであった。照屋については、名誉回復も確認できない。希望を持って海外に雄飛した沖繩人が、日本・アメリカ・ソ連という国民国家に差別され裏切られ、時代の波に翻弄された悲劇であった（『北米沖繩人史』北米沖繩クラブ、一九八一年、比屋根照夫「羅府の時代」『新沖繩文学』八九〜九五号、一九九一〜三年、参照）。

事典の記述であるから、正確を期さなければならない。この項目を執筆するにあたって、かつて野坂参三のアメリカ滞在を調べて以来気になっていた、米国共産党内の日本人グループの記録の収集を始めた。

米国共産党の二重組織——コミンテルン指令で宮城与徳は日本へ、「アメリカ亡命組」はソ連へ

気になったことは、一つは、野坂参三との関連である。野坂の自伝『風雪のあゆみ』全八巻（新日本出版社、一九七一〜八九年）には、一九三四〜八年の、二度にわたる長期のアメリカ滞在が、ある程度は描かれている。しかし日本の外事警察資料や米国側資料では、よく知られた天皇制についての一九四四年米軍延安インタビュー（山本武利編訳『延安レポート』岩波書店、二〇〇六年）を含むさまざまな資料に、野坂が米国に滞在した記録がない。つまり野坂参三は、FBIや移民局、日本大使館の監視が厳しい米国に、何らかのルートで密入国し、長期滞在していた。これは、コミンテルンの国際連絡部（OMS、オムス）と共に、米国共産党指導部、西海岸の日本人共産主義者グループの援助なしには、ありえないことだった。

もう一つは、ゾルゲ事件との関連である。藤井教授遺稿に出て来る粛清犠牲者・宮城与三郎は、ゾルゲ事件被告の重要な五人の一人、一九三

三年に米国共産党から日本に派遣された宮城与徳の従兄である。「アメリカ亡命組」の出国時期と重なるばかりでなく、ロングビーチ事件の周辺には、ゾルゲ事件被告宮城与徳・北林トモ・秋山幸治らがいて、当時の西海岸日本人共産主義者の活動が、宮城与徳の裁判記録にも出て来る。私は、この関係から米国共産党日本人部初代書記で、コミンテルンの要請で米国から上海に派遣された鬼頭銀一が、上海でゾルゲと尾崎秀実を結びつけたキーパーソンであることを突き止めた。拙著『ゾルゲ事件』（平凡社新書、二〇一四年）には、鬼頭銀一・宮城与徳と関わる限りで、一九三〇年代米国共産党日本人グループの活動と、日本の特高外事警察や外務省・大使館・領事館による監視の概略を書いておいた（特に第五章、六章）。

藤井教授が遺稿の第二部第一章「アメリカでの革命運動」で依拠した資料は、宮城与徳のゾルゲ事件裁判記録を除けば、米国共産党員だったことで知られるカール・ヨネダ、ジェームズ小田らの戦後の回想であった。ところが野坂参三の米国滞在や宮城与徳のゾルゲ諜報団への派遣事情を調べていくと、日本語で紹介されているカール・ヨネダやジェームズ小田の文献資料は、米国共産党日本人部についての極めて主観的な記録であり、多くの事実を隠している、ないし無知であることが分かった。

そこで、米国議会図書館に、モスクワの旧コミンテルン史料館から米国共産党公式文書・秘密連絡文書が入って、日本人部関係資料も公開されたのを機に、米国共産党日本人部についての第一次資料にもとづく研究を始めた。その途上で、アメリカ人研究者ジョセフィン・フォーラー女史とメールで知り合ひ、Josephine Fowler, *Japanese & Chinese Immigrant Activists: Organizing in American & International*



が、藤井教授遺稿、及び、以下の私自身の研究を吟味していく上で、必読文献である。

それらによつて、ほぼ同じ時期に、一方で、西海岸労働運動で活躍したFBI・移民局と日本領事館によつて身元を確認された「アメリカ亡命組」の公然メンバーは、米国共産党により「亡命」という名でソ連に送られ、他方で、非公然の共産党員である画家の宮城与徳が、秘かにゾルゲ諜報団の一員として日本に派遣された理由が、おぼろげながら見えてきた。

端的に言えば、当時の米国共産党は二重組織であり、米国共産党日本人部は、労働運動や文化運動の活動家が工場・街区細胞に所属する地域組織と、コミンテルンの要請に応じて活動家を養成しソ連や中国、日本などに送り出す米国共産党本部直轄の言語別組織の結節点にあり、日本人部を指導する書記は、そのつなぎ目で、日本人活動家を国内活動向けと海外活動用に振り分ける役割を与えられていた。

宮城与徳の時代のカリフォルニア共産党と米国共産党日本人部

このことについては、二〇一一年一〇月、沖縄大学での第六回ゾルゲ事件国際シンポジウムで宮城与徳を報告する際、以下のように概要を述

Communist Movements, 1919-1933, Rutgers University Press, 2007と云う、強力な研究上の武器を入手した。不幸にも、フォーラー女史は博士論文として同書を公刊する途上で病没した

べてある。

一九三〇年代の米国共産党（CPUSA）は、二つの顔を持っていた。一つは、通常思い浮かべる、大恐慌下での労働運動、新聞やパンフレット発行、スペイン戦争国際義勇軍から第二次世界大戦への米国民としての反ファシズム参戦の流れを指導する、基本的には米国内一九地域に分かれた「オモテ」の顔である。だがすでに、一九二九年一月二日のスターリン五〇歳誕生日を目に見える転換点にして、世界革命をめざす共産主義者の国際連帯として生まれたコミンテルン（共産主義インター、第三インター、一九一九〜四三年）は、「労働者の祖国」ソ連を防衛する国際ネットワーク、端的にはソ連国家の安全保障・外交政策に規定され従属する組織に転態していた。

そのため米国共産党は、米国内政治・労働運動ではとるに足らない存在であり続けながら（最大時一九三九年黨員一〇万人）、モスクワにとっては、特別に重要な意味を持つにいたった。世界中から移民・難民・出稼ぎ労働者・亡命者の集まるアメリカは、ソ連国家の必要とする国際工作要員の格好の供給源で、現地語と英語の双方ができる国際活動家のリクルート・人材派遣を引き受けることになった。

アメリカ共産党の組織全体が、それに合わせて、伝統的労働運動の指導者W・Z・フォスターらは「オモテの顔」に棚上げされ、汎太平洋労働組合（PPTUS）の特殊工作を中国で経験したアール・ブラウダーを書記長に、PPTUS出身のサム・ダーシー、ステイブ・ネルソンらが重用され、それをモスクワ派遣の米国共産党コミンテルン代表Ⅱ指導・監視役のゲアハルト・アイスラー（上海で一時ゾルゲと一緒）、米国共産党の「ウラの顔」の手配師ルディ・ペーカー、言語局長M・ブラウンらが支えた。

米国共産党の「ウラの顔」とは、ソ連国家・ソ連共産党の要請に応じてアメリカから世界に工作員を送り出す、コミンテルンの秘密機関国際連絡部（オムス、OMS）に直結する活動だった。その要員を育成するために、一般党活動の党労働学校Land Schoolのほか、秘密党幹部養成学校National Training Centerが設けられていた。さらにそこで拔擢された能力ある黨員には、モスクワのクートベ（KUTV、東洋勤労者共産主義大学）や中国革命用の孫逸仙大学（莫斯科中山大学）、中東欧革命用の西洋少数民族共産主義大学（KUNMZ）への留学の道が開かれ、さらに最高幹部養成のために、モスクワ・レーニン大学で訓練するエリート黨員もリクルートされた。

宮城与徳の入党する一九三一年段階の米国共産党日本人部は、千人規模の黨員を持つフィンランド人部、ユダヤ人部などに比べれば、党本部に報告された黨員数四五人、影響下二二〇人という、極小言語部であった。一六の各国言語語部は、米国共産党中央委員会書記局の直轄で、書記は党本部の任命、各言語部書記局も原則としてニューヨークにおかれた。書記局のもとに連邦内の同一言語使用者が横断的に組織され、一九の地域別党委員会よりも上位にあり、必要に応じてモスクワのコミンテルン執行委員会地域別担当部（日本語や中国語は東洋部）と直接連絡することも可能であった。

サンフランシスコ、ロサンゼルス等カリフォルニアの日本人共産主義者は、米国共産党第一三区（カリフォルニア地域支部、書記長サム・ダーシー）の工場細胞・街頭細胞に所属しながら、多くは第二区（ニューヨーク州）にある党本部直轄の言語別書記局である日本人部にも一応登録される。「オモテの顔」での日本人指導者は、一九二〇年代は健物貞一、堀内鉄次らで、彼らは西海岸のアジア系労働者運動組織化のさなか、な

ぜか半年ほどニューヨークに行つて戻つてくる。ニューヨークの中央党学校 Land School で訓練を受けていたのだろう。一九二五年創刊の健物らの雑誌『階級戦』の流れに、沖縄青年会・黎明会出身者の多くが、羅府日本人労働協会、I L D (国際労働者救援会) やプロレタリア芸術研究会を通じて加わり、一九二九年一〇月全国規模の日本人労働協会結成、『労働新聞』刊行にいたる。ただしこうした「オモテの顔」の指導者は、度重なるF B I・移民局・州警察の弾圧で検挙され、三二年一月ロングビーチ事件を機にソ連に亡命、スターリン粛清の犠牲者となる。戦後日本で一部に知られたカール・ヨネダやジェームズ小田が活躍するのは、その後のことである。

宮城と徳の場合は、黎明会やI L Dに関わつていたとはいえ、画家であり、目立つ活動家ではなかった。宮城と徳の第二九回検事訊問調書(一九四二年四月一日)によると、宮城は一九三〇年末にモスクワ帰りの矢野某(矢野努、本名豊田令助、党名武田・水野ほか多数)の訪問を受け、一年後の三一年秋に矢野の勧めで米国共産党に入党、第一三区の「オモテ」活動には加わらず(「加入に際しても私はアメリカ在住の所謂日本人共産主義者と行動を共にせず、真面目に民族運動として共産主義運動を実行する決心で其ことは矢野某にも了解を得て居りました」)、さらに一年後の三二年末に矢野と「白人のコミンテルンの男」が東京行きを指示、実際の出発はさらに遅れ三三年九月出発、一〇月末横浜着である。これは、宮城が「ウラの顔」から国際工作要員としてリクルートされ、ゾルゲ課報団に送られたことを意味する。

結論的に言えば、宮城は米国共産党の「オモテの顔」についてよく知らず、「ウラの顔」の一部のみを知つたうえで、日本に派遣された。宮城供述・手記のやや詳しい米国共産党と日本人部の歴史は、当時の日本外

事警察が収集しえた限りでの「オモテ」の情報であり、それを宮城に——おそらく拷問をも加えて——訊問し、自分自身の知り得たことにさせて、サインさせたものにすぎない。例えば米国共産党には「東洋民族課」など存在しない。それは日本人部書記局がコミンテルン東洋部と直結していたことの混同であり、宮城ではなく、日本特高外事警察の調査の限界である。宮城は「日本人部」だから「民族運動として共産主義を実行」と言われているが、日本人部の「ウラの顔」に属する活動は、民族運動どころか民族の違いを越えて秘密の国際活動に従事することであつた。

米国共産党のこうした二重の性格を見極めたうえで、以下、米国共産党日本人部について、これまでわかつてきた限りの史実を私なりに再構成することで、藤井一行教授遺稿「コミンテルンと日本人粛清」への追悼寄稿にする。藤井教授にならつて、可能な限り第一次資料に立ち返つて検討し、政治的に作られた共産党系の公式見解、日本の官憲文書などは批判的に扱う。

それは通常日本共産党史の対象とはされないが、日本共産党内指導部が壊滅した一九三〇年代後半、野坂参三や山本懸蔵の指導でソ連から日本にコミンテルン工作員を派遣する活動に関わることによって、知られざる日本共産党史の一部ともなっている。

四 ゾルゲ事件被告宮城と徳が見た米国共産党の日本人

宮城と徳手記における日本人活動家——石垣榮太郎、鬼頭銀一、矢野努、藤井教授が参照したように、『現代史資料 ゾルゲ事件』(みすず書房)所収の宮城と徳の警察・検察・予審訊問調書、予審終結決定等には、時

に米国共産党日本人部の歴史が出てくる。一九四二年四月七日付け「宮城与徳手記」には米国共産党の「三 日本人の参加せる党活動に就いて」の項があり、米国共産党日本人部の活動を歴史的に概観している。

① 一九一九年頃東部ニューヨーク中心に、片山潜（一九二二年入ソ）、田口運蔵（ニューヨーク労農学校出身）、西村義雄（加州在住）、

② 一九二三、四年 西村義雄、山辺清、矢田某、石垣榮太郎、鬼頭某、矢野某等の同志が初期的な党運動に参加した模様であります、

③ アメリカ西部加州方面に於ける党活動は一九二五年頃よりサンフランシスコ市、ロスアンゼルス市を中心として初期的な運動があり其の経過は左記の通りであります（昭和一七年四月七日、『現代史資料三 ゴルゲ事件三』三三七頁）。

ここで宮城は、米国共産党結成に加わった片山潜グループ以後の一九二三・四年の日本人共産党員活動家として、「石垣榮太郎、鬼頭某、矢野某」を、この順序で挙げています。画家石垣榮太郎は、戦後アメリカでの「非米活動」弾圧、ゴルゲ事件がらみのアグネス・スメドレー攻撃、マッカーシズムに巻き込まれたこともあって、妻石垣綾子の『さらばわがアメリカ―自由と抑圧の二五年』（三省堂、一九七二年）、『海を渡った愛の画家―石垣榮太郎の生涯』（御茶の水書房、一九八八年）等では、片山潜・田口運蔵らの在米日本人社会主義者団、社会主義研究会、日本人労働者クラブ、ジョン・リード・クラブ、アメリカ美術者会議、日米市民委員会等での活動が語られている。だが米国共産党への帰属は、注意深く避けられてきた（特に「宮城手記」の上記供述をもとにFBIから追求された『さらばわがアメリカ』三五四～三六四頁、石垣綾子『回想のスメドレー』みすず書房、一九六七年、『美しき出会い』ドメス出版、一九八三年、『石垣綾子日記』上下、岩波書店、一九九六年、石垣榮太

郎「アメリカ放浪四〇年」『中央公論』一九五二年六〇九月号、等をも参照）。

また、宮城与徳のいう「鬼頭某」とは、上海でゾルゲと尾崎秀実を結びつけたゾルゲ事件の「隠れたキーパーソン」鬼頭銀一のこと、加藤『ゾルゲ事件』（平凡社新書）に詳述した。「矢野某」とは、西海岸の運動指導のために、アメリカ共産党本部からカリフォルニアに派遣された米国共産党日本人部指導者矢野努（本名豊田令助（党名武田、水野等）で、一九三一年に宮城を共産党に勧誘し、三年にコミンテルンの特殊任務での日本帰国を命じた直接の担当者であった）。

西海岸における共産党日本人活動家群像

「宮城与徳手記」の供述する米国共産党日本人部のカリフォルニアの運動（『現代史資料三』三三七頁以下）を、年表風に要約すると、以下のようになる。供述記録をまとめたためか、日本人の氏名表記等には混乱があるが、そのまましておく。宮城というよりも当時の日本官憲が米国共産党に関係した日本人の活動を概観した記録である。

一九二五年 社会問題研究会（ロスアンゼルス）の屋部憲伝、又吉淳、幸地新政、中村幸輝、宮城与徳らが創設、ニューヨークから矢野、高橋、ハーバード・ハリス、フィスター参加、ロスアンゼルスで山口東栄、箱森改造、福永与平、堀内鉄二、柳井、大畑孝一、サンフランシスコから健物貞一参加）。

一九二五―二六年 黎明会に改組・マルクス主義化。

一九二七年 共産主義者は階級戦社に改組（矢田某、高橋某、山口鋭之助、堀口哲二、柳井某、大畑孝一、中村幸輝、箱森改造、健物貞一、機関紙「階級戦」、黎明会の哲学者屋部憲伝、無政府主義的傾向の小説家

又吉淳、画家宮城与徳は排除される。

一九二八年 日本人労働協会（サンフランシスコの健物貞一を中心に二六年創設の米国共産党加州支部が「階級戦」を週刊「労働新聞」に改称し大衆活動、党員はサンフランシスコに健物、松井某、小林勇、吉岡某、赤木鉄、西村某、名倉謙次、名倉宏、由比某ら、ロスアンゼルスに吉岡某、赤城鉄、浜清、島正栄、宮城与三郎、幸地新政、吉元重喜、照屋忠盛、又吉淳ら、堀内はニューヨークに、矢田は日本帰国、高橋、柳井、大畑は党脱退）。

一九二八年末 赤色救援会日本人支部（サンフランシスコ、ロスアンゼルス）組織。

一九二九年夏 文化団体「プロレタリア芸術会」（ロスアンゼルス、党員吉岡某・赤城鉄指導、宮城、留学生東、屋部憲伝、又吉淳、松田仁吉、松田露子、浜際、森百太郎、石塚某女史、北林智、八巻千代ら入会）。

一九二九年 「サンフランシスコに於いて健物、小林が米国官憲に検挙」

「昭和四年末健物の検挙によりニューヨーク党本部より新に組織者として矢野（又は武田）がサンフランシスコに來た。又堀内がロスアンゼルスに帰って運動を助けたが間もなく堀内、山口は官憲に検挙された」。

一九三〇年 米国共産党第一三区加州支部組織者にサム・ダーシー赴任、党の拡大強化・大衆運動組織、日本人部は支那人・比島人と共に東洋民族課に解消、來米した鈴木文治・加藤咄堂・賀川豊彦・西田天香・浅原健三・田原春次・木村毅・大山郁夫らの排撃運動、米国官憲彈圧のロングビーチ事件で箱森、福永、西村、宮城与三郎、長浜、島、又吉、吉岡、照屋検挙により日本人部中心メンバー壊滅。

一九三一年 ニューヨークから吉元重喜が帰ロスアンゼルスで平原某、赤城鉄（竹本）、浜清ら党再建、二世の山田、斉藤某、小田ジョージ、

石井らのほか、吉田某、中村幸輝、神川某、浜清、平良伝蔵、屋部憲伝、北林智ら入党。サンフランシスコでは矢野を中心に、山田、松井、名倉宏、由比、井上元春（後総領事館スパイとして除名）らが党活動。宮城与徳は、病弱のため、「党組織者矢野との特別の了解」で一般党員の関知しないかたちで入党。大衆団体「プロレタリア芸術会」「マルクス主義経済研究会」「赤色救援会日本人支部（赤城鉄、浜清、中村信義、松田仁吉、松田露子、上山平八、山川浦路、八巻千代、漆畑達夫、屋部憲伝、門脇仁一、石塚某女史、森百太郎、浜際某ら、北林智は矯風会に入会し脱会）」。ロングビーチ事件党員は国外追放判決後入露。

一九三二年 党日本人部は彈圧で解消、二世の斉藤、小田、石井、山田らに主導権。

一九三三年 党活動不活発で、日本人党組織は対日本通信網組織を企図、一〇月、宮城与徳はサンピードロから日本へ。

ソ連に入った「アメリカ亡命組」とゾルゲ事件の「ロイ」

ここで述べられた米国共産党員のうち、ロングビーチ事件検挙者ら強制送還命令を受けた一七人のほとんどは、日本に帰国せずにソ連に亡命し、旧ソ連在住日本人中の「アメリカ亡命組」となった。一九三一〜三三年にソ連入国後、消息不明となったため、アメリカ西海岸の日系共産主義者たちにとっては長く謎であったが、一九九一年のソ連崩壊後、一九三六〜九年のスターリン肅清最盛期にほとんどが「日本のスパイ」として銃殺刑ないし強制収容所（ラーゲリ）送りになったことが判明した。私はそれらの犠牲者の足跡を辿り、またご遺族を探し出して、異国での死亡の事情や墓地・命日・遺品を伝える活動を進めてきた（加藤『モスクワで肅清された日本人』、『国境を越えるユートピア』、ネチズンカレ

ツジHP「旧ソ連日本人粛清犠牲者・候補者一覧」(参照)。

「宮城与徳手記」はまた、一九四一年八月にロスアンゼルスから一時帰国した赤城鉄二竹本康雄から聞いた情報として、三四年にコミンテルンの介入で党組織者矢野某二矢野努(党名武田・水野ほか、本名豊田令助)が失脚・除名、矢野を支持した赤城、仲村幸輝らも除名されたこと、平塚某らのスパイ事件があり、以後、斉藤・小田ら「二世」中心の活動となったことを供述している。

よく知られているように、宮城与徳自身のゾルゲ諜報団二ラムゼイ機関への参加は、「昭和五年末モスコ」から帰国したカリフォルニア地区米国共産党指導者矢野努の勧誘によるもので、三一年秋、党の会合に出席しないでよいという特別のかたちで入党、同年末矢野と「白人の男」から日本帰国を指示され、ロスアンゼルス在住米国共産党員「ロイ」と連絡、三三年一〇月頃、矢野と「ロイ」の指示でゾルゲ・グループに合流したという(第二八回検事尋問調書、昭和一七年三月三〇日、『現代史資料三』三一〜二頁)。

この「ロイ」が何者であるかは、F・W・ディーキン二G・R・ストーリーの「宮城与三郎」説(『ゾルゲ追跡』筑摩書房、一九八〇年、一〇八〜一〇頁)からジェームズ小田『スパイ野坂参三追跡』(彩流社、一九九五年)、佐藤正『野坂参三と宮本顕治』(哲学研究会、二〇〇一年)らの「野坂参三」説まであり、長く謎とされていたが、渡部富哉が独自に入手した旧ソ連秘密資料を用いて、ハワイ出身米国共産党員「ジャック木元二木元伝一」と特定した(渡部「野坂参三、もうひとつの仮面を剥ぐ ロイと呼ばれた男の正体」『諸君』一九九八年七月、「ゾルゲ事件で獄死した画家宮城与徳を日本に派遣したロイと呼ばれる男は日系共産党員木元伝一だった」渡部『野坂参三とゾルゲ事件の深層を追う』社会

運動資料センター、二〇〇一年)。

米国共産党カール・ヨネダは「ウラの共産党」を知らなかった

ゾルゲ事件の裁判記録にでてくる米国共産党員「鬼頭銀一」については、戦前・戦後の米国共産党内日本人指導者として著名だったカール・ヨネダの『在米日本人労働者の歴史』(新日本出版社、一九六七年)が、戦後ゾルゲ事件を世界に知らしめたGHQ二G2のウイロビー報告の謀略性に注意を喚起し、宮城与徳と北林トモのアメリカでの活動に言及しながら、「なお『ゾルゲ事件』の中には、米国の日本人共産主義者キト・オイニチなるものが、一九三一年頃に上海でゾルゲとあつたとあるが、彼のアメリカにおける記録は不明である」として、鬼頭の存在そのものを否定した(一二五〜一六頁)。ヨネダはまた、宮城与徳の一九三三年一〇月初旬の日本への渡航については、「この間の詳細ないきざつはまだ発表の時期ではない」と、思わせぶりな書き方をしている(一二四頁)。

「宮城手記」の「矢野某」にあたる「豊田令助(矢野努)」については、四一年八月日本での逮捕直前に宮城与徳に日本人党员情報を提供した竹本康雄(赤城哲)と共に、一九五〇年マッカラン法で「もと共産党員にぞくしていた」理由で日本に送還された一人としてさりげなく述べるに



とどめ、野坂参三の在米対日工作の助手「鵜飼宣道(小出ジョー)」については、戦後マッカーシズム下の非米活動委員会で「同志」を売った「裏切り者」「無節操な脱落者」としている(同

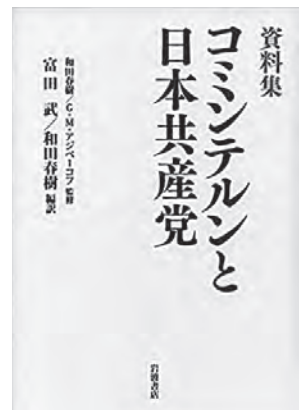
書一一〇、一一九、一二〇頁）。

もつとも、戦後米国共産党の日本人スポークスマンであるカール・ヨネダのこの本は、彼の日本共産党および野坂参三との蜜月時代に、日本共産党系の新日本出版社から、日本語で出された。後述するカリフォルニア大学ロサンゼルス校図書館所蔵「カール・ヨネダ・ペーパーズ」等に照らしてさえも、多くの作為と改竄がある。鬼頭銀一や宮城与徳についての上記の記述が、著者自身によるものか、野坂参三ら一九六七年刊行当時の日本共産党側の手が加えられたものかは、判断としない。

要するに、カール・ヨネダも戦後の日本共産党も、戦前米国共産党の「ウラの顔」を、よく知らなかった。それが、一九七〇年代後半、当時の日本共産党副委員長袴田里見による宮本顕治委員長批判とジェームズ小田証言に依拠した「スパイ野坂参三」告発につながった。野坂はこの段階ではカール・ヨネダと組んでジェームズ小田説を否定し袴田を除名したが、ソ連崩壊後にコミンテルン秘密文書が出てきて、野坂も袴田も旧ソ連共産党の対日工作エージェントであったことが判明した。つまり、戦後日本共産党史を解明するには、戦前米国共産党日本人部の二重性の理解が不可欠なのである（学術的には問題が多いが、袴田里見『昨日の同志宮本顕治へ』新潮社、一九七八年、ジェームズ小田『スパイ野坂参三追跡』彩流社、一九九五年、不破哲三『日本共産党にたいする干渉と内通の記録 ソ連共産党秘密文書から』上下、新日本出版社、一九九四年、不破『スターリン秘史』全六巻、新日本出版社、二〇一五～六年、など参照）。

ソ連崩壊で一新された研究・史資料環境

これらを解明するためには、「アメリ亡組」のほか、宮城与徳、鬼頭銀一、



ジョー小出らが所属した米国共産党とその日本人部について、改めて検討する必要がある。幸い、そのための史資料的条件は、一九九一年ソ連崩壊後、飛躍的に広がった。

その第一は、旧ソ連共産党の所蔵したコミンテルン秘密文書の公開である。わが国では、秘密文書を用いた加藤昭・小林峻一『闇の男―野坂参三の百年』（文藝春秋社、一九九三年）が日本共産党最高指導者野坂参三の失脚・除名をもたらし、和田春樹・アジベークフ編のロシア語版資料集『ソ連共産党、コミンテルンと日本 一九一七～一九四一』（モスクワ、二〇〇一年）が刊行され、日本語版は二〇一四年に出版された（富田武・和田春樹編訳『資料集 コミンテルンと日本共産党』岩波書店）。

アメリカでも事情は同じで、一九二〇～四〇年代の米国共産党関係文書が、米ロ両国研究機関の協力で一九九五年に米国議会図書館に集大成され、二〇〇〇年から世界の研究者に公開されている（Library of Congress Opens to Researchers the Records of the Communist Party, USA, Microfilm Includes 435165 Frames on 326 Reels）。それはすでに多数の英文研究書で使われ、H・クレア・J・E・ヘインズ『F・F・フィリップス編『アメリカ共産党とコミンテルン』（五月書房、二〇〇〇年）という邦訳書も出ている。

ただし、米国共産党日本人部の史資料自体は、なお膨大なマイクロフィルムの中の埋もれており、一つ一つを発掘していく段階にある。前掲フォーラー女史の博士論文は、健物貞一ら「アメリカ亡命組」日本



人や中国・朝鮮・フィリピン人労働者の「オモテ」の西海岸共產党・労働運動中心で、矢野努以外の「ウラの顔」に言及することは少ない。しかし彼女が研究のために収集した英露日中語史資料が、「ジョセフィン・フ

ォラー・ペーパーズ Josephine Fowler papers, 1883-2005」としてカリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) ヤング図書館に五一ボックスが寄贈され整理・保存されている。本稿と共に第一次資料にもとづく端的的研究で、これからの研究の宝庫である。

第二に、アメリカ日系労働運動の戦前からの指導者で、一九六七年の『在米日本人労働者の歴史』のほかに自伝『がんばって 日系米人革命家六〇年の軌跡』(大月書店、一九八四年)で知られるカール・ヨネダ(「宮城与徳手記」では「浜清」)が収集した、米国共産党日本人部機関紙『階級戦』『労働新聞』『同胞』等アメリカにおける日本人共産主義運動の第一次資料が、カリフォルニア大学ロサンゼルス校ヤング図書館に寄贈され、「カール・ヨネダ・ペーパーズ Karl G. Yoneda Papers, 1928-1989, 31 boxes and 1 oversize box」としてアクセス可能である。二〇〇五年以降、日本でも国立国会図書館憲政資料室でマイクロフィルムを閲覧できるようになった。

第三に、近年日本における戦前内務省・司法省・外務省や外事警察関係の史資料が復刻版等のかたちで蓄積され、当時の日本官憲からみた在米日本人左翼活動の観察・諜報記録も集積されてきた。国立公文書館・外務省史料館・防衛省防衛研究所戦史研究センター所蔵の機密解除され

た公文書は、「アジア歴史資料センター(アジア歴)」のウェブサイトを通じて、世界中どこからでもアクセスし、ダウンロードできるようになった(後述)。

第四に、かつてゾルゲ事件関係調書以外は、カール・ヨネダ、坂井米夫の回想ぐらいしか参照できなかったアメリカ共産党日本人部関係者の証言・回想・史料・研究が、整ってきている。石垣綾子の一連の書物や米国共産党日本人部機関紙『労働新聞』の後継紙『同胞』復刻(御茶の水書房、一九八八年)以外にも、ニューヨークの芳賀武「紐育ラプソディー」ある日本人米共産党員の回想(朝日新聞社、一九八五年)、西海岸のハロルド小野らを扱った竹国友康『リトルトウキョウ物語―日系コミュニストとその子孫たち』(四季書房、一九七八年)、野本一平『亜米利加日系崎人伝』(弥生書房、一九九〇年)、同『宮城与徳―移民青年画家の光と影』(沖縄タイムス社、一九九七年)、伊藤一男『桑港日本人列伝』(PMC出版、一九九〇年)、岡繁樹についての岡直樹・塩田庄兵衛・藤原彰編『祖国を敵として―在米日本人の反戦運動』(明治文献、一九六五年)、河上清についての古森義久『嵐に書く―日米の半世紀を生きたジャーナリストの記録』(毎日新聞社、一九八七年)、八島太郎・光子について宇佐見承『さよなら日本―絵本作家・八島太郎と光子の亡命』(晶文社、一九八一年)、野田英夫についての窪島誠一郎『漂白―日系画家野田英夫の生涯』(新潮社、一九九〇年)等々である。これらは、米国共産党日本人部の活動を内側ないし周辺から描いた、貴重な証言・研究である。

「ウラの顔」のキーパースンの一人であるジョー小出の自伝『ある在米日本人の記録』上下(有信堂、一九七〇年)や大森実のインタビュー(大森『戦後秘史三 祖国革命工作』講談社、一九七五年)、野坂参三自

伝『風雪のあゆみ』全八巻（新日本出版社、一九七二～八九年）、野坂と小出を「スパイ」と告発するジエームズ小田『スパイ野坂参三追跡』（彩流社、一九九五年）、ジョー小出、石垣綾子らの戦時米軍宣伝活動への協力を明らかにした春名幹男『秘密のファイル—CIAの対日工作』（新潮文庫、上下、二〇〇三年）等も、重要な検討材料になる。二二世紀に入って機密解除された、米国立公文書館のナチス及び日本帝国戦争犯罪記録中にも、膨大な日本共産党関係文書と共に、米国共産党の日本人関係資料が入っている（加藤「戦後米国の情報戦と六〇年安保—ウィロビーから岸信介まで」『年報 日本現代史』第一五号、現代史料出版、二〇一〇年）。

なお、私自身の調査・研究は、もともと国崎定洞、千田是也、勝本清一郎らの在独日本人反帝グループ、ドイツ共産党日本人部の研究から出発している。一九二九～三四年頃、ドイツ共産党の中にも日本人部があり、在独日本人たちの反戦・反ナチ活動が行われていた。その中で、ナチス・ドイツを逃れてモスクワに亡命した国崎定洞、小林陽之助、佐野碩らは、モスクワではコミンテルン本部の片山潜、野坂参三、山本懸蔵らの指導下に入った。「宮城与徳手記」に登場してソ連に亡命した米国共産党員たち―健物貞一、堀内鉄次、小林勇、西村銘吉、宮城与三郎、又吉淳、島正栄、照屋忠盛、山城次郎、山口栄之助、福永与平、永浜丸也・さよら「アメリ組」メンバーは、ベルリンから亡命した国崎定洞や小林陽之助らと一緒に、東方勤労者共産主義大学（クートベ）に学び、外国人労働者出版所、東洋学専門学校等で働いていた。

ところがその彼らが、一九三六～三九年に―野坂参三により日本に派遣され逮捕された小林勇と小林陽之助を除き―ほぼ全員が逮捕され、肅清されていた。そうした記録を旧ソ連秘密資料から発掘し、野坂参三と

山本懸蔵が高谷覚蔵、神達八郎、飯塚博、小林勇、伊藤利三郎、小林陽之助らを日本に送り込もうとした足跡を追いかけている過程で、米国共産党日本人部全体の探求の必要に突き当たった。

また特に、米国共産党員で日本人グループの指導者、『階級戦』創刊者であった健物貞一のご遺族が、二〇〇一年にロシアと日本で見つかり、貞一がロシアに残した遺児アラン・ササキ氏の二〇〇二年来日を機に、ご遺族、藤井教授らと共に波瀾万丈の生涯の資料を追いかけていくと、その射程は、早稲田大学建設者同盟、米国西海岸労働運動、米国共産党日本人部、旧ソ連在住日本人粛清のみならず、ゾルゲ事件、野坂参三らのアメリカからの反戦反ファシズム宣伝、中国での抗日統一戦線、アメリカの対日・対中諜報活動と戦後中国・アジア政策、戦後占領期の米ソ・米日・米中関係、マッカーシズム等へと広がった。日米戦争、日本占領、中国革命との関わりをも視野において、分析する必要がある。

五 日本官憲による米国共産党の監視記録

―上海での鬼頭銀一検挙による飛躍―

在米日本社会主義者は日本の社会主義・共産主義思想の供給源

よく知られているように、日本の社会主義思想・運動の一大根拠地はアメリカ合衆国であった。日本政府は、明治四一（一九〇八）年七月の『社会主義者沿革 第一』以来、在米日本人を含む社会主義者の動向を、注意深く監視してきた。大正三（一九一四）年以降、『社会主義者沿革』は『特別要視察人状勢一覧』『社会運動の状況』等に拡充され、天皇制国家の上層部にのみ配布される諜報活動を記録していた（『続 現代史

資料『社会主義沿革』第一・二巻、みずす書房、一九八四・八六年）。事実、アメリカで発行された初期社会主義の『革命』『週刊労働』等日本語新聞・雑誌では「天皇の廃止」が公然と語られ、日本の政局にも影響を与えていた（山県有朋による第一次西園寺内閣倒閣、一九〇八年）。

大逆事件直後の明治四四（一九一一）年七月には、『米国ニ於ケル日本人社会主義者無政府主義者沿革』（復刻版、鈴木茂三郎・社会文庫編『在米社会主義者・無政府主義者沿革』柏書房、一九六四年）まで作られ、幸徳秋水、片山潜、安部磯雄、加藤時次郎らの滞米中の活動のみならず、岩佐作太郎、竹内鉄五郎、植山治太郎、小川金治、岡繁樹ら移民としてアメリカ合衆国に根づいた日本人左翼に対しても、警戒の眼を怠らなかつた。

一九一七年ロシア革命の勃発と一九年コンテルン＝世界共産党の創立は、日本の米騒動や朝鮮三一運動、中国五四運動などアジアの社会運動の高揚をもたらした。アメリカと日本の共産党結成に力を尽くした片山潜、野中誠之、田口運蔵、鈴木茂三郎、猪俣津南雄、間庭末吉、渡辺春男らの「在米日本人社会主義者団」は、当時のコンテルン中央もアメリカ政府も、これを「日本共産党」とみなしていた。

今日、大正末期以降の内務省・外務省・司法省等の史資料が膨大に復刻されているが（さしあたり、小森恵『社会運動・思想関係資料案内』三二書房、一九八六年、荻野富士夫『特高警察関係資料解説』不二出版、一九九五年、参照）、在米日本人左翼の活動についての記述も、さまざまな資料に散見される。荻野の編纂した『特高警察関係資料集成』第六巻（不二出版、一九九一年）には、一九一一年の内務省警保局『在米社会主義者・無政府主義者沿革』のほか、外務省「在米国邦人社会主義者の状況」（一九〇九年）、内務省警保局「米国在留特別要視察人ノ状況大

要」（一九一八年）、内務省警保局「在外邦人過激主義者ノ状況」（一九二二年）等が収録されている。

鬼頭銀一供述による米国共産党日本人部への注目

「第六十議会参考資料 極秘」と刻印された、一九三一年末内務省警保局「昭和六年中に於ける外事警察概要 欧米関係」が、荻野富士夫編・解題『特高警察関係資料集成』第十六巻（外事関係、不二出版、一九九二年）に復刻・収録されている。その「第四章 在米国本邦人共産主義者の動向」には、次のように述べられ、一六名の共産黨員リストが掲げられている。

一九二三年米国共産党組織前に於ては、邦人片山潜、石垣某〔栄太郎〕、猪俣都〔津〕南雄、田中〔口〕運蔵、西村義雄等の共産主義者等、アメリカン・ワーカーズ・パーティに加入して米国人同志と共に活動し居りたるが、一九一九年頃片山、田口は入露し、猪俣は其の後帰国し西村、石垣の両名に於て邦人共産主義者をリードし、米国共産党の組織と共に之に入党したり。然れども邦人黨員等は所属党の動きには殆ど拘りなくして日本に於ける共産主義運動の研究にのみ没頭するの实状なりしが、一九二八年頃より米国共産党のラインに従ひ、日常闘争に参加することとなり、一面米国共産党ジャパニーズ・ビューローを組織して在米本邦人労働者を目標としたる赤化宣伝に努力すると共に日本共産党との連絡提携を図りつつあり。機関紙としては週刊「労働」を毎号三千部宛発行し居れるが、本邦内に於ける時事問題に対しアジ的批判を加へたる記事を掲載して屢々内地へ密送しつつあり。又在桑港ジャパニーズ・ビューロー・フラクションに於て発行しつつある機関紙「労働新聞」（月二回発行）も毎号三百部宛印刷せられ常に内地方面へも密送しつつあり。之等

本邦人党員の数に現在約四十名にして其の分布状況は、紐育「ニューヨーク」二〇、羅府「ロスアンゼルス」七、桑港「サンフランシスコ」

一〇、沙市「シアトル」三 なるが、其の判明せるもの左の如し。

この一九三一年内務省警保局報告で、米国共産党党員として挙げられているのは、健物貞一、小林勇、西村銘吉、西村義雄、S 荻野、堀内某、佐々木三郎、二宮某、岡本某、将月某、西野某、石垣某、小池某、長谷川某、鬼頭銀一、奈倉襄二の一六名である。「石垣某 元片山潜の秘書なり」と云ふ」という程度のごく簡単な記述が多いが、当時の指導者である健物貞一、小林勇、西村銘吉、及び鬼頭銀一の四人については、本籍地まで明記され、かなり詳しい。「鬼頭銀一」の項は、以下の通りである。

(二五) 本籍 三重県阿芸郡白子町大字寺屋二五六九 鬼頭銀一(二二九)

大正一四年四月渡米、昭和二年末米国共産党に入党日本人ビュローを確立し其の拡大強化に努め居たるが、昭和四年六月コムインターの指令に基き東支鉄道紛争に絡まる日本側の策動に対し或種の秘密任務(任地到着同志と連絡するまでは不明)を帯び、上海經由京城に向ひたるも時日の齟齬より同志一行に連絡することを得ず、上海に引返して太平洋労働組合書記局関係事務に従事中本年八月実母病気の報に接して本籍地に戻りたるが、其の際治安維持法被疑者木俣豊治が官憲の捜査急なる為め上海方面に逃避せんとするを庇護し之を上海に伴ひて隠匿し居たるを検挙し、犯人隠匿罪として東京地方裁判所検事局に送致、起訴収容せらる。

ここで重要なのは、このリストが、ニューヨークから西海岸まで全米各地の活動家名を含み、全国指導に当たった経験者の情報提供にもづくと思われることである。一六名のうち、健物貞一・小林勇・西村銘吉にも検挙歴・略歴が書かれているとはいえ、彼らはアメリカ官憲による

米国共産党弾圧による検挙で国外追放になり、後にソ連に渡るメンバーである。鬼頭銀一の場合は、上海での日本官憲による治安維持法での逮捕で、日本の特高警察・検察により取り調べを受け、収監され、供述している。日本官憲初期の米国共産党分析としては、この鬼頭情報がもっとも信憑性があり、正確であると考えられる。

『社会運動の状況』では、大正一五(一九二五)年版及び昭和二(一九二七)年版で「社会主義者の国際活動」中「在米邦人社会主義者ノ行動」を、在紐育日本人協会、羅府日本人労働協会、加奈陀「カナダ」日本人労働組合について略説した。主に片山潜らの在米日本人共産主義者団の流れをひくニューヨークの石垣榮太郎、西村義雄の活動、荒川実蔵・高谷寛蔵のニューヨークからの入露を追いかけており、西海岸については、昭和二年版で「羅府日本人労働協会が月刊機関紙『階級戦』ヲ秘密ニ出版」が報告される程度であった。この頃のソ連ウラジオストック、北樺太オハ地区の日本人「赤化宣伝」記録、東方勤労者共産主義大学(クートベ)日本人学生追跡、中国における日本人・朝鮮人「主義者」の内偵に比べれば、在米日本人左翼の情報には少ない。

『外事警察報』では、第五一号(一九二五年九月)の「亜米利加共産党の七年間」、第九四号(一九三〇年四月)の「米国共産党の運動概況」、第一一三号(一九三一年二月)以下の「米国下院共産運動調査報告書」等が一九三一年までに見られるが、米国共産党全体の政策分析で、日本人共産主義者には特化していない。

その中で例外が、『外事警察報』第一〇六号(一九三一年五月)の「米国内に於ける邦人共産主義者の審問」という記事で、パークレーの活動家小林勇が、一九三〇年九月三〇日にサンフランシスコで移民官により逮捕され、三〇年十二月に労働長官の送還命令を受けて控訴中の時点での、

米国移民検査官による三〇年九月二九日付審問書の邦訳が掲載されている。そこで小林勇は、一九二七年米国共産党入党、三〇年一月に健物貞一らと米国共産党日本人部の幹部となった、と述べる。そこには米人弁護士もILD（国際労働者救援会）から派遣され同席しているが、小林が強制送還・国外追放を拒否する審問の途中で、弁護人が「移民検査官はどうして此の共産党員名簿を持つて居るのか」とただす場面がある（一六〇頁）。

日本人だけのものかどうかは特定できないが、当時のアメリカ官憲が、共産主義者を弾圧する目的で活動家のブラック・リストを作っていたわけ、事実、この小林勇逮捕の前後に、健物貞一、堀内鉄次、箱守改造、福永与平、又吉淳、宮城与三郎ら、後にソ連に入り粛清される「アメ亡組」日本人の逮捕が頻発する。当時の在米日本人共産主義者は、米国と日本の双方の警察から、厳しく監視されていたのである。ただし、この英語による小林勇の審問書には、健物貞一以外の日本人名はでてこない。警保局保安課外事係「昭和四年二月 第五七議会参考資料 欧米関係」（『特高警察関係資料集成』第一五巻、不二出版、一九九二年）にも、西海岸共産主義者の活動の記述はない。

ニューヨークから西海岸に移った日本官憲による在外要視察人調査

復刻版等には未収録の、外務省外交史料館資料にも、いくつかの記録がある。「要視察人関係雑纂 本邦人の部」には、一九三一年一月一七日付堀田欧米局長名で内務省・司法省に「在米邦人共産主義者送還裁判二関スル件」が送付され、健物貞一の本籍・年齢・渡航目的・渡航地・滞在期間・学歴・資産・出資保証人、渡航計画及び事情が詳しく報告された報告がある。これが三一年内務省警保局「外事警察概要」資料での

本籍地を含む「健物貞一」情報のもとになったと思われる、私が藤井教授と共に二〇〇一～二二年に行った、健物貞一のロシアと日本におけるご遺族探求・資料収集のさいにも、重要な手がかりとなった（その私家版資料集は、加藤哲郎『忘れられた日本人 健物貞一』二〇〇二年）。

ただし、同じ外務省外交史料館資料でも、在ロスアンゼルス領事館から外務大臣幣原喜重郎宛昭和四年八月八日「邦人共産主義者ノ活動二関スル件」、これに関連した福岡県知事から内務・外務大臣宛昭和五年八月八日「ロスアンゼルスニ於ケル邦人共産主義者ノ身許調査二関スル件」のように、健物貞一と同じくアメリカで検挙された堀内鉄次について、本籍地門司市まで行つて詳しく調査しながら、三一年「外事警察概要」には反映されなかった例もある。「宮城与徳手記」にあるように、堀内鉄次は二八～九年に一時ニューヨークに滞在したため、三一年「外事警察概要」には「堀内某 紐育に居住して自動車運転手に従事す」とあるのみで、カリフォルニアの活動家堀内鉄次と同一人物だと思わなかったのであろうか、福岡県知事の報告は用いられなかった。三一年鬼頭銀一検挙まで、在米日本人共産主義者の追跡が未だ系統的でなく、外務省と内務省の連携も牧歌的であつた証左である。

以上の検討からすると、どうやら、「鬼頭銀一」の名が初めて現れる一九三一年末内務省警保局「昭和六年中に於ける外事警察概要」は、日本官憲にとつて初めての、米国共産党日本人部についての本格的報告であつたようである。

というよりも、結論的にいえば、日本官憲が上海で治安維持法被疑者木俣豊次の逃亡幫助・隠匿の疑いで検挙した鬼頭銀一は、「大正一四年四月渡米、昭和二年末米国共産党に「日本人ビュロー」を確立」した共産党員で、上海領事館がマークしていた汎太平洋労働組合書記局（PP

TUS)に所属する大物「主義者」であつた。その詳しい供述から、健物貞一らの本籍地も照会・割り出され、「昭和六年中に於ける外事警察概要 欧米関係」の「第四章 在米国本邦人共産主義者の動向」が作成されたと考えられる。

ただし鬼頭銀一は、上海における中国共産党と連絡した秘密活動は一切供述せず、ゾルゲやスメドレー、尾崎秀実らの名を出さなかった。市ヶ谷刑務所で服役後、国際港神戸でゴム販売業を始め、秘かに大阪朝日の尾崎秀実との連絡を復活、三八年に南洋パラオ・ペリリュー島で不可解な食中毒により死亡した(詳しくは加藤『ゾルゲ事件』第六章、参照)。

日本側官憲が、米国共産党日本人部組織者と認定した鬼頭銀一を、刑期満了後に野放しにしていたとは考えにくい。実際、一九三一年六月上海でのヌーラン検挙事件以降、コミンテルンの日本への連絡ルートは、三一年から三三年一月ナチス政権樹立まで国崎定洞、小林陽之助、勝本清一郎らドイツ共産党日本人部があつたドイツ、三四年以降は野坂参三が秘かに入国したアメリカが中心的中継点となつた。日本の官憲の在米共産主義者、特に西海岸在住者への諜報活動は、三二年九月鬼頭銀一逮捕以後、飛躍的に活発になつた。

六 西海岸日本人共産主義者の本格調査

—一九三六年、岡繁樹と小林勇の供述

海外共産党の日本人部に注目した特高外事警察

内務省警保局『外事警察概況』の流れで見ると、一九三二年末「昭和七年中に於ける外事警察概要 欧米関係」では、「米国共産党日本人部

の状況」の項で、「米国共産党と左傾本邦人とは既に同党組織以前より緊密なる関係あり、片山潜、猪俣都南雄、田口運蔵の如き皆然り。而して日本人部は一九二八年頃組織せられ、在米邦人労働者を目標としたる赤化宣伝に努力すると共に、日本共産党との連絡提携を図りつつたる」として、健物貞一、小林勇、西村銘吉の三人の指導者のソ連渡航を経歴と共に詳しく述べ「嘗ては片山潜、田口運蔵の同様事例あり本問題は相当考慮を要すべき」とするほか、『労働新聞』、西村義雄、S・荻野、堀内鉄治、佐々木三郎、二宮、岡本、将田、西野、石垣、小池、長谷川等の黨員名を挙げ、国際労働者救援会(ILD)在米日本人支部の活動に注目する。

この年、内務省はハワイにおける日本人共産主義者の活動にも監視の眼を広げ、また、国崎定洞、勝本清一郎、小林義雄らが在独日本人の反帝活動も取り上げ、特に小林陽之助の海員組合を対象とした活動、野村平爾のバリとベルリンの日本人左翼をつなぐ活動、汎太平洋労働組合と国際海員倶楽部の活動に注目した(『特高警察資料集成』第二六巻)。

翌一九三三年末「昭和八年中に於ける外事警察概要」では、「中華民国関係」で坂巻隆、高原茂らの「中国共産党上海日本人特別支部」の存在に言及された。

日本国内の共産党は、二八年三・一五検挙、二九年四・一六検挙後も高揚したが、「スパイMⅡ中央委員松村Ⅱ飯塚盈延」をも用いた天皇制国家の厳しい弾圧と大森銀行ギャンブル事件、獄中最高指導者佐野学・鍋山貞親からの大量「転向」、宮本顕治・袴田里見らの「スパイ査問致死事件」などで、壊滅しつつあつた。コミンテルンⅡ世界共産党は、もともと党籍を居住国支部におく属地主義を採っており、アメリカ、ドイツ、中国など海外にいる日本人が、在外共産黨員として日本革命に関わり工

同年「欧米關係」の「在外左翼団体の本邦に対する赤化運動及在留米往外国人共產主義者の動靜」は、「近似在外邦人共產主義者は居住地共產党と密接なる連絡をとりて在留本邦人は勿論、我国内に在る左傾分子に働きかくる者相当多数あり、又各地國際海員俱樂部の我国船舶下級乗組員に対する赤化宣伝は年と共に広範圍になりつつある」として、「米國に於ける邦人共產主義者」を多面的に詳しく報告している。

そこでは、それまでのニューヨーク中心の状況分析を、「米国に於ける邦人共產主義者の大部分は桑港及羅府地方に居住し居れる」として西海岸中心に改め、「米国に於ける共產主義者の取締は本邦に比して頗る緩」と嘆きつつ、「諸情報を総合」して「一 桑港方面に於ける邦人共產主義者」を、党勢、機関紙『労働新聞』『太平洋労働者』、活動拠点、「邦人共產黨員として判明せる者」として矢野リュージョー、松井周次、村田俊夫、由井某、河合某、「ILD（国際労働者救援会）会員」として石毛忠雄、奥澤某、遠藤千之、池田豊耕ら一〇人の年齢・職業・略歴、「其他関係人物」として『労働新聞』『太平洋労働者』を印刷する金門印刷所主岡繁樹の名を挙げる。

「二 羅府方面」では、「1 米国共產黨羅府支部所属団体表」約四〇団体と主な活動家名、「2 労働新聞第百号に掲載されたる在羅府邦人共產主義者名簿」として奈倉ジョージら一四一名のリスト、「3 昨年中追放されたるもののリスト」として入露した福永与平、箱守改造、崎山シチヨウ、山下尚、西村銘吉、小林勇、堀内鉄治、山口榮之助、劔持貞一、平礼二の一〇人の本籍地、離米年月、行先を挙げ、「4 在羅府日本人共產主義者及シンパ表」として、党員票番号・姓名・居所・所属支部・細胞を付した実に一四〇名プラス「5 補遺」三三名計一七三名

「三 米国北西部」では、船員中岡保供述にもとづく日本人労働者同盟の活動と五人の氏名・年齢・特徴が掲げられている。

この「昭和八年中に於ける外事警察概要　欧米関係」の記述、特にサンフランシスコ、ロスアンゼルス（人名等の重複や誤記はあるにしても）、党員票番号等内部事情に詳しいものでなければ到底収集しえない個人情報、膨大に含んでいる。これらは最新の活動状況まで収録し、ロスアンゼルス（の街区細胞名まで書いて）いることからして、市ヶ谷刑務所に服役中の鬼頭銀一供述だけでは作成しえない。日本領事館による「内偵」＝スパイの潜入をうかがわせる。「宮城与徳手記」によると、この頃までに、アメリカ共産党員井上元春が「日本領事館のスパイ」として除名されている。カール・ヨネダによれば、井上元春は、一九三二年二月二六日に傷害事件を起こし、その裁判で「自分は領事館より日本人共産主義者の取締り役をひきうけている」と証言して姿をくらましたという（『在米日本人労働者の歴史』一一一頁）。そして、その井上元春の名は、総計二〇〇名近いこの年の「共産主義者及シンパ表」に見あたらない。

三三三 西海岸日本人共産主義者リストに北林トモ、宮城の名

その代わりに、「4 在羅府日本人共產主義者及シンパ表」には、後のゾルゲ事件と関係する「党員票番号四四 北林トコ 第三五街細胞（番号不明）宮城（街区不明）」という記述がある。「宮城」だけでは、ソ連に渡り肅清された与徳の従兄与三郎もいて特定しにくいが、宮城与三郎は、三一年春に六年間連れ添った妻八巻千代と離縁し、北林与三郎・徳は、

トモ夫妻宅に下宿していた。一九四二年四月一二日に書かれた宮城の手記「略歴及思想推移過程」によると、宮城は三二年四月―五月に北林夫妻のもとに寄宿したというから、このリストの北林トモが監視されていたれば、すぐに宮城と徳に行き着く（『現代史資料 三』三一五頁、ただし野本一平『宮城と徳』沖縄タイムス社、一九九七年、一三三頁では、宮城の離婚・北林宅転居は、入党と同じ一九三一年という）。

事実、治安維持法関係の著名な弁護士布施辰治所蔵資料で、私が名古屋女子短大森正教授（当時）から譲り受け、渡部富哉が復刻した『国際共産党諜報団（ゾルゲ）事件の検挙――新たに発掘された全国特高警察官ブロック研究会における特高一課第二係長警部宮下弘の報告 昭和十八年三月』（社会運動資料センター、二〇〇一年）という警察秘密資料のなかで、宮下弘は、特高警察が帰国し和歌山にいた北林トモを内偵中、「アメリカの共産党の調べをしてあるものを調査を致して見ると、北林トモ三十六番街班という記録が出てきた。それで本人がアメリカの共産党に在籍して居つた者だと言ふことが大体見当がついた。して見ると之はロシアのスパイとコミンテルンのスパイだと言ふ風に考え」て北林トモの検挙に結びつけたことを、誇らしげに語っていた（一三三頁）。

ただし、「北林トコ 三五街」と「北林トモ 三十六街」の微妙な違いがある。その点は、渡部富哉らゾルゲ事件研究者が苦勞して入手した「参考綴 警保局外事課 一九四四―四五」という「大日本帝国政府」便箋に和文タイプで綴られた在米共産主義者四〇〇人余の名簿で補われる。上記三三年リストが更に追補拡大されたリストで、三四年以後のどこかで作成されたと思われるが、タイトルも作成年月日もない。アメリカのPーランガーR・スヴァーリン『日本の赤い旗』は、一九三九年内務省作成としている（一九五三年、コスモポリタン社、三四九頁）。そ

してそこには、「キタバヤシトモ 三十六番街」と記されている（資料は渡部富哉提供、加藤「ゾルゲ事件」参照）。

ある種の見方からすれば皮肉なことに、上海で尾崎秀実をゾルゲに引き合わせた鬼頭銀一の検挙に始まる米国西海岸日本人共産主義者の本格的内偵が、八年後に、ゾルゲ諜報団総検挙の端緒に結びつくのである。

岡繁樹供述―三六年『外事警察概況』の米国共産党日本人分析

一九三五年末に創刊された内務省警保局編『昭和十年に於ける外事警察概況』では、「欧米関係」の「左翼運動の国際的連絡」冒頭で「在米邦人共産主義運動の状況」を取り上げ、「最近本邦に於ける共産主義運動取締施設の充実完備並満州国の成立其他国際情勢の変化等に鑑み浦塩上海等よりする本邦に対する赤化路線のみを以ては其の不利困難なることを覚知せるコミンテルンに於ては、近似米國方面より在米邦人共産主義者等を利用して本邦船員、各種労働団体、左翼新聞雑誌関係者其他に對し邦文共産主義宣伝印刷物を配布若は送付するの手段を採用し旺に同方面よりする赤化宣伝に活躍しつつあり」と述べ、ニューヨーク、ロスアンゼルス、サンフランシスコに加え、カナダのバンクーバーにも約四〇名の日本人カナダ共産黨員がいて、『国際通信』『労働新聞』『海員新聞』『太平洋労働者』『日本海員諸君に訴ふ』『或る兵士の手記』『ファシズムと戦争』『英國海軍事情』『海の叫び』『新婚アパート』などの日本語左翼文書が郵送、海員ルートで日本に持ち込まれている事態が詳しく分析された。ただし、個人名を挙げた流入ルートの説明は、まだ出ていない。

この流れで、翌一九三六年末の『昭和十一年に於ける外事警察概況』は、日本官憲にとつての在米日本人共産主義運動解明に、大きな飛躍があつ

たことを示している。この年「欧米関係 左翼運動の国際的連絡」では、「一 米国共産党の組織概要」「二 対日宣伝」「三 米国共産党第十三区所属日本人支部の結成経過」「四 米国共産党並に日本本部発行の各種機関紙、定期刊行物」「五 米国共産党日本本部関係邦人の検挙」「六 海外よりの左翼宣伝印刷物発見状況」が、実に八〇ページ以上に渡って詳細に報告されている（二八二〜三六四頁）。

この膨大な情報収集のもとになったのは、三十一年の鬼頭銀一検挙情報のもたらした意味に照らしてみると、おそらく「五 米国共産党日本本部関係邦人の検挙」中の誰かからであると見当がつく。実際そうであった。日本側官憲からすれば思わぬ情報源が、アメリカから飛び込んできた。片山潜、幸徳秋水、堺利彦らの古い友人で、サンフランシスコの金門印刷所主岡繁樹の訪日である。岡繁樹は、長く海外にありながらも、大正期日本官憲の「特別要視察人」の一人であった（「特別要視察人状況 勢一班 第六」『続・現代史資料一 社会主義沿革一』みすず書房、一九八四年、四五〇頁）。

ただしこの岡繁樹供述については、その三六年来日のとばっちりで検挙された荒畑寒村の屈辱の供述と共に、一度「反骨の在米ジャーナリスト岡繁樹の一九三六年来日と偽装転向」という論文で詳しく紹介・解説してある（二〇世紀メディア研究所『インテリジェンス』第四号、紀伊国屋書店、二〇〇四年五月）。この論文を収録した拙著『情報戦と現代史』（花伝社、二〇〇七年）の参照を求め、ここでは岡繁樹供述をもとにして日本の特高外事警察がまとめた「三 米国共産党第十三区所属日本人支部の結成経過」のさわりのみを収録しておこう。

古参の社会主義者である岡繁樹は、米国共産党に加わることはなかったが、サンフランシスコ金門印刷所主として、常に日本人左翼グループ

に付き添ってきた。党員ではないが、党に近いいわば同伴者としての証言で、日本人党内部の対立にも触れている。

大正十一年桑港在留邦人労働者、池田豊作（秀雄）小林勇、岡繁樹、松井周二、健物貞一等の左翼分子が中心となり在米邦人労働者の団結を目的に、マルクス主義による階級戦社を創立し、機関紙「階級戦」を発行し同志の獲得、主義の宣伝に努めたる結果、桑港に於て、三浦武雄、武島建二、奈倉ジョージ、奈倉弘、瀧尾義雄、M、小池、由比直躬、又羅府に於て、箱守改造、福永興一等の同志を獲得し、活発なる活動を続け居れる内、其の中心が次第に同志中最も戦闘的分子なりし健物貞一、松井周二、等の手に移るに従ひ、階級戦社は兩名を中心とせる労働倶楽部の結成となり機関紙「階級戦」は「大衆」となり「労働」と改題さるるに至り、更に昭和二年健物貞一、松井周二等の米国共産党に正式入党を許可されると共に労働倶楽部は愈々正式に米国共産党第十三区支部に所属するに至り機関紙、「労働」は更に「労働新聞」と改名し爾来同党の指導下に入り資金の補助を受け其の活動範囲も亦、桑港「サンフランシスコ」を中心に、羅府「ロスアンゼルス」、沙市「シアトル」、櫻府「サクラメント」、フレズノ等の各都市に拡大し益々活発なる活動を開始するに至れり。

而して、昭和三年初め、黨員三浦武雄、井上元春一派は、健物貞一派との意見の対立による内部闘争により一時機関紙の発行も中止し活動も衰微せんとせるも当時在紐育第二区所属邦人黨員矢野某（本名後藤）が桑港に派遣せるるに及び矢野は健物貞一派を支持し異分子を清算し機関紙「労働新聞」を再刊再び活動を開始せるが、昭和六年六月、桑港日本新聞社争議に際し同志奈倉弘は自動車事故により即死し、翌七年春リーダー健物貞一、小林勇の兩名は米国官憲により検挙され国外追放を

受け、次で堀内鉄治、箱守改造、福永興平等も亦同様羅府に於て検挙国外追放と共に入露せる為現在正式党员として活躍しつつあるは第十三区所属邦人党员、カール濱、奥津繁夫、池田豊耕、村田繁雄（以上桑港）由比直躬、松井周二、武島建二、小倉進、今井綾子（以上羅府）等約四十名に過ぎず其の活動中心は羅府に移動せるものの如く、又、紐育「ニューヨーク」に於ては、瀧尾義雄、三浦武雄、西村義雄、石垣榮太郎、田中某女「石垣綾子」等が中心となり活動し居たる模様なり。

尚、桑港第十三区所属日本人部に於ては、桑港ILD (International Labor Defence) 及国際海員倶楽部に参加し其の一翼として機関紙、「救援の友」其他の邦文パンフレットを発行し之れが運動を援助しつつありて、桑港には名倉支部、羅府には、小林支部（小林多喜二を記念せるものにして元佐野支部と称す）又紐育には片山支部を有するも何れも有名無実にして、宣伝上隨時之等の名称を利用するに過ぎず、関係人物も亦カール濱、其他の同一党员により結成され其の間何等の区別すら附し得ざるものの如し（『情報戦と現代史』一四八頁以下）。

野坂参三の密使小林勇の三六年検挙はOMSの活動を明るみにした

岡繁樹が「聴取書」を残した一九三六年、日本官憲は、もう一つの有力な米国共産党日本人部についての内部情報を得た。野坂参三・山本懸蔵がモスクワから日本に派遣し、日本で秘密の使命を果たす前に大連で捕まった、小林勇の供述である。

前述したように、サンフランシスコの米国共産党日本人部に所属した小林勇は、すでに一九三〇年九月、アメリカで逮捕されソ連に向かう前の供述記録が、『外事警察法』第一〇六号（一九三一年五月）に「米国に於ける邦人共産主義者の審問」として掲載されていた。つまり、小林

勇は、アメリカからソ連に亡命した米国共産党「アメ亡組」一七人の一人であった。ソ連では東方勤労者共産主義大学（クートベ）に学び、野坂参三・山本懸蔵の指令で日本に帰国しようとし、活動を始める前に、大連で逮捕された。

この小林勇供述については、岡繁樹と並べて、拙著『情報戦と現代史』第II部に詳しく紹介した。なにしろ共産主義の総本山モスクワと、当面の海外からの共産主義文書流入の焦点となっていたアメリカ共産党日本人部の双方を経験した日本人の逮捕であったため、日本の官憲は検挙から起訴まで九カ月もかけて、詳細な供述記録を残した。

その中には、コミンテルンの特殊機関「国際交通局」OMS（オムス）についての詳しい情報も、初めて含まれていた（加藤『情報戦と現代史』一七二〜一八〇ページ。原資料は、「在米邦人の共産主義運動に関する調査」『思想月報』第三八号、三七年八月、「治安維持法事件被告小林勇手記」アメリカ及ソ連見聞記『思想月報』第四四号、三八年二月、「被告人小林勇（明治三十五年十二月十五日生）の予審に於ける供述の要旨」司法省刑事局『思想研究資料』特集第六三輯「コミンテルン第七回大会の新戦術が裁判上に及ぼしたる影響」『社会問題資料叢書』東洋文化社、一九七三年、など）。

小林勇は、アメリカとソ連の実態と共産主義運動を日本警察に克明に語るにより、延命できた希有な存在で、戦時・戦後の行方はわからない。『情報戦と現代史』では省略したが、小林勇による米国共産党日本人部についての供述は、『思想月報』第三八号（一九三七年八月）に「在米邦人の共産主義運動に関する調査」と題して収録されている（同四四号の「アメリカ見聞記」は、料理から南京虫まで、生活観察の記録である）。

「本調査は目下大阪に於て取調中の小林勇の聴取書に基くものにして、資料の關係上年代的には主として一九三二年までであり、又地域的には米國西部沿岸方面を主として取扱つたものである」と断り書きし、アメリカ共産党全体の歴史を概観したうえで、「在米邦人共産主義運動」を歴史的に述べていた。ここでは、前述「宮城与徳手記」の場合にならつて、年表風に要約しておこう。

一九一九年九月 合衆国共産党結成に片山潜、田口運藏、西村義雄、猪俣津南雄参加。

一九二一年 片山・田口入露後、東部ニューヨーク中心に西村義雄、石垣榮太郎、山辺清（二八年帰国）、矢田某、佐々木三郎、土井某（三〇年頃レーニン大学へ）、荻野某ら入党。

一九二五年頃 西部カリフォルニアに健物貞一（三二年入露）、堀内鉄次（三二年入露、三四年クートベ卒）、矢田某、松井周次、箱森改造（三二年入露、クートベ入学？）、福永与平（三二年入露、クートベ入学）、山口某（三二年入露、三四年クートベ卒）、岡繁樹等がそれぞれ活動、漸次黨員増加。

一九二五年 ロスアンゼルスに社会主義研究会「アナ」との対立から「ボル」系堀内鉄次、矢田某、健物貞一、山口某、箱森改造、小林勇が「羅府日本人労働協会」結成（リーダー矢田、AP堀内、小林、会計箱森、組織矢田）、邦人労働者組織化、『イスクラ』発行、二六年八月頃活動停止、その後箱森、福永与平らで再建。

一九二七年三月 サンフランシスコで黨員健物貞一、松井周次を中心に小林勇、岡繁樹、彦山某、池田秀雄、由比直躬ら「桑港日本人労働協会」、四月『階級戦』創刊、執筆者松井、健物、池田、福永で、日本の『無産者新聞』を転載、名倉譲二、三浦武雄、小倉某ら加盟。五月 邦訳「共

産党宣言」再販、健物・松井・小林がILD加盟、名倉兄弟、三浦、小倉、池田、彦山、由比、近藤も加入し「ILD日本人部」。

一九二八年春頃 東部の邦人黨員石垣榮太郎、西村義雄、土井某等が「日本人は英語会話不十分にして諸々の党活動に白人と伍して行くことは不便である」との理由により「党日本人部書記局」を結成すべしと提議し、西部の邦人黨員小林勇、健物貞一、奈倉兄弟等が之に協力した結果、正式に党本部に附設せられ、東部の邦人黨員が之を指導した。

一九二九年頃 ロスアンゼルスで西海岸日本入党員代表者会議、機関紙『労働者新聞』、サンフランシスコで井上元春、小林勇ら赤色日本人クラブ発会（三一年解散）、堀内・山口がインペリアル・バレー争議で検挙、日本の練習艦隊にアジビラ、健物貞一検挙。

一九三〇年 この頃まで労働協会に三浦、名倉弘、龍尾義雄、井上元春、武島健二ら加盟、党は弾圧で一次沈滞。

一九三一年 ソ連帰りの矢野事竹田某（三〇年ソ連より帰米）が東部からオルグにきてサンフランシスコで党再建、竹田・小林勇・名倉弘（三一年死亡）、三浦武男でビューロー再建。「斯くして新指導者竹田某の活動に依り桑港に於てジャパニーズ・ビューローを再建し、同ビューローを中心とする邦人黨員の活動は再び昂揚し、サクラメント地方、ウッドランド地方に於て邦人黨員を獲得して組織は強化」、六月日米新聞社ストライキ。

一九三二年 機関紙『労働新聞』月二回化

岡繁樹・小林勇・宮城与徳供述の食い違い―野坂参三の不在と「野坂機関」の影

（ここで注意すべきは、小林勇の半年前に逮捕された岡繁樹の三六年「岡

繁樹聴取書」、及び四二年「宮城与徳手記」と、小林勇「供述書」との共通点・相違点である。

第一に、「小林勇供述書」には、「ウラ」の指導者・鬼頭銀一は出てこない。しかし小林は、「一九二七年アメリカに於ける共産主義運動の黎明期に於て西部沿岸桑港及バークレー地方在住の邦人左翼分子健物貞一、松井周次（両名共黨員）外数名は総て熱心なボルシェヴィキ傾向あり、……当時は恰も内地に於て所謂『山川イズム』と『福本イズム』の抗争時代にして其の展開する論戦に依り他の在米邦人左翼分子と共に大なる衝動を受け、更に又西部地方に於ける共産党活動が上向期であつたこと等に因り異常な『革命的興奮に燃え』ていた」と、当時のイデオロギー的雰囲気を与え、岡繁樹が供述した『階級戦』記事をめぐるイデオロギー批判や岡繁樹の入党申請却下がありえたことを示唆している。

第二に、『階級戦』の発刊時期・事情の供述は、微妙に食い違う。岡繁樹によれば、大正十一年―一九二二年に岡繁樹自身も加わつて階級戦社創立とするが、いかにも早すぎる。中心メンバー健物貞一の渡米は、私が遺族から収集した自筆手紙等の資料で二三年夏であるから、明らかに間違いである。これに対して小林勇は、二七年四月創刊といい、「宮城与徳手記」とも合致する。しかしいずれも、史実とは異なる（実際は二五年）。

第三に、米国共産党日本人部設立の時期・事情と、指導者「矢野」武田の派遣時期である。党の近くにいた岡繁樹と、党内だが周辺にいた宮城与徳の供述では、「日本人部」の設立時期ははっきりしない。宮城の場合、「二六年創設の米国共産党加州支部」を日本人部と考えていたかも知れない。「矢野」は、岡によれば二八年、「宮城手記」では二九年末の健物貞一検査後、ニューヨークから派遣されて、サンフランシスコ

に現れた。しかるに小林勇によれば、二八年に東部の石垣榮太郎・西村義雄らと西部の小林勇・健物貞一らが相呼応し米国共産党内日本人黨員の提案で日本人部書記局がつくられ、三〇年にソ連から帰つた矢野が、日本人部ビューローに入るのは三一年だという。

第四に、「宮城与徳手記」で「領事館のスパイ」とされた井上元春の問題。岡繁樹によれば、井上元春は、三浦武雄と共に二八年に健物貞一らと意見が対立し、矢野がやつてきて「異分子清算」とされるが、小林勇の供述では、井上は、二九年小林と一緒に赤色日本人クラブをつくり、三〇年頃に労働協会加盟で、「スパイ」除名話は出てこない。「宮城与徳手記」では、井上は、三一年党活動開始で、「後総領事館スパイ」として除名である。要するに小林勇は、ソ連に「亡命」後の西海岸共産党をほとんど知らない。

第五に、今日在米「野坂機関」の重要メンバーとして知られるジョー小出や、渡部富哉がゾルゲ事件の「ロイ」として発掘した木元伝一については、岡繁樹、小林勇、宮城与徳とも、言及はない。もちろん、岡繁樹・小林勇の供述中に宮城与徳や北林トモの名前はなく、こうした諜報活動に加わつた人々は、当時の「オモテ」の第一線活動には関わらなかつた「ブラック米国共産黨員」であるかのようなのである。

その他、小林勇の言うニューヨーク出身の「土井某（三〇年頃レーニン大学へ）」をはじめ、指導部構成や黨員の人名等もはつきりせず、それぞれの活動した場所、地位、交友関係等で、供述内容は微妙に異なる。無論、官憲資料であるための信憑性の問題もある。

ちなみに、上記の五点については、今日、米国日本人共産党史の本格的研究がないため定番となっているカール・ヨネダ『在米日本人労働者の歴史』（一九六七年）では、①鬼頭銀一の存在そのものが否定され、

初期の党内闘争・イデオロギー抗争の記述もない、②『階級戦』は健物貞一により二六年六月創刊、二八年三月在米日本人労働協会機関紙『在米労働新聞』、ついで共産党機関紙『労働新聞』に改称、三三年一二月まで刊行、③米国共産党「日本人部」の明確な記述はなく、矢野は、指導者としてではなく、一九五〇年マッカラン法で日本に送還された「豊田令助（矢野努）」と一言のみ、④井上元春については「北米朝日」記者だったが「日本領事館のスパイ」で一九三二年二月二六日の傷害事件以後「姿をかくしてしまった」、⑤宮城与徳と北林トモには肯定的にふれるが、本元伝一は、あくまでハワイの活動家・ジャーナリストで、一九二九年マルクス主義雑誌『研究』創刊、三八年英字週刊紙『ヴォイス・オブ・レーバー』編集者、戦後の『布哇スター』主筆であり、ジョー小出は、野坂参三に協力した後「裏切り者」扱いである。

カール・ヨネダの自伝『がんばって』（一九八四年）も、基本的にこれを踏襲している。『階級戦』創刊は一九二五年と訂正され、「アメリカ共産党中央委員会言語局に属する五人編成の日本語部」の存在と、その「当時地下活動中だった日本共産党との連携」は認めたが、矢野の指導的役割は無視され、ジョー小出への告発はいつそうエスカレートした。

決定的に重要なのは、三人とも「野坂参三のアメリカ」を知らないことである。小林勇は、一九三六年二月に、コミンテルン第七回世界大会に出席のため地下活動中のアメリカから一時ソ連に戻っていた野坂Ⅱ「岡野進」に対日工作の指令と訓練を受けるが、野坂が三四―三五年にアメリカ西海岸にいたことを、全く知らない。野坂は山本懸蔵と共に、あくまで在モスクワの日本共産党代表で、その後の野坂の第二次渡米も知らない。

今日振り返ると、一九七〇年代にジョー小出や野坂参三への貴重なイ

ンタビューを行った大森実『戦後秘史 三 祖国革命工作』（講談社、一九七五年）のみが、わずかに問題の核心に肉薄していた。どうやら米国共産党には、「オモテ」の党员小林勇、カール・ヨネダ、ジェームズ小田、宮城与徳らも知らなかった「ウラの顔」があるらしい。アメリカ共産党日本人部の歴史と全体像がはっきりしないと、鬼頭銀一や「ロイ」、ジョー小出や「野坂機関」の実像に迫るのは、難しそうである。

七 野坂参三・山本懸蔵が派遣した工作員の運命

―日本での検挙か、ソ連で粛清か

ソ連から帰国・潜入した日本人は次々に検挙され「転向」したもつとも日本官憲の側からすると、野坂参三・山本懸蔵らの「密使派遣」は、三六年一月小林勇検挙で初めて知ったわけではない。

拙著『モスクワで粛清された日本人』、『国境を越えるユートピア』に詳述したが、一九三一年春にモスクワに到着した野坂参三Ⅱ「岡野進」は、コミンテルン日本支部モスクワ代表として、ウラジオストクで汎太平洋労働組合・国際海員クラブを通じた日本工作をしてきたプロフィンテルンの山本懸蔵Ⅱ「田中」と共に、日本への宣伝活動、工作員派遣を担当してきた。

野坂は、コミンテルン東洋部の指令で、一九三四年三月アメリカに向けて出発、ジョー小出を助手に秘かにサンフランシスコで対日工作を開始したとされるが、そのころ、多くの在露日本人が、コミンテルンから派遣されて日本で検挙され、ないしソ連の現実に幻滅して国外追放となり、日本官憲にソ連の対日工作についての情報をもたらしていた。

フランス共産党員として活動後、ドイツ經由ソ連に亡命して片山潜の私設秘書となった勝野金政は、一九三〇年末山本懸蔵に「スパイ」と疑われ、ソ連秘密警察により逮捕、三年半の強制収容所（ラーゲリ）生活を経験したが、三四年七月三十一日、在ソ日本大使館の助けで奇跡的に帰国し、その体験を『赤露脱出記』（日本評論社、一九三四年）、『ソヴェト・ロシヤ今日の生活』（千倉書房、一九三五年）、『ソヴェート滞在記』（千倉書房、一九三七年）等の手記・小説に残した。勝野が今日「日本のソルジェニツイン」と再評価されていることは、私の書物や藤井一行教授の論文、山口昌男の評論等で知られるようになった（勝野金政『凍土地帯』吾妻書房、一九七七年、加藤『モスクワで肅清された日本人』第四章、加藤『国境を越えるユートピア』、山口昌男『二〇世紀における『政治と文学』の神話学』『新潮』二〇〇一年一月・二月号、〇二年二月）。

野坂の三四年第一次渡米と同じ頃、クートベ学生だった神達八郎、アメリカ共産党の初期の党員でウラジオストックでOMSの活動後、ソ連共産党員となってクートベで日本人学生指導に当たっていた高谷寛蔵に、日本帰国命令が下った。神達八郎は、三四年二月一六日、コミンテルン東洋部のサファロフと野坂参三の指令で四月二四日頃東京到着、米国人イスラヘルベアーと接触し、モップル（赤色救援会）を通じて日本共産党にも連絡しようと試みたが、八月九日に逮捕された（『社会運動の状況』一九三四年、『特高月報』三四年一月・三五年四月、「予審終結決定」『思想月報』三六年一〇月、回想は「私のクートヴェ時代」『運動史研究』第八号、一九八一年）。

在ソ日本人の有力党員・高谷寛蔵は、もともと米国共産党初期の片山潜時代の党員で、おそらくは再建日本共産党中央委員長候補として、三四年三月帰国の命を受け、「山口栄之助」の旅券で七月一日帰国、神達

八郎とも連絡をとったが、袴田里見逮捕で壊滅した日本共産党中央委員会の再建を果たせぬまま、三五年五月一〇日に逮捕され「転向」した。後に勝野金政と共に参謀本部に協力し、肅清をおそれてソ連から日本へ亡命してきた赤軍リュシコフ中将の尋問と監視にあたる（邦人主義者の入露、帰国に依る連絡状況）『社会運動の状況』一九三五年、『特高外事月報』三六年六月、「高谷寛蔵上申書 ロシヤ印象記」司法省刑事局『思想研究資料』特集第二九輯『ソヴェート連邦の実状』昭和十一年七月、『コミンテルンは挑戦する』大東出版社、一九三七年、「ロシヤ共産党の実状と其の極東政策」昭和十二年、『社会問題叢書』第一輯、東洋文化社、一九七七年、戦後の回想は『レーニン、スターリン、マレンコフ』同光社磯部書房、一九五三年）。

ウラジオストックの海員クラブで活動していた熊谷大信は、ソ連共産党内で疑われて国外追放となり、帰国して三四年一月一四日に逮捕された（『特高月報』三五年四月、「予審終結決定」『思想月報』三六年六月、「熊谷大信上申書」司法省刑事局『思想研究資料』特集第二九輯『ソヴェート連邦の実状』昭和十一年七月、『社会問題叢書』第一輯、東洋文化社、一九七七年）。

同じくウラジオストックで海員工作にあたっていた細木榛三も、山本懸蔵に疑われ、三三年一月にソ連で「プロパカートル（挑発者）」の嫌疑を受けてベルギーに脱出、三四年七月には「転向」して、密かに帰国していた（『思想月報』三七年三月）。

山本懸蔵によるプロフィンテルンの指令で帰国した飯塚博も、三四年一月二三日、全協再建を果たせぬまま、「所持金三百余円の出所不審」により長崎で逮捕された（『特高月報』三四年一月・二月、『特高外事月報』三五年一月、『外事警察概況』一九三六年、「予審終結決定」『思想月報』

三十七年三月)。

だから日本官憲は、『思想月報』三十七年三月「日本関係入露者調」七八人のリストを掲げるにあたって、三四年にソ連から帰国したクートベ歸りなどの共産主義者七人(勝野、高谷、飯塚、神達、熊谷、細木、正兼菊太)のうち四人(勝野、熊谷、細木、正兼)までが「ソ連邦の現実を体験して、革命思想を放棄した」と誇らしげに報告することができた。小林勇が野坂の「密使」として帰国直前に逮捕された三六年一月には、クートベ入学を拒否されて失意の内に帰国した新宮領一正も、北樺太から帰国して逮捕されている(『特高外事月報』三六年十二月・三十七年六月、『思想月報』三十七年五月)。

「密使」たちの検挙は野坂参三と山本懸蔵の運命を分けた

彼らはそれぞれに、モスクワでの野坂参三や山本懸蔵、コミンテルン東洋部や国際連絡部(OMS)の対日政策・工作、クートベでの教育や同期生について―おそらく拷問を含む厳しい取調を受け―、特高警察に詳しい供述を残した。特に高谷寛蔵の供述は、彼自身がウラジオストツクで実際にたずさわったOMSの活動体験の詳細を含み、日本の官憲にとつて貴重であつた(「邦人主義者の入露、帰国に依る連絡状況」『社会運動の状況』一九三五年、前掲『レーニン、スターリン、マレンコフ』参照)。

国際的には、ソ連共産党の高級諜報員だつたW・G・クリヴィツキーが、一九三七年一月に肅清をおそれてフランスに亡命し、三九年にソ連共産党やコミンテルン情報連絡部(OMS)の実態を暴いて、日本でもセンセーショナルに報道される以前のことである(「スターリンの機密勤務に服して」『外事警察報』第二二五号以下、一九三九年四月以後

連載、『中央公論』一九三九年八月九月、戦後版はクリヴィツキー『スターリン時代』みず書房、一九六二年)。

そのためモスクワの野坂参三は、一九三六〇三九年の在ソ日本人総肅清の嵐の中で、三九年二月二日にコミンテルン書記長デミトロフに手紙を送り、すでに三十七年一月二日に「スパイ」容疑で検挙されていた「刎頸の友」山本懸蔵について、三四年末の「ルジン」飯塚博、三六年末の「リャンフー」小林勇の日本への帰国が成功しなかつた責任を、山本懸蔵とOMSのものとして告発し、三九年三月一〇日の山本懸蔵の銃殺刑を決定づけた。これが一九九二年に明るみに出て、百歳を越えた名誉議長野坂参三は、日本共産党を除名され寂しく没した(加藤昭・小林峻一『闇の男』、加藤哲郎『モスクワで肅清された日本人』参照)。

藤井教授遺稿が解説したように、山本ばかりでなく野坂自身も「スパイ」と疑われていた。ただしその後、野坂参三の山本懸蔵告発手紙より一年半前の一九三七年九月三日にコミンテルン東洋部長であつたミフが山本懸蔵をコミンテルン人事部に告発した資料が、和田春樹により発掘された(『毎日新聞』二〇〇一年五月二九日)。

いずれにせよ一九三〇年代に、コミンテルン傘下で日本共産党再建など対日工作の訓練を受け、野坂参三と山本懸蔵が秘かに日本に派遣した共産主義者は、ことごとく日本の警察に検挙され、ほとんど活動できずに「転向」した。そこには小林勇・高谷寛蔵のように、米国共産党からモスクワに入った共産黨員も含まれていた。ただし野坂参三のソ連からアメリカ西海岸への潜入・滞在と、そこでの「野坂機関」の活動は知られていなかった。

つまり、藤井一行教授の探求した米国から「労働者の祖国」ソ連に亡命した日本人たちは、コミンテルン本部及び野坂・山本ら在外日本共産

党指導部にとっては、治安維持法による弾圧と大量「転向」、疑心暗鬼による「スパイ」摘発・査問リンチ致死事件などで壊滅した日本共産党再建のための「密使」候補、対日工作の予備軍だった。

彼らは、一九三〇年代後半には、ソ連に留まって「日本のスパイ」として検挙・粛清されるか、日本に秘かに派遣されて特高警察の餌食になるかの、不合理な二者択一を迫られた。「オモテ」の共産党員を「ウラの共産党」用に改造・転身させるのが、日本人のみならず、当時のモスクワにおけるコミンテルン各国共産党代表部の仕事であった。

八 野坂参三の米国共産党日本人部を利用した対日工作

―党中党「野坂機関」

三八年九月、野坂参三のデイトロフ宛手紙

野坂参三は、一九三八年九月八日・九日のデイトロフ宛手紙で、自分の対日工作の成功例も挙げている。八月八日にアメリカからモスクワに戻ったばかりの野坂参三は、自分が秘かに日本に派遣した二人の工作員は、日本への潜入に成功し「党中央再建準備委員会」を作れるまでに



なった、と「成果」を報告していた。つまり、自分のアメリカからの対日工作は成功したが、山本懸蔵がモスクワから送り込んだ工作員はなぜかすぐ逮捕された、というわけである。和田春樹が、旧ソ連

秘密資料の中から発見した、貴重な第一次資料である（和田春樹『歴史としての野坂参三』平凡社、一九九六年、六四〜九頁、全文は同書付属資料1、二七〇〜八二頁。この文書を和田春樹は「ロシア現代史資料保存センター RUSKINDI, f. 495, op. 127, d. 550, ll. 1-38」と記している）。

当時野坂は、コミンテルン執行委員会幹部会員で、工作対象は日本とアジアであった。ただし三四年から三八年の二度のアメリカ滞在で、OMSと米国共産党の援助を受けていた。三八年九月の野坂参三のデイトロフ宛手紙は、その活動報告である。第二部「わが党について」でいう。

コミンテルン第七回大会は分派主義者たち「山本秋・宮内勇らの日本共産党「多数派」に致命的な打撃を加え、わが党に新しい生命を吹き込んだ。大会決定と「岡野と田中の書簡」（「日本の共産主義者への手紙」一九三六年）を基礎に一九三七年には新しいセンター、「党中央再建準備委員会」が結成された。同委員会は党機関誌『赤旗』の刊行に着手した（八月）、われわれはアメリカを通じて同委員会と接触をもち、アメリカから政治的指示を与えた。モスクワからわれわれは二人の学生をその地に派遣した。中央委員会は新しい組織的形態を守ると決定した。大衆団体の中に、サークルや労働者新聞の編集部などの形で、合法的に共産主義者グループを創出することが試みられた。そのようにしてわれわれの影響は、左翼労組にも右翼労組にも、農民組合、社大党などにも、革命的労働者新聞にも浸透した。急速に左翼も右翼組織の一般メンバーさえ、人民戦線を求めるわれわれのカンパニアに呼応した。

われわれの影響力の増大に不安になった、中国侵入の準備におおわわの警察は一九三六年一月と一九三七年一月にわが党に深刻な攻撃を

加えた。彼らは三五県で一三〇〇人の黨員とシンパを逮捕した……これはわが党に対するもつとも深刻な打撃の一つであった。私の知るかぎり、以来中央委員会は存在しない。……（同書、二七四～五頁）。

第三部の「アメリカでの工作」では、より詳細になる。

一九三六年二月の逮捕以前には、われわれはいくつかの共産主義グループ、個人、「左翼」新聞と連絡を保っていた。われわれが連絡をもっていたのは、たとえば、一九三六年八月には党中央再建準備委員会、一九三五年からは海員および無線技師たち、また左翼系の新聞、『時局新聞』『生きた新聞』、加藤「勘十」の組織の機関紙たる『労働新聞』、『無線技師』など、江口渙などの著名人士、全評、総同盟、海員組合、全農、社大党などの労農団体の活動家たちである。

彼らを通じて、われわれはコミンテルン第七回大会の決定、人民戦線決議、労働組合、社大党についての決議などを送り、コミンテルンから情報をうる可能性を奪われた日本の同志たちに強い影響を及ぼした。われわれは二人の同志（LとM）と定期的な連絡を保っていた。そのときまさに中央委員会は自分たちの政策から以前のセクト主義を一掃しようとしていた。また、そのときまさに日本で人民戦線の問題が論議されはじめ、社大党へ加入し、この組織の「左翼」を形成することがはじまった。しかし一九三六年に起こった大量逮捕がアメリカでのわれわれの工作に重大な打撃を与えた。われわれはふたたびもつとも重要な結びつきを失い、のこったのは海員との連絡、大衆団体の役員との連絡、そして上記の二人の同志との連絡だけであった。そのとき日本の官憲はあらゆる手を使ってわれわれの工作を妨害しはじめた。日本にわれわれの文献を運ぶ海員たちを逮捕しはじめた。アメリカから送られるわれわれの郵便と文献を没収するために、横浜と神戸の税関と東京の郵便局に特別の係官

が任命された。われわれが知ったところでは、官憲はこのほか二人の警察官僚をアメリカ西海岸に派遣した。……

昨年「一九三七年」七月以後は事態がますます悪化した。上海を通じる連絡は断たれ、同志Lとも連絡が切れた。……それでもわれわれの連絡は最終的に断たれたということはない。「一九三八年」七月まで私はMと定期的接触をもっていた。われわれにはなお日本国内に五二の宛先があり、その一部はあれこれの方法で利用できた。われわれは一五人の海員と定期的に接触をしていたが、うち五人は信頼ができた。本「一九三八」年七月われわれは日本に一人の学生を派遣したが、それは彼が日本の国内情勢について第一次的重要情報をもつて、九月にはアメリカにもどつてくれると期待してのことだった。われわれのこれからの日本との連絡は彼の国内での工作にほばかかっている（二七四～八頁）。

Lこと小林陽之助とMこと伊藤利三郎は日本に潜入できた

ここで野坂参三の挙げた「二人の同志（LとM）」とは誰か。この頃、野坂の指示で日本に潜入し、ある程度活動しえたのは、今日確認しうる限りで二人いる。一九三五年一〇月にモスクワで野坂参三、山本懸蔵の命を受け、一一月に帰国、大阪に住んで秘かにコミンテルンと連絡を取り、ゾルゲ事件発覚直前の一九四一年八月六日に検挙されるまで、通信・協力者確保などの地道な活動が続けた党名「マージン」こと伊藤利三郎と、ドイツ共産党日本人部出身でコミンテルン第七回大会日本青年代表、三六年四月にモスクワを出発して七月七日帰国、三七年一二月二日の検挙まで、約一年半活動し得た党名「リコー」こと小林陽之助である（野坂参三『風雪のあゆみ』第八巻、新日本出版社、一九八九年、一〇五一～一〇九頁参照。同書一六二頁で、野坂は「わたしがモスクワから日本に

派遣した伊藤利三郎と小林陽之助」と語っている。ただし神達八郎、高谷寛蔵、小林勇ら失敗例については沈黙している。

上記報告書の三七年七月に連絡断絶したLは、同年一二月に逮捕された「リコー」＝小林陽之助であろう。三八年七月現在連絡継続中というMは、四一年夏まで潜行中の「マージン」＝伊藤利三郎と推定できる（ただし伊藤は、四一年逮捕前の三八年三月には自ら連絡を絶つたとしているので、「一九三八年」七月まで私はMと定期的接触をもっていた」という野坂参三の言い分は、自己防衛の誇大報告である）。

その彼らも、逮捕後は、きわめて詳細な日本官憲への供述を残した。すでに『モスクワで肅清された日本人』で伊藤利三郎供述を（司法省刑事局「コミンテルン対日謀略の一断面―クウトベ出身者伊藤利三郎の供述」昭和一七年七月、『昭和思想統制史料』第二一卷、生活者、一九八一年、「予審終結決定」『思想月報』四二年三月）、『国境を越えるユー・トピア』では「小林陽之助聴取書」現物（昭和一三年七月二五日第一回）昭和一三年一〇月四日第三〇回）を詳しく紹介・検討したのでここでは省略するが、伊藤利三郎は「尾崎孝」の名を与えられ「北米加州ロスアンゼルス市西八番街六三三 三浦方」の連絡アドレスを、小林陽之助は「吉倉増次」名で「Mr. Leo Klein, San Francisco USA」の連絡アドレスを与えられていた。

米国は、野坂参三の対日工作に不可欠の中継基地であった（小林陽之助については、『特高月報』三八年一〇月・一一月・四一年四月、「予審終結決定」『思想月報』四〇年三月、「聴取書」を忠実に再現した林虎雄『共産党秘録 コミンテルン密使小林陽之助の告白 野坂陰謀を暴く』道理社、一九五〇年、をも参照）。

野坂のいう「党再建準備委員会」と伊藤利三郎・小林陽之助の任務

野坂参三のディミトロフ宛三八年滞米報告には、「党中央再建準備委員会」が二度も出てきて、まぎらわしい。

「第三部」でいうのは、一九三六年六月頃、大阪で和田四三四、奥村秀松、宮本喜久雄らの手で組織されていたグループであろう。そこで三六年八月一日、『赤旗』第一号も発刊されている（野坂参三のいう三七年ではない）。しかしこのグループは、日本政治経済研究所の立花敏男・木内豊治らのグループ、加藤勘十・小岩井浄・内野壮児らの労働雑誌社、長谷川国雄・松原宏達らの時局新聞社、京大学生らの雑誌『車輪』、石川友左衛門らの名古屋合同労組、尾崎敏雄らの友愛倶楽部、矢野笹雄らの金星社、河野実・増田正雄らの神戸海上労働者グループ、森友二・菊池利一らの全評神戸地方評議会グループ、竹村悌三郎・藤坂定男らの高知グループ、朝鮮人共産主義者の富山・新潟のグループ等々と共に、三六年一二月五日の警視庁以下二府一七県九〇〇人一斉検挙で、「人民戦線」への芽を摘まれる。以後三八年八月末迄、更に五〇六人の「残留分子」が検挙されるから、野坂参三のいう「一三〇〇人」弾圧は、ほぼ正確といつてよい。そこには「人民戦線事件」の荒畑寒村・有沢広巳ら労働派グループ等も含まれる（司法省刑事局「思想研究資料」特集第六三輯「コミンテルン第七回大会の新戦術が裁判上に及ぼしたる影響」、犬丸義一『日本人民戦線運動史』青木書店、一九七八年）。

ただし、これら一九三六年の日本共産党再建運動、草の根の反戦反ファシズム運動は、野坂参三、山本懸蔵らによる宣伝活動のイデオロギー的政治的影響は強く受けていたが（内務省警保局編『海外よりの左翼宣伝印刷物集』全三巻、昭和十一年九月、十二年四月、十三年三月、不出版、一九八四年）、野坂の派遣した「L＝小林陽之助」及び「M＝伊

藤利三郎」と組織的に連絡した形跡はない。日本での独自の反戦運動だった。

野坂の「第二部」でいう「新しいセンター」は三七年「党中央再建準備委員会」とは、和田四三四らのそれとは別のグループである。しこと小林陽之助は、検挙後の官憲資料によると、三六年末に岡部隆司、長谷川博、守屋典郎、松本三益、風早八十二らに働きかけたとき、日本官憲は、これを「党再建準備委員会」第一次グループとみなし、三七年秋には、長谷川浩、伊藤律らの第二次グループが生まれたとする。確かにこの流れは、三七年一二月の小林陽之助逮捕、三九年八月伊藤律検挙、四〇年七月岡部隆司検挙後も、春日正一、山代吉宗らの京浜グループのようなかたちで、アメーバー状に命脈を保たれた（日本共産党再建準備委員会の活動状況『特高月報』四一年四月）。また、これらの検挙の中から、ゾルゲ事件関係者の一部が割り出されていく。

とはいえ、野坂参三・山本懸蔵が伊藤利三郎、小林陽之助に与えた本来の任務は、必ずしも日本共産党中央の再建ではなかった。彼らは、日本共産党関係者との直接接触は極力断つて、日本共産党中央委員会の再建や人民戦線運動の指導よりも、野坂のデイトロフ宛手紙のいう「日本の国内情勢について第一次的重要情報」を収集し、アメリカ経由で連絡する使命を与えられていた。ちょうど、赤軍ルートのゾルゲ諜報団と同じように。

伊藤利三郎は、地道に労働者生活を送りながら、その秘密任務を忠実に果たし、加藤英男ら少数の協力者を粘り強く獲得した。

『世界文化』弾圧につながった「密使」小林陽之助の活動と検挙

小林陽之助の場合も、野坂参三にモスクワで与えられた主要な任務は、

そうしたものであった。

君が帰国してからの任務は現在不明になつてゐる日本共産党の情勢を国際共産党日本部に報告することである。……それゆへ君は君の知人でも信頼できる人を一人だけ選んで、その人を通じて党の情勢を探り連絡をつけるやうにしたまへ。……党と連絡をつけることを焦つて警察に捕へられては何にもならないから、最初君が会つた人を通じて順次確実な信頼できる人に渡りをつければ、自然と党と連絡がつくようになる。不確実な人間であつたら、直ちに交渉を絶たなければならない」（林虎雄『共産党秘録』二五頁）。

その「一人だけ」に、小林陽之助が、モスクワで野坂参三と相談して想定したのは、野坂参三のかつての産業労働調査所の助手岡部隆司ではなかった、第一候補に「東条」は早稲田大学助教授野村平爾（パリ・ガスプ・グループとベルリン反帝グループを結びつけたほか、アメリカでは石垣榮太郎・綾子夫妻と親しかった）、第二候補が「三田」は立命館大学助教授大岩誠（京大政治学の助教授としてベルリンに留学したが、帰国後滝川事件で辞職し立命館に移った）であつた。共に小林陽之助が、ソ連に亡命前、ベルリンの国崎定洞グループはドイツ共産党日本本部の中で、反戦反ナチ運動を闘った「同志」であつた。

実際小林陽之助は、野村平爾、大岩誠、小林義雄、平野義太郎、勝本清一郎、ねず・まさしら、かつてのドイツ共産党日本人部での個人的人脈を辿つて情報を収集した。しかし早稲田大学での野村平爾との「会見の結果は必ずしも満足すべきものではなかった」。そこで京都に移り、第二候補の大岩誠に会い、大岩の紹介で「滝川事件」の滝川幸辰博士宅の家庭教師をしたり、当時『世界文化』でフランス、スペイン人民戦線政府の日本への紹介に尽力していたねず・まさしらと連絡をとつた。

大岩の紹介した守屋典郎や松本三益の線からは、岡部隆司・長谷川博らの「再建準備委員会」につながったが、小林陽之助自身は、野坂のいう「不確実な人間であつたら、直ちに交渉を絶たなければならない」を忠実に守り、会ってみて不審を抱いた松本三益・守屋典郎とは、いったん会見後すぐに連絡を絶った。

「テストに残った人物」は、結局、大岩誠とねず・まさしであつた。共に京都の反ファシズム雑誌『世界文化』の同人で、知識人だつた。最も信頼されたねず・まさしは、三十七年夏に（おそらくは若きエドウィン・ライシャワーの紹介で）来日し、遺跡を案内した親日派米国女性ディルツ夫人に託して、アメリカの連絡アドレスに手紙を送った（「小林陽之助聴取書」、ねず・まさし「プチブルの同人雑誌『世界文化』」「思想」一九七六年十一月）。

しかし特高警察は、新村猛・真下信一・中井正一・久野収らの『世界文化』グループをも危険視し、監視していた。一九三七年一月には新村猛らと共にねず・まさしも検挙され、一二月二日の小林陽之助の逮捕につながった。その三日後、一二月五日に大岩誠も逮捕され、大岩は獄中で宗教的に改心し、国崎定洞、千田是也、勝本清一郎ら「ベルリン反帝グループ」や野村平爾、佐藤敬、内田巖ら「パリ・ガスブ・グループ」についての詳細な供述を残した（「治安維持法違反事件被疑者大岩誠の被疑者大岩誠の非疑事実並に検事聴取書」昭和十三年七月、『思想研究資料』特集第四三号、東洋文化社、一九七七年、『予審終結決定』『思想月報』四〇年四月）。

ちょうど、赤軍第四部ルートゾルゲ・グループや、同系統だが別個のアイノ・クーシネンによる秩父宮工作等の諜報活動も行われていた時期であり、野坂参三グループⅡ「野坂機関」とは、一方でアメリカから

日本語反戦新聞・雑誌を送りつつ、日本国内で自生的に繰り返される反ファシズム・共産主義運動の状況を情報として収集する諜報団であつた。特高警察は、小林勇と小林陽之助の二人の供述を詳しく比較検討し、二人の上海から連絡すべきモスクワの連絡アドレスが「モスコウ市アルバート街五四番地、第三十五号室ジョンソン」と同一であることまでつきとめていた（「邦人共産主義者の入露、帰国に依る連絡状況」『社会運動の状況』昭和十二年、この「ジョンソン」とは、OMSの対日工作のモスクワにおける実務責任者カール・ヤンソンのことである）。

もつとも野坂参三のディミトロフ宛三十八年九月手紙には、三十七年八月『赤旗』再刊など、明らかな誇大報告も含まれている。モスクワで粛清の嵐が吹き荒れる一九三八年秋の局面であるから、野坂の「党再建準備委員会」の報告は、次々に逮捕・粛清される在露日本人たちを尻目に、自己の政治生命、いや生命そのものを守るための、せいはいっぱいの弁明だつたらう。

ちょうどこの頃、ただ一人獄外に残された伊藤利三郎も、実はコミンテルンに疑問を持ち、モスクワとの関係を断ち切ろうと悩んでいた。三十八年三月には「肉親愛に依り遂に急角度の思想的転換を為すに至った」（『昭和思想統制史資料』第二二巻、一二二頁）。コミンテルンへの米国籍由での通信は決死の覚悟で一回行つたが、コミンテルンからの指令は三回のみだつた。三十八年二月の三回目の指令を無視したままで、伊藤は、自らの意志で野坂との連絡を絶つた。伊藤自身は自覚していなかったとはいえ、この不安定な状態が、野坂参三にとっては、自分と妻龍の生命を辛くもつなぎとめる、皮一枚の役割を果たした。

米国共産党日本人部につながる党内党「野坂機関」——野田英夫は別系統

和田春樹の発掘した野坂参三のデイミトロフ宛三八年九月の手紙は、「本」[一九三八]年七月われわれは日本に一人の学生を派遣したが、それは彼が日本の国内情勢について第一次的重要情報をもって、九月にはアメリカにもどってくれると期待してのことだった。われわれのこれらの日本との連絡は彼の国内での工作にほばかかっている」と語っていた。

これが画家野田英夫のことであれば、野田の生涯を追った窪島誠一郎の執念の仕事『漂白』が生きてくるのであるが、野田が一九三四年暮れから三六年八月の個展開催のための日本滞在の後、ダン・シャーマン＝チャールズ・ド・チェイスの「ソビエトのスパイ組織を日本につくる」使命のアシスタントとして再来日したのは、一九三七年九月のことであった。野坂のいう三八年七月とは、一年の開きがある。

「ジョン・リード・クラブ」の線で、チェイスはアグネス・スメドレーと親しく、アメリカ帰りの画家寺田竹雄の証言では、野田英夫は東京で宮城与徳とも会ったと云う。大岩誠供述に「バリ・ガスブ・グループ」として出てくる佐藤敬・内田巖は、野田英夫の日本での親友だったが、画家仲間であり「学生」ではなかった。野田は、そのまま三九年一月一二日に病気で没するまで日本に留まるので、「九月にはアメリカに戻る」という指令にも合致しない。

ゾルゲ事件で知られるように、当時は日本人のみならず、外国人も諜報員たりえた。野田英夫の妻ルース・ケルツは、ヨーロッパ經由三八年五月二〇日に来日し、九月に英夫が脳腫瘍で倒れたにもかかわらず、二月八日に一人で帰国したが、これが「野坂機関」の仕事と見るには無理がある。野田英夫は、コミンテルン＝米国共産党の別の系列の諜報機

関員で、野坂の対日工作「野坂機関」は、別の誰かを短期に派遣したものであつたらう。

ともあれ重要なのは、野坂参三が、デイミトロフに「アメリカはいまやソ連邦をのぞけば、われわれの将来の要員の主要な貯蔵庫となりつつある」と語り、二度の米国非法滞在体験を報告しつつ、在米日本人共産主義者の活動に、日本共産党の希望を見ようとしていることである。米国共産党にとつては、党内党である「野坂機関」の活動は、野坂と同じくコミンテルン執行委員会幹部会員である米国共産党書記長アール・ブラウダーが直轄する「ウラの顔」に属した。

われわれは月刊誌『国通』（国際通信）日本版インプレコール、海員のための月刊新聞『大洋』『太平洋労働者』とパンフレットを毎月一冊出した。「日中」開戦後はわれわれは大衆向けの小反戦新聞『ニュース』の発刊に着手し、戦況についての外国雑誌の記事を翻訳して出した。しかし、本[一九三八]年三月からわれわれは同志E・B「アメリカ共産党書記長アール・ブラウダー」の提案により毎月出していた小さなパンフレットをのぞき、すべての刊行物の発行を中止した。……

アメリカには二種類の日本人がいる。一つはアメリカに生まれ、よく英語を話し、日本のことよりアメリカのことに関心をもつ日本人である。いま一つは彼らの親たちで、英語がよくできず、日本のことにより大きな関心を見せている。アメリカではわずかに百人をすこし超えるほどの日本人共産党員がいて、さらに数百人のシンパがいる。

前者をわれわれはアメリカ人労働者とおなじように見ている。われわれは彼らを党学校に送り、同時に彼らのために日本の当面する諸問題を研究するサークルを組織している。

後者のためにわれわれはレーニン主義やアメリカの問題をふくめ、当

面の問題についての講習会を組織している。彼らのなかからわれわれは日本国内で日本の運動のために働きうる要員を集め、養成しなければならぬ。アメリカはいまやソ連邦をのぞけば、われわれの将来の要員の主要な貯蔵庫となりつつある（和田春樹『歴史としての野坂参三』二七八〇頁）。

つまり、対日工作には、ジェームズ小田のような「二世」やカール・ヨネダのような「帰米」ではだめで、小林勇やジョー小出のような「一世」日本人の方が適していると、まるで自分が米国共産党日本人部の指導者であるかの如く、野坂参三のアメリカ在住日本人工作構想は述べられる。もともと、米国共産党書記長アール・ブラウダーも「われわれ野坂機関」の一員と考えれば、米国共産党日本人部も、当然その傘下にある。「われわれは彼らを党学校に送り」という場合は、モスクワのクートベ、レーニン学校よりも、アメリカ共産党の幹部養成機関を想定しているのであろう。

『同胞』とは別の米国での日本語新聞発行計画？

野坂参三のディミトロフ宛手紙は、続けて述べている。

一九三六年二月われわれは同志ディミトロフにアメリカで新しい大衆向けの新聞ないし雑誌を出すという提案を行った。提案は受け入れられ、「三七年」五月にはわれわれは具体的な指示を受け取った。この指示にしたがって、われわれは発刊のためのきわめて慎重な準備に着手した。なによりもまずよい編集長を見つけなければならなかった。われわれには候補者が二人いた。一人はハワイに、もう一人はサンフランシスコにいた。われわれは前者をカリフォルニアに招いたが、彼は個人的な理由でやってこれなかった。そこでわれわれは後者と話し合い、サンフラン

シスコで雑誌を出す予備的な計画を作成した。

しかしながら、われわれは結局計画を実行できなかった。「日中」戦争がはじまり、状況は根本的に変わってしまった。在米日本人のあいだに排外的な気分が高まり、戦争を支持しないすべての文献は「反日的」とか、「アカ」とか見られるようになった。進歩的な雑誌を日本に送ることも不可能になった。サンフランシスコにいたわれわれの編集長候補も動揺しはじめた。

このため、われわれは八月にモスクワに電報を打ち、Dを呼びもどして、すべての問題を討議するように求めたが、返事をもらえなかった。われわれは一時的に準備を中止し、党の日本局によって刊行されている大衆向け労働者新聞とハワイの週刊紙の改善のために注意を集中させた。一月にDはふたたび問題を同志E・BとBedたちと討議した。そしてE・Bはわれわれの計画をモスクワへもって行った。七月にニューヨークを出発する前、Dはまた彼らと問題を話し合った。われわれはこの点で、最新（十一月）の計画にもとづいてモスクワで話をまとめることを約束した（同書、二八〇～二頁）

これは、奇妙な話である。この頃アメリカでは、戦後に米国共産党系の反戦反ファシズム新聞として高く評価される新聞『同胞』が、米国共産党日本人部機関紙『労働新聞』の後継紙として、一九三七年一月一日から、ロスアンゼルスのリトル・トーキョーで出されている（創刊号のみ『前進』名、『同胞』復刻版、御茶ノ水書房、一九八八年、田村紀雄「反ファシズムの新聞『同胞』」田村編『正義は我に在り―在米・日系ジャーナリスト群像』社会評論社、一九九五年）。編集長は、米国共産党員の藤井周而、編集部にはカール・ヨネダやジェームズ小田も関係し、後に野坂参三の腹心ジョー小出も入る。

もしも『同胞』が、野坂参三のいう「党の日本局によって刊行されている大衆向け労働者新聞」だとすると、野坂参三は、『同胞』とは別個の日本語大衆新聞・雑誌を企画していたことになる。サンフランシスコにいた「われわれの編集長候補」が、ロスアンゼルス『同胞』の藤井周而ではないとすれば、野坂参三の地下活動の助手で、三七年日中戦争開始期は二人三脚で活動していたジョー小出の可能性が強い。

ハワイにおける木元伝一・有吉幸治を使った宣伝活動？

当時の進歩的な「ハワイの週刊紙」というと、リフエで週一回刊行の『洋園時報』であろうか。「野坂機関」でハワイ出身の共産黨員といえ、宮城与徳を日本に送りだし、当時なお西海岸にいた「ロイ」こと木元伝一が第一に考えられる。木元は三八年一月ハワイに戻って『労働者の声』を創刊する。「ハワイの週刊紙の改善」とは、三八年二月にハワイに戻って関わった英字週刊紙『ヴォイス・オブ・レーバー』編集のこととも、三九年以後の『洋園時報』マネージャー就任のこととも考えられる（カール・ヨネダ『在米日本人労働者の歴史』二〇一、二二一頁、渡部富哉作成「ジャック木元の略年譜」前掲『野坂参三とゾルゲ事件の深層を追う』、中嶋弓子『ハワイ・さまよえる楽園——民族と国家の衝突』東京書籍、一九九三年、二〇五〜一三頁）。

ただし、三八年ハワイでの木元の一挙一動は、日本の官憲に詳しくフォローされていた（ホノルル水澤総領事から外務省への報告「布哇共産党の近況」『外事月報』一四一〜一四三号、一九三八年）。しかも木元は、三七年時点ではカリフォルニアにいる。

「ハワイから招いた」というのだから、後の一九四四〜五年に中国延安の共産党解放区で野坂参三にインタビューする米軍「デイキシー・ミ

ッション」の一員・有吉幸治も、候補になりうる。有吉は一九一四年生まれ、ハワイ・コナ島出身で、コーヒー農園・建築労働者を経て、三七年ハワイ大学入学時から『スター・ブレティン』等に寄稿するジャーナリストとなり、四〇〜一年は米国本土のジョージア大学に学ぶが、四一年日米戦争勃発時にはサンフランシスコで沖仲士をしながら藤井周而、カール・ヨネダらの『同胞』紙刊行継続に加わっている（カール・ヨネダ『がんばり』一六〇頁、Alice M. Beecher and Edward D. Beecher eds., *From Kona to Yenan: The Political Memoirs of Koji Akiyoshi*, Hawaii UP, 2000）。

野坂報告のいう大衆新聞発行計画とは、『同胞』とは別の新しい日本語新聞のことであり、その計画を検討したDとかBedとかは、暗号だらけである。しかしE・Bが米国共産党オール・ブラウダー書記長の暗号名であることがわかれば、米国共産党内で「野坂機関」をサポートした非日本人メンバーとして、案外簡単に解読できる。Bedは米国共産党の陰の指導者で、一九三五〜七年期にジョー小出を指導していたBedfordことルディ・ベイカーである（『アメリカ共産党とコミンテルン』一〇三〜四頁、岡本和彦「ルディ・ベイカーの秘密の活動」加藤哲郎他編『差異のデモクラシー』日本経済評論社、二〇一〇年、参照）。

和田春樹は、Dとは野坂参三自身と解読しているが、「われわれは八月にモスクワに電報を打ち、Dを呼びもどして、すべての問題を討議するように求めたが、返事をもらえなかった」という一文からしても、野坂自身ではありえない。『アメリカ共産党とコミンテルン』中の同種の手紙からして、カリフォルニア共産党指導者からコミンテルン第七回大会後アメリカ共産党モスクワ駐在代表に「出世」したサム・ダーシーがDであった可能性が高い（一二三頁、注二六、H. Kehr, J. E. Haynes

and K. Anderson eds., *The Soviet World of American Communism*, Yale UP, 1998, p.25)。

「アメ亡組」活用構想——「工作の大きな部分は米国共産党日本人部に移った」

野坂参三のディミトロフへの提案は、おそらく「野坂機関員」本元伝一を想定した「ハワイへの工作」と、「将来におけるアメリカでのわれわれの工作の性格」で括られる。

ハワイには日本人が一五万人いる。これは島の全住民の四〇パーセントにあたる。われわれはここでアメリカ共産党の指導下にわれわれの工作を強めようと努めてきた。本年はじめには、日本人のオルグをその地に派遣した。そこにはわずか三〇人しか共産党員がないが、多くの日本人が労働組合に組織されている。……日本および港での海員の結び付きは、ここでもカリフォルニアと同じく困難になっている。唯一の利点は、以前にわれわれがこの目的のためにハワイを利用しなかったので、日本の警察がこの点では警戒心が弱いということにある。……

生じた困難な新情勢のために、われわれはアメリカでのわれわれの工作の性格を変えることをよぎなくされた。すなわち、……新しい接触を確立することに努め、海員のあいだでの工作とわれわれの文献の出版と配布をつづけながら、アメリカ、カナダ、ハワイなどにおける日系移民と留学生の中での工作に力点を置くことをよぎなくしたのである（本年はじめからわれわれは一時的に文献の日本への発送を停止した）。われわれの工作の大きな部分はアメリカ共産党日本局に移ったのである（同書、二八一～二頁）。

かくして一九三八年には、野坂参三＝山本懸蔵グループによる『国際

通信』『太平洋労働者』等を通じた対日宣伝工作は下火になり、米国共産党日本人部の組織を介した諜報活動に重点が移動する。日本側官憲の記録でも、対日左翼宣伝文書の流入が急速に衰えたことが確認できる。メディア研究者山本武利が、第二次世界大戦中の米国の戦時宣伝用語から抽出した表現を借りれば、「ホワイト・プロパガンダ」から「ブラック・プロパガンダ」及び地下諜報工作への移行である（山本武利『ブラック・プロパガンダ』岩波書店、二〇〇二年）。

その組織的諜報活動の格好の人材は、もともとソ連で見つかるはずであった。しかし三八年八月、野坂参三がモスクワに戻ると、アメリカを追われてソ連に亡命していた一世の日本人たち「アメ亡組」は、リーダーであった健物貞一をはじめ、西村銘吉、堀内鉄次、箱守平造、福永与平ら、沖縄出身の又吉淳、山城次郎、島正栄、照谷忠盛も、軒並み「スパイ」として銃殺されるか、強制収容所（ラーゲリ）で生命を落としていた。日本でゾルゲ機関に入った宮城与徳の従兄宮城与三郎も、三八年五月に銃殺された。

粛清された永浜丸也とソ連に入って後離婚していた永浜サヨは、親しくしていたレニングラード大学日本研究者ニコライ・ネフスキー＝萬谷イソ夫妻への粛清で追いつめられ、秘密警察に捕まる直前に窓から飛び降り、自ら生命を絶った。三年後に宮城与徳が試み、成しえなかった自己決定である。

「刎頸の友」であった山本懸蔵さえ粛清の犠牲で獄中にあり、その山本懸蔵に密告された伊藤政之助、国崎定洞らも総粛清されていた。野坂参三の妻龍も、参三がアメリカで活動中の三八年二月にいったん逮捕された。最終的に龍だけは、生命は救われたが（本誌収録の藤井一行遺稿、参照）。

この事情から、野坂参三の求める人材は、新たに「外国」、つまり米
国共産党日本人部に求めなければならなかった。カール・ヨネダ『がんば
ばって』の一節が、生きてくる。

一九三八年に、ロサンゼルスのある婦米党員が、小出ジョーには疑わ
しいことがいくつもあり、彼はアメリカの手先である、と党の日本人部
に訴えてきた。しかしその訴えはあいまいで決定的な証拠もなかったの
で、なんの処置もとられなかった。

嫌疑の一つは、コミンテルン代表として小出が、南カリフォルニア日
系人党員全員にたいして、党内の未決定の任務割当てに用いると見せか
け、ある種の情報を提出させたということだった。質問項目は、党内変名、
本名、住所、一世・二世の区別、性別、年齢、職業、勤務先、入党年、
党員証番号、所属する党細胞名・組合名、ほかに自分が所属している組
織名、などだった。

これらほとんどの質問は、党の手続きに違反していた。数人がこの異
常な質問に疑問をいだいたが、小出が極秘を約束したので、婦人七人を
含む四六人が質問用紙に記入した。後日、小出を密告者として告発した
婦米党員は、そのうちの一人であった(同書、一三七頁)。

この米国共産党党内調査が、野坂参三の指示で行われたか否かは確
認できないが、「オモテ」の党員たちにとっては、「ウラ」の指導者ジョ
ー小出と、戦後一九六〇年代に在米地下活動が判明するそのボス野坂参
三への不審「スパイ」容疑の出発点になる。

渡部富哉によると、野坂参三は、一九三四年三月のアメリカへ出国後
に、次のような電報を、モスクワのコミンテルン情報連絡部(OMS)
責任者ピートニツキーに送っていた。神達八郎の日本到着は四月末であ
るから、野坂参三の初めてのサンフランシスコ到着の時期が一九三四年

四月二七日以降と特定できる。つまり野坂は三三年に宮城与徳を日本に
送り出す「ロイ」ではありえないことを示す、重要な電報である。

二七日にサンフランシスコに到着し、フィッシャーに会った。リヴァ
ンから日本に到着したという電報を受け取った。彼はいままで党との連
絡がとれていない。七月に日本人かアメリカ人を一人日本に送る。誰か
を選定するためにフィッシャーをロスアンゼルスに送った。ビラの発行
をはじめた。国際的定期刊行物を出す必要がある。インプレコールから
翻訳する。現在日本に三〇〇部送ることができる。七月半ばころ、アメ
リカ人一人と日本人一人を日本に送るつもりである。その日本人は連絡
のために横浜に店を一軒開く。彼は労働者で信頼できる。店のために資
金を送ってほしい。五人の日本人ーリコーとルジンを含めたーをモスク
ワから中国、日本に向けて送り出す準備をお願いしたい(渡部富哉「ゾ
ルゲ事件と野坂参三」『歴史民俗学』第一四号、一九九九年、一五頁)。

ここに出てくる「フィッシャー」とは、コミンテルンの「闇の世界」
に連なり、サンフランシスコで汎太平洋労働組合書記局とOMSの活動
を指揮していたハリソン・ジョージのことである(『アメリカ共産党と
コミンテルン』一二三頁)。

しかし「リヴァン」は神達八郎、「リコー」は小林陽之助、「ルジン」
は飯塚博のいずれもが、野坂参三の指名による「密使」抜擢にもかかわ
らず、本格的使命を果たせずに官憲の手におちた。和田春樹によると、
野坂は二度目の訪米中の一九三六年六月、「アメ亡組」中の五名をアメ
リカに潜入させる提案をコミンテルンに送った記録(コミンテルン人事
記録 RTskhDNI, f. 495, op. 65a, d. 2153)がモスクワにあるという
(和田「歴史としての野坂参三」六一、八四頁)。

このように考えると、「アメ亡組」の中から早くに選抜されて、モス

クワ大粛清の初期に野坂参三から日本へ派遣され、今度はアメリカ警察ではなく日本の官憲に逮捕され詳しい「供述書」を残した小林勇は、幸運だったといえる。しかし、モスクワに残された小林勇以外の「アメリ組」全員は、「日本のスパイ」として銃殺されるか、ラゲリ送りになった。伊藤利三郎と一緒に工作員訓練を受けたワンピン（小石濱蔵）、ニフ（永井二一）も、「密使」になる前に粛清犠牲者となった。

九 「カール・ヨネダ・ペーパーズ」における書記「水野成夫」の謎

米国共産党日本人部は、日本天皇制権力に長く監視されてきた

戦前日本の官憲資料の中には、これまで詳述した『外事警察概要』各年版や「宮城与徳手記」「岡繁樹聴取書」「小林勇供述書」のほか、『社会運動の状況』『特高月報』『特高外事月報』『外事月報』『外事警察報』『外事警察資料』『思想月報』『思想研究資料』などに、少なからぬ米国共産党・米国共産党日本人部関係の記録がある。

たとえば『外事警察報』昭和十二年一月の「最近に於ける米国共産党の組織」は、サンフランシスコの日本領事館が外務大臣に提出した、サム・ダーシー指導下の米国共産党第一三区（カリフォルニア州とネヴァダ、アリゾナの三州を所管）の詳細な組織系統図と解説であり、今日のアメリカ本国での米国共産党研究の現状に照らしても、意味あるものである。

また、米国共産党日本人部に当初組織されなかったが、野坂参三の海外からの活動や後の第二次世界大戦時の日系共産主義者の米軍協力に重

要な役割を果たす、ハワイの日系共産主義運動について、『外事月報』第一四一（三）号（昭和十三年）に「布哇共産党の近況」という連載があり、「ゼームス木元＝木元伝一」の一九三八年の活動についても詳しく記述している。それは、渡部富哉の木元伝一調査や、カール・ヨネダ「ハワイの日本人雑誌」に収録されているほか、特集形式でその内容・手法・流入経路が詳しく分析されている。

さらに、「昭和十三年四月 管内事情 在紐育日本帝国領事館」という外務省外交史料館文書のように、雑誌等に掲載されなかった米国共産党調査もある。そこでは、ニューヨークに滞在する日本人、朝鮮人の詳細が七〇頁に渡って多面的に分析され、「邦人共産主義者活動状態」で、西村義雄、石垣榮太郎、西野喜一、瀧尾、北村、松井ハル「石垣綾子」、保津忠雄、森ジョージの経歴・近況が詳しく述べられている。

同じく外務省外交史料館文書で、「極秘」の印の押された「昭和十四年七月三日 外事警察事務協議会要録」には、内務省・外務省合同で、海外渡航問題、中国渡航取締、外国人入国令改正等と共に、「在外邦人共産主義者」が協議され、佐野碩、石垣榮太郎、土方興志、石垣（田中）綾子、西野喜一、西村義雄、保忠蔵の七人が特別にとりあげられ、詳しく報告された記録がある。

ゾルゲ事件や野坂参三の研究によく知られているのは、カール・ヨネダが一九七一年二月に米国スタンフォード大学フーパー研究所で発見したという、内務省警保局長から各府県長官宛「一九三八年八月三十一日付警保局外発用第百十一号 極秘 米国加州地方邦人共産主義者二関スル件」という資料である。

「米国加州羅府地方ニ於ケル邦人共産主義者ノ状況ニ関シ別添ノ如ク外務省ヨリ通報アリタルニヨリ参考ニ供セラレ度、並貴管下ニ於テ今後

該当者判明シタル場合其都度御報告相成度」として、「フランク吉村、フランク吉本、メリー今田、K・山城、前本、伊々峰、T・比嘉、Y・ヨネダ、N・星、J・松田、本文、トム山崎、三田平八、中曽根千代子、ジョージ土肥中、高田、宮崎四郎、ジェームズ織田、ルイズ帯広、許斐氏信、N・島、平、北林譲二、H・芹沢、ジョージ具志堅、帯兼千代、ジューン西、鷹羽七五三、Toshi Hara、井口、沖村清子、北林操、江馬、K・長沢、ジョージ河合、仲馬諒之助、松田ツユ子、石田、ジャック木本、森千枝、山崎平、野沢正雄、岡本 Sumi、ジョージ古屋、本名不詳（木村）、H・西、Wallie Dee」の四七人の氏名・通称・党名・年齢・住所・職業、入党年、党員証番号、任務が掲げられている。先に紹介した北林トモの党員番号・所属細胞が書かれた一九三三年『外事警察概況』より人数は少ないが、詳細なものである。

この資料は、P・ランガーⅡR・スウェアリンゲン共著『日本の赤い旗』（コスモポリタン社、一九五三年、原書一九五二年）に一度紹介されており、そこには、翌三九年内務省作成の在米邦人思想被疑者四百名のリストもあると述べられていた（九九頁）。今日、この三八年四七名リストは、外務省外交史料館「外務省亜米利加局 各国共產党関係雑件 米国ノ部3（昭和九〜一六年）」や国会図書館憲政資料室「カール・ヨネダ・ペーパーズ」で閲覧できる。これが、カール・ヨネダやジェームズ小田により、ジョー小出が「日本のスパイ」であつた物的証拠とされる。

その理由は、第一に、ジョー小出が「コミンテルン代表」として、一九三八年に「南カリフォルニア日系人党員全員にたいして、党内の未決定の任務割当てに用いると見せかけ、ある種の情報を提出させたということだった。質問項目は、党内変名、本名、住所、一世・二世の区別、

性別、年齢、職業、勤務先、入党年、党員証番号、所属する党細胞名・組合名、ほかに自分が所属している組織名、などだった」。これがそのまま日本領事館に流され、内務省リストが作成された、という嫌疑である。ただし、このジョー小出調査の時期は、ジェームズ小田は「一九三八年の初期であつたと思う」というが、特定されておらず、ジョー小出の背後に野坂参三の指令（先に紹介した三八年九月のデIMITロフ宛手紙）があつたかどうか、はつきりしない。

第二に、このリストにジョー小出自身が入っていないことが怪しいというもののだが、このリストが正確なものでどうか、ジョー小出以外に欠けている重要党員がいまいかどうかは、チェックされていない。例えば「藤井周而」の欠落については、カール・ヨネダもジェームズ小田も、口をつぐんでいる。ちなみに渡部富哉というように、ジョー小出のソ連時代の党名であつた「西」の名前が、別人ではあるが入っているし、「野坂機関」にも関係したゾルゲ事件の「ロイ」ことジャック木元Ⅱ木元伝一は、「木本」としてであるが、リスト中にある（渡部富哉『野坂参三とゾルゲ事件の真相を追う』一一頁以下）。

第三に、名簿の末尾に四七番「Wallie Dee」という無線技師の白人が入っている点で、これは秘密諜報に関わつた「野坂機関」の関係者が作つたリストでなければ入り得ないものだからジョー小出である可能性が強い、というのがジェームズ小田らの言い分である（小田『スパイ野坂参三追跡』五七〜六八頁）。

これらの問題は、『偽りの烙印』（五月書房、一九九八年）等渡部富哉の一連の研究でも追求されているが、筆者は渡部と共に、この一九三八年時点での「ジョー小出Ⅱ日本領事館スパイ」説は誤りであると考ええる。

西海岸社会運動資料の宝庫「カール・ヨネダ・ペーパーズ」

そこで今度は、米国共産党自身の内部文書を参照してみよう。そもそも「日本人部」が設置された事情そのものが、コミンテルン＝世界共産党内でも多民族・多人種をかかえたアメリカ支部＝合衆国共産党の特殊性だった。ここではカリフォルニア大学ロサンゼルス校所蔵「カール・ヨネダ・ペーパーズ」(Karl G. Yoneda Papers, in Japanese American Research Project Collection, No.1592, Special Collections, University of California, Los Angeles)を参照してみよう。最後まで日系米国共産党員として著名だったカール・ヨネダの寄贈した一次資料のコレクションで、今日では日本でも国会図書館憲政資料室で閲覧できる。

そこには米国共産党日本人部に関わる、膨大な第一次資料が集積されている。『階級戦』、『労働新聞』、『同胞』など新聞・雑誌とリーフレット類の現物が残されており、また、自ら体験したマンザナー収容所など戦時中の日系人強制収容所関係の資料三二ボックスは、きわめて貴重なコレクションである。

カール・ヨネダは、戦後の日本共産党や野坂参三にも多くの通信を送り交流したので、日本共産党機関紙『赤旗』の切り抜きや、片山潜、幸徳秋水らの個人ファイルも残されている。しかし、ジョー小出や宮城与徳・北林トモについては個人ファイルがあるのに、なぜか野坂参三との交信記録だけは、膨大な資料の中に残されていない。野坂ないし日本共産党の要請で、隠匿ないし廃棄されたものと考えられる。

そこで、以下では、Box 13, History of Japanese Labor in the U.S. Folder 1, Japanese Socialists-Communists in the U.S. in 1930s and 1940sに入っている、英文のBrief Outline: U.S. Japanese Socialists-

Communists Prior to and During '30s and '40s prepared by Karl Yoneda 1/11/77「一九七七年一月一日」というタイプ印刷一頁の文書、及び、そのすぐ後に収録された日本語手書きの「在米日本人共産主義者略史 (A Brief History of U.S. Japanese Communists)」というよく似た内容の八頁の文書を検討する。この後者には、冒頭に「この文の一部又は全部使用の際は必ず From Karl Yoneda's Files と附記する」とあり、日付は一九七九年二月二四日になっている。両文書の内容には重複する部分が多く、日本語文の方が詳しいので、「一八八六～一九〇〇年 日本の政治的亡命者がアメリカ合衆国にくる」に始まり「一九四二年 日本人共産主義者は率先してアメリカ合衆国軍に志願し太平洋でたたかう」までが年表風に述べられる英文「一九三〇・四〇年代前後の日本社会主義者・共産主義者概要」は省略する。私の補注は「」で記し、分かりやすくするため項目ナンバーを付す。

日本語文 在米日本人共産主義者略史

① 在米日本人共産主義者のことを語る場合は片山潜の名を逸することは不可能。一九一九年 CHICAGO で二つの共産党創立。即ち Communist Party of America 「アメリカ共産党」と Communist Labor Party 「共産主義労働党」。前者は外国生まれが中心なので片山潜はこの創立者の一人になる。彼が NEW YORK で始めた日本社会主義研究会の会員(約一〇名)全部入党。党内に片山を議長とする ORIENTAL BUREAU を設立。この中には中国人・朝鮮人も二、三人いたとのこと。しかし、片山はメキシコやカナダの共産党組織にも多忙のため BUREAU の仕事は余りできなかった。片山がモスクワ入りしたのは一九二二年二月。社会主義研究会で入党した者の中には猪俣津南雄もあり、翌年(一

九二〇)には鈴木茂三郎も入党した。片山は独力で『平民』を一九一六〜一九年まで(一号から二二号)発行した。(日英文)

② 片山の去った後の日本人共産黨員共は、主に石垣栄太郎が中心となつて一九二〇年に『イスクラ』一号をNEW YORKで発刊。一九二三年に『労働者の力』(一号から三号まで)NEW YORKで西村義雄と石垣編集で発行。ニューヨーク日本人労働者クラブの機関紙。

③ 一九二五年頃にはSAN FRANCISCO、LOS ANGELES方面で一世の入党者三十余名にのぼる。同年押山栄蔵編集で『大衆』一号出刊。ロスアンゼルスで、つづいて同年設立した羅府日本人労働協会の努力で『健』物貞一(早稲田大学出身)を編集者として『階級戦』を出刊、後に出版をサンフランシスコに移し一九二八年まで続刊(一号から一八号まで)。印刷は岡「繁樹」の金門印刷所で行う。

④ 一九二八年にはNEW YORK、LOS ANGELES、SAN FRANCISCOの労働者クラブ、労働協会などが一緒になつて在米日本人労働協会を創立、その機関紙として『在米労働新聞』を発行、一九二九年まで続行(第一九号より三四号まで)。

⑤ 一九二八年には、共産党内にJAPANESE NATIONAL BUREAUを設立、各都市のJAPANESE FRACTIONと連絡を計る。BUREAUの書記に水野成夫、局員に剣物その他、後にカール濱「ヨネダ」、藤井周而らも参加。当時の日本入党員は主に一世で婦米が数名、一世婦人も数名、合計百余名。一九三〇年頃は二百余名。二世の黨員はこの当時一人か二人か位。

⑥ 日本人ビューローは党中央部の指揮下におり、各地の日本人フラクションの代表者を招集して代表者会議を必要に応じて招集し、又『ブレティン』『党建設者』を発行す。

⑦ 日本入党員の増加で英語のわからない人々を集めて組織したUNIT「細胞」が一つか二つあった様だが之は党組織に反するので必ず一人か二人の白入党員が出席していた。

⑧ 日本人ビューローのとりあげた問題は国内、国外、特に日本に関することもあり、その方針は当時の『労働新聞』や『同胞』に反映しているの、之を読む必要がある。

⑨ 日本入党員の勇敢な活動は当局も許さずとみてか一九二九年の剣物が送還事件に引かかつて以来一九三二年まで一八件に及んだ。何れも自由出国を勝ち取つてSOVIET UNIONのINTERNATIONAL RED AID「国際赤色救援会」の招待で同国に入る。

⑩ CHINESE BUREAUともよく話し合いの会合を持つ。本部はSAN FRANCISCOにあり。JAPANESE BUREAUは一九三三年LOS ANGELESに移り書記は藤井周而が選ばる。

⑪ 『労働新聞』名で共産党日本語課機関紙として一九三〇年より三六年度まで(三五号より百七十二号まで)SAN FRANCISCOで発行。発行数は二千部。定期読者は二百余名。一九三〇年から三三年までの主筆は水野、一九三三年か「ら」三六年まではカール・ハマ編集。当時『労働新聞』は活字を購入していたので専門文選工として松井周而が働き印刷だけ金門印刷所で実費でやつてもらった。共産党機関紙というので一世間ではこわが「ら」れていた。

⑫ JAPANESE BUREAUの討議決定で『労働新聞』を一九三六年二月で中止し、一九三七年よりLOS ANGELESで日英文大衆新聞を出すことにしたが、第一号はまだ名前が決まっていなかったもので『前進』杉村ヘンリー「藤井周而」編集で発行し、二号より藤井周而編集『同胞』として一九四二年四月二三日「ま」で発行(一号から二七号まで)、『同

胞』になってから二世間に多くの読者をもち在米一世間にもよく読まれた。発行部数二〇〇〇部。

⑬ 一九三八年の ALIEN REGISTRATION ACT 「外国人登録法」で党は外国生れを保護するため自意離党を認め又すめたが、それでも一世の中にはあくまでふみとどまつて活動するという党員がかなりいた。

⑭ 野坂参三の在米時代の地下活動は『赤旗』7/21/72「一九七二年七月二一日号」参照。之に参加した党員は松井周而（一九五二年日本に送還）、ジョージ具志堅（帰米、ヨーロッパで戦死）、ジョー小出（後にスパイであったことが判明）、ジミー中村（数年前に帰日）、長谷川泰夫（数年前帰国）、今田初子（病死）、ハロルド小野、カール・ヨネダその他。野坂グループの仕事は日本の革命運動に大きな役割をなしている。再評価と再吟味をなすべきである。

⑮ JAPANESE BUREAU はジョー小出を通じてロシンテルンとも連絡を一九三五〜四二年まで行った。報告のやりとりで指令をうけるようなことはなかった。

⑯ 同時期の JAPANESE BUREAU の指導部は小出、藤井、ヨネダその他で、『同胞』は常に BUREAU の指揮下におかれていた。

⑰ PEARL HARBAER 「真珠湾」直後に党書記長 EARL BROWDER 「アール・ブラウダー」（当時旅券偽造事件で在獄し獄中より指導していた）独断の命令で日本人党員の党籍を SUSPEND 「剥奪」した。BROWDER は分派主義者であり日和見主義者でありながら書記長にまでなっていたのは演説が上手ですぐれたマルクス主義者の如く振るまわり、この様な男を書記長にした党指導部にも大きな弱点があったわけである。彼の独断的指令は「日本人第五部隊」「第五列」の一番よいかくれ場所が共産党であるから日系人党員を党内にとどめておくことは危険だ」

という子供だましのような言葉であった。当時の日系人党員は全米で三〇名近く位だったが党籍はなくとも党の方針には忠実に従って行動した。例えばファシズム打倒のための米軍志願の如き。

⑱ キャンプ内における日系人党員は話し合いだけで（集会らしいものはもたなかった）同一行動をとった。但しジョー小出と藤井寮一（一九五二年西夫妻の送還事件で政府の証人となり現在は『シカゴ新報』編集者）のみはキャンプ内の日本人に対する民主教育を重視したのみであった。

⑲ 米国共産党は戦時中の日本人に対する政治的過失に関し、一九五九年と一九七二年の両大会で自己批判の決議文を通過している（2/18/72「一九七二年二月一八日」の決議文参照）。

⑳ 日系人党員は戦時中は党員として活動したが戦後党籍に帰った者は少数で JAPANESE BUREAU の再建の必要がなく特にマッカーシズム後党から遠ざかっていった者が多く残りの者特に二世はシンパとして党を支持してきた。

㉑ 一九一九年の米国共産党創立以来日本人党員のアメリカの党や日本の党に対する、またアメリカ労働運動や日本の革命運動に対する献身的功績は決して軽いものではない。今日の若い日系人活動家は CPUSA 「アメリカ共産党」に対する反感から之ら日本人党員の歴史を学ぼうとせず、また書いても自分によい所だけ書くか話すかしている。よい例は一九七一年 JUNE ISSUE 「六月号」『「RODAN」 SAN FRANCISCO 「サンフランシスコ論壇」』に連載された「100 YEARS: JAPANESE LABOR IN THE U.S.」 BY KARK YONEDA 「カール・ヨネダ」「アメリカにおける日本人労働の百年」で、一九三四年に YONEDA 「カール・ヨネダ」が CP TICKET 「共産党公認」を SAN FRANCISCO 22ND ASSEMBLY

DISTRICT [サンフランシスコ州議会第二選挙区] から立候補したことを省略している。こんな例はいくらでもある。いくら政治的見解が異なるにしても歴史の見方に對し不正直であり不真面目であり、こうした偏見は運動の中にも反映している。注意すべきである。

以上

カール・ヨネダ

米国共産党日本人部初代書記「水野成夫」とは？

ここで注目すべきは、⑤の「一九二八年には共産党内に日本人ビューローを設立、各都市の日本人フラクションと連絡を計る。ビューローの書記に水野成夫、局員に健物その他、後にカール浜、藤井周而らも参加」の記述である。ここに出てくる「水野成夫」の名を裏付ける資料は、英文「概要」にも「カール・ヨネダ・ペーパーズ」全体のなかにもない。

強いて言えば、ファイルの分類目録中に、健物貞一に代わつての「浜」カール・ヨネダ自身の前任の一九三二年一月〜三三年五月の『労働新聞』編集者として、「Hideo Mizuno」があるが、これは当時の『労働新聞』の発行者名ではなく（全号チェックはしていないが、筆者の手元資料では紙面には「米国共産党日本字機関紙 労働新聞社発行」のみ）、健物貞一や自分自身と同じ『労働新聞』編集長についてのカール・ヨネダの解説で、「略史」に帰着する。ここでは「水野成夫」を「シゲオ」でなく「ヒデオ」と読んだのだろうか。

「水野成夫」といえば、当時東大新人会出身の日本共産党の有力党員で、一九二七年には日本共産党を代表してコミンテルン極東書記局員になり上海に滞在、中国武漢政府樹立計画にも関わっている。しかし、二八年三・一五事件で検挙され、「党中央委員転向の第一号」になり、戦後は

フジテレビ産経新聞グループの総帥になったことは、あまりにも有名である。その水野成夫が、三・一五事件直前にコミンテルン極東書記局の使命で秘かに渡米し、米国共産党日本人部の結成に加わったのであるか。

『人間 水野成夫』（サンケイ新聞出版局、一九七〇年）や、水野をモデルにした辻井喬（堤清二）の小説『風の生涯』（新潮社、二〇〇〇年）には、この頃渡米した史実は見あたらない。『思想月報』第六一号（昭和十四年七月）は「水野成夫 昭和三年三月一日予審請求、三月二四日予審請求、同五年四月八日予審終結決定、付公判、同一三年二月七日懲役二年 三年間執行猶予」と明快である。

『朝日人物事典』では「二八年三・一五事件で検挙される。翌年中央委員クラスでは最初の転向を表明。出獄後は、一転してフランス文学の翻訳など文筆業に専念。アナトール・フランスの『神々は渴く』など二〇冊近い訳書を残し、一部はベストセラーともなった。四〇年には同じ転向仲間の南喜一と大日本再生製紙会社を設立」云々と、戦後財界の大立者としての波乱の人生が述べられている（朝日新聞社、一九九〇年）。つまり、日本共産党の水野成夫ではありえない。

日本共産党史にも詳しいはずのカール・ヨネダは、なぜ「水野成夫」を、米国共産党日本人部創設者「一九二八年以降初代書記で最高指導者、『労働新聞』編集責任者だったと言うのだろうか。

前述のように、カール・ヨネダが日本共産党の協力で公刊した日本語書物『在米日本人労働者の歴史』では、健物貞一の『階級戦』創刊や日本人労働協会については述べられているものの、「米国共産党日本人部」についての言及は、注意深く避けられていた。

上記メモ作成後に執筆された、カール・ヨネダ自伝『がんばって』で

は、「日本人部」が登場したものの、奇妙な叙述が含まれている。明らかに、すぐ後の叙述（三三年にロスアンゼルスからサンフランシスコに移住、『労働新聞』主筆就任）と矛盾するから、誤訳の可能性もあるが、「略史」とは正反対に、一九三三年まで日本人部書記局（ビュロー）はロスアンゼルス、三三年以降がサンフランシスコだという。

正規の会合のほか、私は、アメリカ共産党中央委員会言語局に属する五人編成の日本語部に関係していた。そのためロスアンゼルスで週一回会合をもって、一九三三年からは、サンフランシスコにセンターを移した。日本語部は、日本人会や沖縄人会など、各日本人組織のなかで、これにたいする党の政策を立案した。また、党の政策を効果的に遂行するための最良の方法について指示を出したり、『労働新聞』の新規購読者や資金を獲得する運動を指導したり、失業者の集会や行進の動員をかけた。日本語部はまた、当時地下活動中だった日本共産党との連携を広げた。日本語部は、年に一、二回、日系党員の全国会議を招集し、日系人のさまざまな組織や社会のなかで起こっていることについて、報告し、討論した。こうして私は、社会主義をもとめる闘争に全情熱を傾けている日系人党員―私もその例にもれないが―のほとんどの人と出会った（同書、五七頁）

ここでは「日本人部」に初めて言及したが、その設立経緯、指導者については述べていない。どうやら、「カール・ヨネダ・ペーパーズ」の「略史」は、『在米日本人労働者の歴史』の叙述をその後の資料収集・検討で修正し、自伝『がんばって』を準備するために「米国共産党日本人部」を自分なりに探求していく過程でつきあった、カール・ヨネダ自身の「心の闇」を、反映しているようだ。

それは、英文「概要」にはなかった⑭「野坂参三の在米時代の地下活

動」、自分の知りえなかった「野坂機関」の全容を知ることによって、生まれたもののようなのだ。

自伝『がんばって』の「S・水野」とは「矢野某」矢野努のことか

カール・ヨネダの「略史」には、もう一つ、⑪一九三〇～三年の『労働新聞』主筆が「水野」とあり（これは、目録の Hideo Mizuno の三二～三年より長い）、⑩「日本人ビュローは一九三三年ロスアンゼルスに移り書記は藤井周而が選ばれる」とある。

一九三〇～三年に、当時の日本共産党「解党派」水野成夫が米国共産党で活動するわけではないから、ここでヨネダのいう「水野」とは、「宮城与徳手記」にもあつた当時の指導者「矢野某」矢野努＝党名武田＝本名豊田令助）以外になく、カール・ヨネダは見え透いた嘘を書いている（このことは、別の資料でも実証される）。

実際、カール・ヨネダの著作では、党を追われた日本人部指導者矢野努＝豊田令助は、マツカラン法による元共産党員日本人送還者の一人としてしか出てこなかった。上記「略史」でも、当時の米国共産党書記長ブラウダーは、⑰一九四五年に共産党を除名されるか以前から「裏切り者」であつたかのように書かれている。ジョー小出や藤井寮一も「裏切り者」扱いである。これは、今日でも共産党系の著述によく現れる、党除名者・離党者を過去に遡及して「裏切り者」「日和見主義」と糾弾する没歴史的党史で、一九七九年当時のカール・ヨネダの叙述も、その悪弊に染まっている。「略史」末尾の⑱「いくら政治的見解が異なるにしても歴史の見方に対し不正直であり不真面目」という評言は、カール・ヨネダ自身にそのままはねかえる。政治的言説は、政治的に解析されなければならない。

それでは「水野」とは、矢野努Ⅱ豊田令助のことで、彼が一九二八年米国共産党日本語部の初代書記であつたのだろうか。これまで見てきた「宮城与徳手記」「岡繁樹聴取書」「小林勇供述」では、矢野が西海岸に現れるのは二九年末の健物貞一検査以降である。なぜ矢野のことを「水野成夫」と、姓だけならともかく、敢えて名前まで付して、政治的に隠蔽したのだろうか。

一つの回答は、「婦米」日本人カール・ヨネダⅡ浜清の入党は一九二七年メーデーで、ロスアンゼルス、メキシコ人の多い党細胞に所属し党活動に入つたため、当時ニューヨークにおかれ、米国共産党中央委員会言語局の直接指導下にあつた日本人部については詳しく知らなかつた、ということだろう。

確かに、後に紹介するモスクワにあつた「米国共産党レコード」に照らすと、カール・ヨネダの記録・叙述には、自分の直接関わつた活動は詳しいのに、伝聞ないし事後の調査研究による部分では、史実と異なる場合が多い。だから⑤の「水野成夫」とは、ちょうど日本の「解党派」で戦後フジⅡ産経グループ総帥の水野成夫のように、後に共産党を裏切つた最高幹部という意味で、矢野努らに付された「米国共産党日本人部書記」の政治的記号であると解説することもできそうである。

実は、「略史」の後に書かれた『がんばって』にも、一カ所だけ「S・水野」が登場する。もちろん『在米日本人労働者の歴史』にはなかつたもので、今度は「Hideo Mizuno」とも異なる、不可解な叙述である。「日本へ送る反戦文書」という、日本の読者にとっては関心のある重要な箇所であるのに、訳者である当時の日本共産党推薦衆議院議員・田中美智子夫妻も、出版を助けた日本のコミンテルン研究の大御所・村田陽一も、気づかなかつたようである。なんの訳注もない。

一九三三年に私が『労働新聞』主筆を引き継いだとき、アメリカ共産党日本人部書記のS・水野は、定例の会合で、ジョーという名の身なりのいい若い日本人を、日本人部の新メンバーとして紹介した。日本人部は一世二人と婦米二人で構成されていた。私は婦米の一人だつた。新人が加わつて、日本人部は五人の組織体となつた。私たちは、彼の個人的経歴について知らなかつたし、尋ねもしなかつた。というのは、かなり多くの一世黨員が国外追放を受けてから、厳しい秘密体制をとつていたのである。私たちは個人に坎んする質問はしなかつたし、いかなるノートも、住所録も身につけないようにしていた。また、六カ月のあいだに同じ場所で二度会わないようにしていた。

週に一度、私はジョーの要請で、あらかじめ指定された時刻と場所で、党務処理のため彼に会つた。たいてい下町のレストランだつた。彼は、日本の労働者・革命家向けのビラやパンフレットの原稿をよく渡してくれた。日本語で書かれた原稿は、数千枚印刷されることになっていて、できあがつたものを彼に届けた。印刷はすべて、『労働新聞』を印刷している「サンフランシスコ市」ポスト街の岡繁樹の金門印刷所で、おこなつた。……

ジョーのことについては、彼自身の口から少しづつ知るようになった。彼は小出ジョー（一九〇三—一九七六）の名で通したが、本名は鵜飼信「宣」道といつた。一九二五年、デンバー大学に入学するため合衆国へ入国したが、一九二八年に共産党に入党し、一九三〇年、数人の一世・二世とともにモスクワのレーニン党学校に送られた。一九三三年、コミンテルンのアメリカ代表として、また汎太平洋労働組合書記局代表としての任につくため、アメリカへ帰つてきた。私は知らなかつたが、それらの代表者はみな、サンフランシスコに駐在していたということである。

小出は、彼のグループ・リーダーが、日本共産党の創設者で、コミンテルン日本代表の野坂参三であることについては、私に明かさなかった。野坂は、帰米に給付されるパスポートを持って、一九三四年、密かに合衆国に入国した（同書、一三二～四頁）。

以下、野坂参三の宣伝活動には敬意を払いつつも、野坂の助手「小出ジョー」には疑わしいことがいくつもあり、彼はアメリカの手先である」とカール・ヨネダが考えるにいたる経緯が、縷々述べられる。その「裏切り者」ジョー小出を自分に紹介したのが「S・水野」であり、自分の前任の『労働新聞』主筆であったとする。

ここには、戦後も四〇年近くたつて、革命家としての自分自身の出生の秘密に立ち会ったカール・ヨネダの、心の葛藤が渦巻いている。「そもそも自分の活動の主舞台であった米国共産党日本人部が、宮城与徳をゾルゲ諜報団に送り込み、『裏切り者』ジョー小出ともつながる『水野』であったとすれば、……」という不安である。

「私は知らなかった」——この一節には、ジョー小出、日本人部、レーニン党学校、コミンテルン・アメリカ代表、汎太平洋労働組合書記局、「野坂機関」等々の「闇」のキーワードが凝縮されている。これに、ソ連に入つたまま消息不明になったかつての「同志」たち「アメ亡組」一七人を加えれば、自分の青春のすべてを捧げた「米国共産党日本人部」の骨格が浮かび上がり、それら全体が「S・水野」という記号に集約されている。つまり、「S・水野」とは、カール・ヨネダにとって不可知の「闇の世界」の符牒であり集合名詞なのだ。戦後のマッカーラン法の部分の叙述には、「豊田令助（変名、矢野努）」と、さりげなく当時の「S・水野」の実像の一部が挿入されているにもかかわらず（二四四頁）。

ジエームズ小田からみたカール・ヨネダの生涯

カール・ヨネダの葛藤を理解するうえで、三〇年代米国共産党日本人部の「同志」で、戦後も「ジョー小出」疑惑と一緒に追求する盟友だったジエームズ小田がしたためた「カール・ヨネダの歩んだ道」という文章が、間近で見てきたカール・ヨネダの性格と特徴を描いて有益である。

「帰米」のカール・ヨネダと、「二世」のジエームズ小田は、一緒に「一世」であった「ジョー小出」スパイ」説を探索していた、しかしヨネダが、野坂参三と日本共産党の批判までは立ち入らなかったのに対し、ジエームズ小田は、「ジョー小出」スパイ」説から「野坂参三」宮城与徳を日本に派遣したロイ・アメリカ官憲のスパイ」説まで突き進み、一九七〇年代に袂を分かった。それも、日本共産党内での当時の党副委員長袴田里見と委員長宮本顕治「議長野坂参三の党内抗争に巻き込まれ、ジエームズ小田が袴田里見に「野坂疑惑」の資料を提供したことが、直接のきっかけであった。にもかかわらず二人は、特に「ジョー小出疑惑」解明と「アメ亡組」一七人の消息探求、日系人強制収容問題での名誉回復・補償運動では、一九九九年のヨネダの死まで連絡を取り合っていた。以下は、冷戦崩壊後の「一九九二年五月一日記」と記され、ジエームズ小田が、親しい人々にのみ送った文章である。そこには、米国共産党の第一線で活躍しながら、「帰米」カール・ヨネダと「二世」ジエームズ小田が晩年になって気が付いた、共通の悲哀が表明されている。無論、これも、きわめて政治的な資料であるが（私は、一九九七年ロスアンゼルスで、宮城与徳姪徳山敏子、在米ジャーナリスト野本一平らと共にジエームズ小田と面談した際、本人から入手した）。

カール・ヨネダは現時点では有名無実というべき米国共産党に全生涯を通じて身命を投じた世にも希な人間である。その彼は一九七八年頃か

ら、共に闘ってきた古い盟友達を裏切り、世界無比、前代未聞の陰謀策士野坂参三と組んで謀略の道を歩んできた。今や、世界を欺いてきた野坂参三の罪状が明るみに晒け出されんとしている秋、カール・ヨネダを総合的に批判しておくことは適宜なことであろう。

一九三〇年代の初期、彼はアメリカ共産党日本語機関紙「労働新聞」の編集長を務めていたのであるが、内部の人達の話では、それは彼がその当時唯一の米国市民権保持者であったために選抜されたもので、必ずしもほんとの指導者ではなかったとのことである。その頃の日系共産党員はほとんど皆日本生れの非市民であったので、一度検挙されると送還の浮き目をみた。従って日系市民が先頭に押し立てられ、表面的には代表者のような格好を装っていた。しかし、別個に共産党日本語全国書記局というレッキとした指導部があったとのことである。

一九三四年末、書記長であったロイ矢野（本名豊田令助）がその頃アメリカに潜行してきた野坂参三によって強引に追放された時、カール・ヨネダはその後釜に座り込もうとしたが成功しなかった。仲村幸輝が書記長になり、その次には上里良光が選ばれ、書記局には錚々たる一世マルクス主義者が君臨してヨネダを抑えていたのである。……

ジョー小出、野坂参三糾弾に関連してヨネダがとった態度は曲折迂回を重ね実に奇妙なものであった。戦前から「同胞」支持者層の絶対多数は野坂の部下であったジョー小出を排撃していたが、ヨネダはそんなことには無関心であった。しかし開戦となつて小出が左翼的言辞をほめかすや、ヨネダは激しい論争を展開した。米国支持者は、ヨネダが小出をスパイとして糾弾するものと期待していたが、「論争は路線の違いによるもので、小出はスパイではない」と小出を弁護したので皆を落胆させた。

……

その後小出は一九五三年に下院非米活動委員会の公聴会に公然と政府証人として登場し「太平洋労働者」新聞の内幕について証言をした。更に一九五八年には労組幹部ウイリアム・ハイクラの送還裁判では政府側の重要証人として登場、「ハイクラとはレーニン国際学校で同級生であった」と証言した。かく、ジョー小出は真正正銘のスパイであったことを暴露したのである。この間、カール・ヨネダは小出糾弾の急先鋒となり、一九七一年二月には一九三八年八月三十一日付警保局外発用第百十一号を入手して一般に公開し、ジョー小出らが日系共産党員のリストを日本の特高警察に提供していることが判明した。この間におけるカール・ヨネダの活動は高く評価されるべきである。しかし、彼は小出を糾弾しても野坂に反旗をひるがえすことは避けていた。

日本で左派と言えば、共産党系が中心であろう。アメリカの日系社会で左翼といえは九九%まで中共支持者である。ソ連支持者はカール・ヨネダ独りであった。

一九三八年以後の日系左派陣営の中心人物は次の如し。一、コージ有吉―中共の信頼厚し、二、藤井周而―「同胞」主筆、幸地新政―戦後左派の統一者。

カール・ヨネダは、我々の陣営に片足を踏み入れていたが圏外の独立独歩の人であったことをここで述べておきたい。

一九九二年五月一日記

「水野成夫」とは鬼頭銀一、矢野努ら「日本入部書記」の集合名詞

ここでカール・ヨネダの「略史」を、さらに深読みしてみよう。カール・ヨネダも当然参照し、「略史」の下敷きにした「宮城与徳手記」での米国共産党日本語部の歴史的供述と照らしあわせると、さらに深い

「闇」が浮かび上がる。

「宮城与徳手記」は、米国共産党内での片山潜以後の初期の日本人党員を「西村義雄、山辺清、矢田某、石垣榮太郎、鬼頭某、矢野某等の同志」と挙げていた。矢野については、「昭和四年末健物の検挙によりニューヨーク党本部より新に組織者として矢野（又は武田）がサンフランシスコに來た」とも述べていた。これをロスアンゼルス第一線活動家だったカール・ヨネダが読むと、矢野を含むすべての初期党員が、自分のよく知る西海岸の労働運動活動家コミュニティ出身ではなく、米国共産党本部のある東部ニューヨーク等の党員だったことを意味する。

「矢野某」とは、矢野努＝豊田令助のことであるから、宮城与徳が入党した三〇年代初頭の最高指導者＝日本人部書記である。すると、石垣と矢野の間にある「鬼頭某」は、石垣や矢野と同格で、矢野の前の指導者であった可能性があり、少なくとも日常的党活動に自覚的でなかった矢野の直轄特別党員宮城与徳には、そのように認識されていたと考えられる。あるいは宮城与徳は、「鬼頭銀一」を一九三一年検挙段階から知る特高警察・検事から、「鬼頭は矢野の前任の米国共産党日本語組織者」と示唆されて、そう書いたのかもしれない。

いづれにしろ、「西村義雄、山辺清、矢田某、石垣榮太郎、鬼頭某、矢野某」とは、宮城与徳の乏しい党活動から得た知識の中でも、米国共産党日本人部の歴代指導者と意識されていた可能性が強い。「私は知らなかった」――「闇の世界」に照らして、同じく「闇の世界」から送り出されたらしい「宮城与徳手記」を戦後に読むと、カール・ヨネダには、「矢野の前の指導者＝鬼頭某＝鬼頭銀一」が透けてきたのではないか。

しかし、一九六七年の著書で「鬼頭銀一」の存在そのものを否定し、宮城の渡日事情の「詳細ないきさつはまだ発表の時期ではない」と書き

たカール・ヨネダにとって、そうした「闇」の政治的解説は、耐え難いものであつたろう。「略史」の明らかな誤記である「水野成夫」、『がんばって』に一言だけ表現した「S・水野」には、「矢野」以外の人物の意味も含意されていると考えられる。つまり「日本人部書記」の集合名詞である。

他方で、「S・水野」の名は、ゾルゲ事件に関わり獄死した上海の日本人活動家「水野成」をも連想させる。しかし水野成は中国共産党には関わったが、水野成夫と同じく、米国共産党に直接加わったことはない。ゾルゲ事件の水野成判決文には鬼頭銀一が入っていた。すると「上海の水野成と関わった米国共産党員＝鬼頭銀一」の謎につきあたる。

事実、カール・ヨネダのいう「水野成夫」を、「日本人部組織者鬼頭銀一＝プラス宮城与徳を送り出した矢野努」という、二人の日本人部指導者の歴史的合成記号として読むと、「宮城与徳手記」の「鬼頭某、矢野某」と重なる。宮城与徳にとっては「鬼頭某」こそが、自分をゾルゲ諜報団に送り込んだ「矢野某」に連なる「闇の組織」の記号であり、自分がそこに所属し、命まで捧げたのに、おぼろげにしか見えなかった司令部だった。そしてカール・ヨネダにとっては、自らが編集を引き受けた『労働新聞』前任者までの日本人部指導者は、「裏切り者」や公表できない「ウラの共産党」の怪しげな人々だったという忌まわしい仮説で、彼の収集した機関紙『労働新聞』など「オモテの共産党」史資料によつては、論証できないものであった。

しかし彼は、それを生涯探求しようと努力し続けた。「カール・ヨネダ・ペーパーズ」の、第二次大戦中のマンザナー収容所や米陸軍情報部（MIS）関係を除く部分の主要な資料は、実は「ジョー小出＝スパイ」疑惑の探求と、ソ連で行方不明になった「アメ亡組」の消息を求めた記録

である。それでも探求できなかった「闇」、いや、おぼろげには見えたが、それを公言することは自分の生涯を賭け献身した事業を根底から否定するかもしれない「ウラの共産党」にまつわる葛藤を、カール・ヨネダは、「水野成夫ⅡS・水野」に託したのではなからうか。

ちなみに、全くの偶然と言うほかないが、学生時代に日本共産党の活動と「スパイ」容疑での「査問」を経験したことのある作家辻井喬（堤清二）は、革命運動から資本家へと類似の道を選んだ水野成夫をモデルにした小説『風の生涯』の主人公の名を、「矢野重也」と名付けている。「水野Ⅱ矢野」という、自分史の屈折を投影したフィクションを含んだ連想は、なぜかカール・ヨネダの逆を行くことになった。

「鬼頭銀一は、矢野努の前の日本人部書記で、ジョー小出につながる人物だった」というのが、カール・ヨネダの「水野」に託された隠されたメッセージと読み取れる。

一〇 米国共産党日本人部の真実

―健物貞一、鬼頭銀一、ジョー小出の役割―

コミンテルン「米国共産党レポート」からの日本人部関係ファイル抽出
そこで以下では、私自身が米国議会図書館「米国共産党レコード」のマイクロフィルム解説に取り組み収集し得た「米国共産党日本人部」関係ファイルを概観し、そこから、晩年のカール・ヨネダが直面した「闇」の問題に迫っていくことにする。

ワシントンの米国議会図書館 (Library of Congress) で二〇〇〇年から公開が始まった「米国共産党レコード」(The Records of the

Communist Party, USA) は、モスクワに秘蔵されていた四三万五一六五枚の米国共産党関係文書を、三二六本のマイクロフィルムに収めた膨大なものである。レファレンスも不十分な三二六リール中の約半数から、日本に関係しそうなファイルのみを短期間に手当たり次第に拾った限りのものであるから、完全な調査とはいいたい。あくまでも、中間報告であり序説である。

もともと「米国共産党レコード」は、ロシア現代史文書保存・研究センター (RTskhidnir、旧ソ連共産党付属マルクス・レーニン主義研究所コミンテルン研究部門、一九九九年にロシア国立社会政治史公文書館 RGASPI に改称) の米国共産党関係ファイル (フォントⅡ1515) をフィルムにして、そのまま米国に持ち帰ったものであるから、リール番号は米国側が付したもののだが、それはフォント (fond) 第五一五に含まれるものであり、その下位のオーピシ (opis)・デーロ (delo) のナンバーは、ロシアにある現物と一致する。

米国共産党 (CPUSA) は、よく知られているように、ロシア革命の影響を受け、一九一九年に生まれた二つの党、ジョン・リードら白人中心の共産主義労働党 (CLP) と、多くの移民労働者を含むマルチ・エスニックなアメリカ共産党 (CPA) が、一九二一年に合併して生まれたものである。日本人は、後者CPAの結成に加わった片山潜ら在米日本社会主義者団が、コミンテルンと直結した最初の共産主義者として、米国共産党史・日本共産党史の双方に足跡を残す。

「米国共産党レコード」に最初に現れる日本人の記録も彼らのもので、第二リール (LBR.2, 515-137) に、片山潜・田口運蔵・野中誠之の三名連名の「日本軍によるウラジオストックの軍事強奪・占領への反対声明」が、一九二〇年四月一〇日付けで収録されている。彼らの活動は、

当時のコミンテルンにとっても日本共産党そのものであり、二二年極東諸民族大会日本代表团の中核を成した。私がモスクワで探索した旧ソ連秘密資料「日本共産党レコード」中でも、初期資料の多くは、片山らがモスクワに送った英語・日本語の資料であった（加藤哲郎「第一次共産党のモスクワ報告書」上下、『大原社会問題研究所雑誌』第四八九・四九二号、一九九九年）。

日本共産党はアメリカで生まれた？ 一二二年七月一五日米国务省報告書

注目すべきは、ワシントンの米国国立公文書館（NARA）所蔵の米国务省文書で調べていくと、当時のアメリカ政府にとっても、ニューヨークを拠点にした片山グループこそ日本共産党中央指導部そのものであり、それゆえ監視の対象としなければならない危険な存在だったことである。一九二二年七月一五日、奇しくも今日日本共産党の公式の創立記念日とされる日付を持つ、在日アメリカ大使館から米国务省に送られた報告「日本における共産党 Communist Party in Japan」が、膨大な米国务省日本関係文書のマイクロフィルム中に現れる、最初の日本共産党への言及であった。その内容は、片山グループの結成と極東諸民族大会での活躍、日本国内の社会主義グループとの接触を挙げて「日本共産党は合衆国内にある」とするものであった。ただし内容は荒唐無稽で、史実そのものとは異なるが、当時のアメリカ政府が日本共産党本部はニューヨークにあると認識していたことを示している（From Evan F. Young, Commissioner, to The Secretary of State Washington, No.2569, August 25, 1922. Enclosure: Confidential Report July 15, 1922）。

一九二〇年代の米国共産党は、民族的・政治的グループ間の抗争が激しく、大きく発展できなかった。日本人グループも、コミンテルン執行委員となった片山潜をはじめ主力メンバーが入ソ（田口運蔵、間庭末吉ら）ないし日本に帰国（猪俣津南雄、鈴木茂三郎ら）すると、石垣榮太郎、西村義雄らがニューヨークの地区組織に所属して細々と活動する、局地的意味しかなかった。日本共産党史研究における一九一九〜二四年の堺利彦、荒畑寒村、山川均らを指導者とする「第一次共産党」になぞらえれば、「米国共産党第一次日本人部」である。ただしこれは、二八年以降の西海岸中心の第二次組織化とは異なり米国共産党内の正規の組織ではない。あくまで日本人左翼の非公式グループである。

実際、この期の在米日本人共産主義者の記録は、管見の限りでは、「米国共産党レコード」中に現れない。党内に言語別ビュロー自体は作られているが、日本人・中国人・朝鮮人等アジア人のビュローはなく、アジア系委員はマイナーな存在であったことがわかる。「米国共産党レコード」が、米国共産党がモスクワのコミンテルン本部に送った報告文書中心であるため、旧ロシア帝国構成地域出身者でアメリカに住んでいた共産主義者が、社会主義ソ連に帰国して祖国防衛・社会主義建設に加わるための移住・党籍移転―前述したように、世界共産党Ⅱコミンテルンは、党籍居住地所属主義を採っていた―の手続き書類が大きな部分を占める。

なお、「米国共産党第一次日本人部」については、拙稿「第一次共産党のモスクワ報告書」上下（『大原社会問題研究所雑誌』第四八九・四九二号、一九九九年）での旧ソ連秘密資料紹介のほか、岩村登志夫『コミンテルンと日本共産党の成立』（三一書房、一九七七年）、川端正久『コミンテルンと日本』（法律文化社、一九八二年）、山内昭人『初期コミン

テルンと在外日本人社会主義者』（ミネルヴァ書房、二〇〇九年）、黒川伊織『帝国に抗する社会運動―第一次共産党の思想と運動』（有志舎、二〇一四年）、富田武・和田春樹編訳『資料集 コミンテルンと日本共産党』（岩波書店、二〇一四年）等の参照を求め、以下では、「米国共産党第二次日本人部」に集中する。

西海岸日本人共産主義運動の勃興―健物貞一の急進主義

日本における第一次共産党から第二次共産党への狭間に、「福本イズム」の台頭とエリート学生 of 左傾化・急進化があつたように、米国共産党における第一次日本人部と第二次日本人部の間にも、ある種のイデオロギー闘争が介在した。

その一つは、コミンテルン・アメリカ支部である米国共産党内に内在するもので、ヨーロッパ系移民中心の米国共産党内では、民族別・出身国別の対立に加えて、モスクワのコミンテルン中央での指導者間の争いやソ連・ドイツ共産党内での対立が直ちに米国共産党の小宇宙に持ち込まれ、レーニン死後のスターリン、トロツキーの対立や、コミンテルンにおける初期統一戦線論から「階級対階級」「ポリシェヴィキ化」への政策転換が、米国共産党内にも直ちに持ち込まれた。

米国共産党内での指導部対立も深刻で、チャールズ・ルーセンバークが一九二七年に亡くなるまで党首をつとめたが、W・Z・フォスターらのグループとの抗争が激しく、ジェームズ・キャノンのトロツキー派も生まれ、その抗争の間を縫ってルーセンバークの死後に書記長になったジェイ・ラブストーンは「アメリカ例外主義」を唱えた上で、二年足らずでコミンテルンからお払い箱になる。

その後釜として、一九三〇年代の大恐慌期・相対的高揚期を指導する

のが、党内闘争が激しかった時代に上海で汎太平洋労働組合（PPTUS）書記長をつとめて圏外にあり、モスクワのスターリンの眼鏡にかかった、アール・ブラウダーであった。

日本人部に即していえば、一九〇〇年岡山生まれ、早稲田大学で建設者同盟に属し、二三年早大軍研事件直後にアメリカに渡った健物貞一が、米国共産党日本人部の第一次から第二次組織化の橋渡しになる。

片山潜と同じ岡山出身のために、西海岸では「第二の片山」といわれた健物貞一の、一九二三〜三一年在米時代に書いた数十通の手紙が、今日でも、岡山健物家に残されている。主として家族にあてたこれらの手紙から浮かび上がるのは、向学心に燃えて渡米し、学費のために始めたアルバイトの仕事で西海岸アジア人労働者の悲惨な生活と差別に悲憤慷慨し、抑圧された者との連帯から共産党に近づく。ちょうど「ヴ・ナロード」を唱えた当時の東大新人会学生―水野成夫や中野重治はその典型であつた―とそっくりの姿である。

その健物貞一の家族宛手紙には、一九二九年末の検挙・強制送還裁判まで政治活動への参加は郷里の家族に知らせておらず、共産党入党時期やその活動内容はわからない。ただ、住所の頻繁な転居と、時々弟宛に河上肇の本や日本の雑誌を送ってくれるよう依頼しているところから動きがわかる。その転居が、（二三年）サンフランシスコ、オークランド、（二四年）ロスアンゼルス、オークランド、ロスアンゼルス、（二五年）オークランド、（二六年）ニューヨーク、オークランドとめまぐるしい。カール・ヨネダは、一九六七年の『在米日本人労働者の歴史』に「サンフランシスコでは、早くから健物貞一（早大卒）の指導下に、月刊紙『階級戦』発行（一九二六・六創刊）」（八九頁）と書いていた。しかし、八四年の『がんばって』で、やや記述を改める。

「羅府」日本人労働協会は、一九二五年に、パークレイに住む一世の学生で日雇い労働者、共産黨員でもあつた剣持貞一の力添えで、結成された。

同様のグループが、一世黨員の指導のもとに、サンフランシスコ、ニューヨーク、シアトルで結成された。……一九二五年の結成直後、日本人労働協会は、月刊紙『階級戦』を出したが、二号までしかつづかなかつた。

一九二六年、剣持は、サンフランシスコで、池田豊耕（秀雄）（二世の農業労働者、新聞記者で、一九二〇年のハワイ砂糖耕地ストライキの指導者だつた）の援助を得て、同紙を再刊した。一九二八年に同紙は、『在米労働新聞』と改称し、在米日本人労働協会の機関紙となつた（三二～三頁）。後の米国共産党日本人部機関紙『労働新聞』『同胞』のルーツである『階級戦』創刊の時期が、一九二六年から二五年に遡っているのだが、これは、『カール・ヨネダ・ペーパーズ』所収の現物を参照すると、『階級戦』

がいったん二五年に二号出したが続かず、二六年九月の第四号から二八年一月の第一八号しか現物が残されていないことによる。

早大建設者同盟出身健物貞一による二五年『階級戦』、二八年『労働新聞』創刊

そのため、健物貞一（これが本名だが、『労働新聞』等では「剣持」「剣物」で書いている）の入党時期は確定できず、『階級戦』創刊号もみつかつていないのだが、家族宛の一九二六年四月二八日付けオークランドからの手紙に、「ニューヨークから帰って四か月になります」とあるのが、米国共産党日本人部（再）結成の秘密を解く鍵である。

つまり、早稲田大学軍研事件の検挙を逃れて渡米した形跡のある健物貞一は、早ければ一九二四年中、遅くとも二五年の羅府日本人労働協会創立の頃にはカリフォルニアの共産党地域組織（第一三地区）に加わつ

ており、二五年にいったん西海岸で『階級戦』を創刊した後、ニューヨークへ使命を帯びて派遣された。

その使命は、鬼頭銀一供述をベースにしたと推定できる「昭和七年中に於ける外事警察概要 欧米関係」中に、示唆されている。

健物貞一（三三） 早稲田大学商学部卒業、大正一二年七月渡米、桑港に於て一二年間翻訳賃仕事に従事したる後、紐育に赴き同地共産学校ランドスクールを卒業、再び桑港に赴き共産党日本人部幹部として邦人間に主義の宣伝を為す。現に本邦練習艦隊の桑港に赴きたる際不穩文書を撒布したる等のことあり。自ら第二の片山を以て任じ外人側主義者の集会、演説会又は示威運動等には邦人側代表として参加し、在米各地の主義者等とも氣脈を通じつつありしが、昭和四年十二月十四日桑港邦人街に於て共産主義宣伝中逮捕せられ、労働長官より送還命令を受け正式裁判を求めたるも敗れて控訴し、其の棄却せらるるや更に大審院へ上告したる（『特高警察資料集成』第一六卷、一五八～一九頁）。

つまり健物貞一は、『階級戦』創刊後、一九二五年夏ないし秋から二六年初めにかけて、ニューヨークの共産党ランドスクールに入学し卒業した。そこでニューヨークの米国共産党本部及び石垣榮太郎・西村義雄らとも知り合い、「在米各地の主義者とも氣脈」が通じた。それで「第二の片山」となったことを、「昭和二（一九二七）年米国共産党入党日本人ビュローを確立」した鬼頭銀一が、三一年九月逮捕時に供述したことから、三二年には日本官憲も把握したのである。

同時にこれは、米国共産党の表舞台では「邦人代表」である健物貞一が、日本人部機関紙『階級戦』『労働新聞』編集長でありながら、「共産党日本人部幹部」に留まり、最高指導者ではなかった秘密をも示唆している。その秘密は、ニューヨークの共産党幹部養成学校にあり、健物貞

一次資料の分析で示される。

一九二九年二月の米国共産党日本人部報告書

『米国共産党レコード』で、米国共産党中央委員会言語局の指導下にある日本人部（「第二次日本人部」）の記録が現れるのは、ようやく一九二九年末である。カール・ヨネダがいう「一九二八年には、共産党内に JAPANESE NATIONAL BUREAU を設立、各都市の JAPANESE FRACTION と連絡を計る。BUREAU の書記に水野成夫」を裏付ける資料は、管見の限りでは見つかっていない。

一九二九年第一三七リール (LB-R.137, 515-1-1817) に、約五〇ページの、ある程度まとまった日本語・英語混在のファイルが出てくる。日本語活字資料では、「一九二九年八月 アメリカ共産党日本人部」とタイプ印刷された「水兵及び機関兵諸君に檄す」という「帝国主義戦争絶対反対、ロシヤを守れ、打倒日本帝国主义、日本共産党万歳、日本労働ソビエト樹立万歳」と訴えるビラがあり、遅くとも二九年夏には日本人部が実在したことを示している。しかし、組織文書の最初は、一九二九年一月一日付けで、米国共産党本部「中央委員会言語局に届けられ、モスクワのコミンテルン東洋部に転送されたと思われる報告書である。「一九二九年二月二八日」と「一九三〇年一月四日」の二つのスタンプが押されているのは、米国共産党内部での文書整理のための受領印か、モスクワ「コミンテルン東洋部の受領印か、判然としない。

「これは、米国共産党日本人部 (Japanese Buro) からモスクワの東洋部 (Oriental Cabinet) 宛の最初の公式の月例報告である」とあるように、コミンテルン東洋部と米国共産党日本人部が直結するルートがこの頃できたらしく、それは「ブラウダー同志を通じて貴方が送った一〇

一はそこで訓練を受けて、西海岸の労働運動・共産主義運動指導者となつた。しかし、米国共産党日本人部ビュローは、本部のあるニューヨークに所在した。おそらく鬼頭銀一も、健物貞一からやや遅れて、デンバー大学からニューヨークのランドスクールに派遣され、そこを卒業してニューヨークに留まり、米国共産党日本人部創設に加わって、初代なしい初期のビュロー書記になったことを、示唆していると思われる。その時期は、一九二八年の米国共産党第六回全国大会決定による可能性が高いが、二九年であつたかもしれない（次項）。

「岡繁樹聴取書」には、健物貞一が、アメリカ社会党員の文書を鬼頭銀一が『階級戦』に訳出・寄稿したのをイデオロギー的に問題にし、また岡繁樹自身の入党申請を「労働者階級出身でない」ことを理由に拒否する話が出てきた。また小林勇の供述には、「一九二七年アメリカに於ける共産主義運動の黎明期に於て西部沿岸桑港及バークレー地方在住の邦人左翼分子健物貞一、松井周次（両名共黨員）外数名は総て熱心なボルシェヴィキ傾向あり、……当時は恰も内地に於て所謂『山川イズム』と『福本イズム』の抗争時代にして其の展開する論戦に依り他の在米邦人左翼分子と共に大なる衝動を受け」と、日本の「福本イズム」が、アメリカにも波及していたことが述べられていた。

一九二五～八年期は、国際的にはコミンテルンの公認「レーニン主義」の定式化、各国共産党の「ボルシェヴィキ化」の時期だった。おそらく健物貞一は、こうした急進化路線に忠実だった。鬼頭銀一も、いったん健物に批判されたとはいえ、デンバー大学出身の若い英語のできる黨員で、党学校で教育を受けて拔擢され、新設されたばかりの日本人部書記になったと思われる。そのように考え得る根拠、及び党学校「ランドスクール」とはどのようなものであつたかは、以下米国共産党日本人部第

月の手紙」への回答とされる。

重要なのは、当時の在米日本人共産主義者の所属する地域が東部ニューヨーク（米国共産党第二区）と西海岸（第一三区）に大きく分かれており、返答が遅れたのも、モスクワからの手紙がニューヨークの米国共産党中央委員会ブラウダー書記長宛にきたため、西海岸の同志たちに転送して討論しなければならなかったと述べられていることである。

この東部・西部問題（更には西部のサンフランシスコとロスアンゼルス）の地域的距離と党員構成（労働者と知識人、一世・帰米・二世）、政治的志向の相違の問題は、以後も長く、米国共産党日本人部につきまとう。

報告者は「日本人部書記 D・Uchida」と署名され、ニューヨーク支部の党員のようなのである。ニューヨークについては党員名まで入って闘争記録も詳しいが、西海岸の報告は大雑把である。英語の長文タイプで、もともと読みにくい第一次資料のマイクロフィルムでは読み取り不能な部分も多い。以下は、冒頭部分の解読しうる限りでの直訳である。

一九二九年二月一日、ニューヨーク州ニューヨーク

同志へ これは、米国共産党中央委員会日本人部書記局からの最初の公式な月例報告である。

まず第一に、私は、中央委員会日本人部が最近再組織され、私が書記に任命されたことを報告しなければならない。当地における困難は、西海岸と東部の同志たちの間の、とりわけ日本人部（National Bureau）の問題についての相互理解の欠如である。しかしこれは解消されつつあり、近くよりスムーズな活動機関を持つことになるでしょう。

貴方がブラウダー同志を通じて私たちに送った一〇月初めのお手紙については、確かに受領し、ニューヨークの同志たちの中で、ついでブラ

ウダー同志とも、討論しました。手紙は直ちに、西海岸の同志たちに、彼らの討論のために転送されました。米国共産党第六回大会以後の日本人同志たちの中で発展について報告します。

（ニューヨーク）大会直後のニューヨーク日本人労働者協会のフラクシオン会議で、コミンテルン第六回大会で一般的に示された正しい政策を、いかに日本人同志たちの特殊な諸活動に適用するかが、問題になりました。ある同志は、われわれはあまりに多くを討論に費やし、実際の活動が足りない不活発がある、と指摘しました。彼の意見は、第三期においては、アメリカ合衆国における日本人同志たちは、太平洋における戦争の危険の増大を労働者に呼びかけるべきだ、というものでした。そのためには、実際の闘争において労働者を労働組合に組織するのが最善だ、というのです。具体的には、来るべき夏場にストライキを組織しようという提案です。これについては、討論はありませんでした。しかしながら、別の同志は、現にニューヨーク市内で続いている食品労働者のストライキを取り上げました。彼の意見では、ある日本人所有のカフェテリア（三七番街近くのニッコー・カフェテリア）がストライキ地帯に入っているのです、われわれの緊急の義務は、そこで働く日本人労働者をストライキに動員することだ、といえます。これらの討論の結果、夏場のストライキよりも、食品労働者ストライキの方こそ懸案だ、ということになりました。

すぐにニッコー・カフェテリア調査団が組織され、ストライキと組織化の可能性が検討されました。行動がとられた。日本人同志たちが、居住区で日本人労働者が、白人労働者と一緒にたたかうストライキ委員会にコミットしたのは、私の知る限り、初めてのことである。ストライキ委員会は、われわれにあらゆる援助を与えてくれたが、われわれの試み

は失敗に終わった。なぜならば、一、問題のカフェテリアは、われわれの見通しと違って、日本人労働者をすべてフィリピン人に置き換え、ストライキが起こったのでボスは労働者の賃金を一〇セントほど上げてしまった。二、ストライキ地帯には、ほかに日系カフェテリアがなかった。三、日本人労働者は、一人も食品労働組合に加盟していなかった。しかしながらわれわれは、この失敗の経験から、日本人労働者を労働組合に組織化することが絶対に必要であると悟った。……

米国全土にまたがる日本人共産主義者の横断組織

このような調子で、ニューヨーク、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、シアトルの状況が報告される。以下は、判読可能な部分を筆者が要約した大意であるが、一九二八年一〇月の米国共産党第六回大会以降、二九年二月には「再組織」された日本人部が存在していたことが確認しうる。ニューヨークにおける日系社会の閉鎖性を危惧してか、「米国における日本人労働者のアメリカ化」が積極的に語られているのも興味深い。

サンフランシスコについては、党員指導者健物貞一が報告し、日本人労働協会（JWA）の刊行する『在米労働新聞』が活動の中心で、党としての「フラクション活動」がなかったことが自己批判的に語られた。ロスアンゼルスにおいては、自然発生的・非体系的であるが、最も活発な日本人同志たちの活動が見られる。山口栄之助、堀内鉄次、ハマ（カール・ヨネダ）ら党員が、労働組合やストライキ組織化の最前線で逮捕されたりしている。シアトルには、ニューヨークから同志エザキ（長谷川）が日本人労働協会組織化のために向かったが、折からシアトルに現れた社会民衆党安部磯雄の社会民主主義を暴露する演説をして捕まり、二カ

月半入獄した。

次にJWAの日本人労働協会の全米規模での活動について、この二九年二月頃から、東部ニューヨークの労働倶楽部と西海岸の労働協会との交流の機運が生まれた。同時に米国共産党日本人部の全米全体会議を持ちたいという意見が出たが、党規約上言語別フラクションの全体会議が可能かどうかかわらず、消極的なニューヨーク、サンフランシスコと、積極的なロスアンゼルスとで意見が分かれた。旧日本人部（old national bureau）の書記は、この二つの会議の準備の問題で責任を問われ、結局、日本人労働協会総会が持たれた。党本部のあるニューヨークのビューローが、米国共産党中央委員会言語局と会合を持ったが、米国共産党第六回大会の代議員であった健物同志を含めて、西海岸の同志は、だれも党大会での規約改正を自覚していなかった。柳井同志のように、言語別大衆組織は不要で党のフラクション会議のみにせよという意見さえあったが、最終的には、日本人労働協会の全国会議が開かれた。

ニューヨークの同志たちは、この問題を持ち帰り、中央委員会言語局とビューローが相談しつつ、一、ニューヨーク日本人倶楽部は党ではなく、言語別大衆組織であることを確認し、二、全米食品労働組合のホテル・レストラン・カフェテリア部門に二〇人の日本人グループをつくった。三、党員は、千葉、石垣、北村、二宮、西野、岡本、瀧尾、トシロ、内田、幸地、村田、トクチ、ホリの一三名である。

サンフランシスコ、シアトル、ロスアンゼルスの方員については、次の手紙で報告する。

日本人同志たちから推薦され、中央委員会言語局から任命された日本人部ビューローは、

内田（書記）、石垣、西野、二宮、瀧尾

次に、一九二九年九月一日付け「コミンテルン東洋部からの？」手紙への回答であるが、われわれの弱点については、よく理解している。ハワイへ組織者を送ることから、出発しなければならぬ。一〇月二二〜二三日のロスアンゼルスにおける日本人労働協会全国大会で環境は整ったので、中央委員会言語局とビューローが交渉する。堀内同志と濱同志が、指名されたらその任務「ハワイ・オルグ」についてもいいと言っている。サンフランシスコ労働新聞社発行の『労働新聞』は、党によって厳格にコントロールされた日本語新聞で、別の党独自の印刷物の必要性は認めるが、資金上の問題等で、実際上困難である。反帝活動とILD（国際労働者救済会）の強化、TUL（労働組合統一同盟）とPPUS（汎太平洋労働組合）に注目し、コミンテルン東洋部を通じて、日本との若干の連絡がなされている。西部の報告がきたら、すぐにお送りします。

このような英文一三ページにわたる詳細な党活動の報告が、「日本人部書記 D・内田」名で、モスクワに送られた。「旧日本人部の書記」とは、おそらく鬼頭銀一である。

二九年一月日本人労働協会フラクション会議

次いで、一九二九年一〇月二二日に持たれた「第一回日本人労働協会全国大会の共産党フラクション会議」の報告が、議事録風に綴られている。一、党の新路線に従っての言語別フラクションの再組織について、二、日本、特に左翼労働運動の現在の状況について、の二議題が討論された。出席者は「堀内、健物、濱、柳井、石垣、奈倉」で、「福永は代表団に入っていないかった」とある。以下、同じく要約して翻訳・紹介する。

第一議題の報告者は、ニューヨークの石垣だった。ロスアンゼルス

柳井は、ビューローの存在そのものを知らなかったと抗議したが、石垣は、中央委員会言語局の決定で、東部と西部の定期的コミュニケーションがなかったためだと答弁し、サンフランシスコの健物が、討論打ち切りを提案して同意された。

日本人部ビューローのメンバーについては、書記に内田、組織部を石垣、アジア部を西野とした。そこで党内全国プレティンを発行し、機関紙委員会、日本人部ビューローとは別に、ロスアンゼルス

の柳井・福永、サンフランシスコの健物・奈倉、ニューヨークの瀧尾・二宮、シアトルの江崎で構成する。公式の手紙通信には、必ずカーボン複写紙を使うこと、ニューヨーク以外のローカル・ビューローのメンバーを、可及的速やかに決めること、日本人部ビューローは、中央委員会言語局の決定をローカル・ビューローに伝え、ローカル・ビューローの報告を中央委員会言語局に伝える機関であり、それ以上でも以下でもない、と決定した。

第二議題の報告者は、堀内で、日本の政治経済の封建的性格、金融資本と封建遺制（ミカド）の関係、日本共産党とその綱領、が骨子であった。

さらに、この二九年二月一日付けD・内田のコミンテルン東洋部宛報告書には、大衆組織である日本人労働協会全国会議の模様とその大会決議も、資料として詳しく英訳されている。そこで決定された、ニューヨーク、ロスアンゼルス、サンフランシスコの三地域の労働協会（ニューヨークは「労働倶楽部」）を統合した日本人労働協会の機関紙を「党の新聞（The Party Paper）」にして、名称を『労働新聞』、サンフランシスコで発行し、編集は健物、マネージャーは奈倉、一部五セントで一〇〇〇部印刷、ロスアンゼルスに四〇〇〇部、サンフランシスコ三〇〇〇部、ニューヨーク二〇〇〇部、シアトル一〇〇〇部（江崎同志）という配布体制

がつくられた、と報告された。

日本人労働協会の綱領提案 (proposed program) は、以下の八項目にまとめられている。

- ① アメリカにおける日本人労働者、とりわけ二世労働者のアメリカ化、及び日常的階級闘争、
- ② アメリカにおける日本人未組織労働者をT.U.U.L傘下の産業別労働組合に組織すること、
- ③ アメリカにおける日本人労働者への反資本主義教育、
- ④ 帝国主義戦争の危険に反対する闘争、
- ⑤ 労働者の心中に害毒を及ぼす、すべてのブルジョア的・排外主義的・ファシスト的・平和主義的諸組織に対する闘争、
- ⑥ 白人・黒人労働者、及び他のオリエンタル労働者、とりわけ中国人・朝鮮人・フィリピン人労働者との連帯
- ⑦ ハワイ、カナダ、メキシコ等の日本人労働者との連絡
- ⑧ 日本、アメリカ合衆国内外での、すべての階級戦争犠牲者の解放とその家族の救援

三〇年二月日本入部書記の交代―「D・内田」から「K・二宮」へ

以上に要約的に紹介した一九二九年二月米国共産党日本入部報告は、この報告をつくった書記「D・内田」の、すぐれた党組織能力と英語力を示している。そして、この報告は、翌三〇年二月まで、精力的に続けられる。「米国共産党レコード」リール第一六二 (J.B.R.162/I, 515-1-2162) には、「D・内田」名等の米国共産党日本入部報告が、いくつか含まれている。

一九三〇年一月二二日付けの英文報告は、日本入部『労働新聞』一月

一〇日号の内容紹介で、たんに目次を訳出・紹介するに留まらず、書記Ⅱ D・内田の組織指導者としてのコメントが付されている。

本号には、容易に気が付くように、八二五名の日本人共産主義者の裁判、戦争の危険、イリノイの鉱山ストライキ、ロンドン会議、ソ連の五カ年計画のような最新のニュースが入っていない。しかしながらこうした欠陥は、近くだだされるであろう。日本入部書記は、個人的に、ソ連における社会主義建設、八二五名の日本人共産主義者の裁判、ロンドン会議についての短い記事を、すでに送った。われわれは六〇〇人の定期購読者確保に努力している。

二月一日付けのD・内田によるコミンテルン東洋部宛報告は、健物貞一・堀内鉄次の検挙とI.L.D (国際労働者救援会) の釈放運動にふれ、一月七日 (出席者 内田、二宮、瀧尾、西野、石垣は欠席)、一月二四日 (出席者 米国共産党言語局書記Alpi) 議長、内田、西野、二宮、石垣、瀧尾) のビューロー会議議事録を添えている。以下はその要旨。

一月七日の会議では、書記内田から、中央委員会言語局からハワイにオルグを送ること、サンフランシスコの健物貞一逮捕、ロスアンゼルス、バンクーバーの状況についての報告があった。

討議では、ニューヨークで、宮城とK・ホリをレーニン記念日までに入党させること、ついで幸地と北村を入党させること、日本の政治情勢については、日本入部アジアプロ部で声明を出すこと、反帝同盟責任者を西野・瀧尾が断ったので、幸地を候補者として考えること、中国人週刊紙への援助、などが決められた。

一月二四日の会議では、中央委員会言語局のアルピ (Alpi) 同志から、ロスアンゼルスについての詳しい報告があり、カリフォルニア地区党組織者サイモン同志からの報告によると、ロスアンゼルス日本人同志た

ちは、日本人部ビュロー・日本人労働協会問題について納得しておらず、中央委員会の裁定を求めている。サイモン同志とロスアンゼルス同志たちは、ビュローを西海岸におくべきだと主張している（アルピ同志は、ビュローのニューヨーク設置は中央委員会決定であり、十分な理由がない限り変更できない、と説明した）。

言語局による、『労働新聞』を労働新聞社名の日本人労働協会機関紙として発行し、日本に持ち込むことを容易にするという決定についても、ロスアンゼルス日本人同志たちは、『労働新聞』は米国在住日本人労働者のための新聞で、日本にいる日本人のためのものではない、労働新聞社や日本人労働協会名で発行しても、日本の警察は米国共産党の日本語機関紙として扱うだろう、という理由で反対した。日本人部ビュローとしては、『労働新聞』は在米日本人労働者のための新聞であるとともに、ハワイや日本の労働者のための新聞である、われわれの運動の中で最大限合法性を利用しなければならないという理由から、ロスアンゼルスの同志たちの意見を誤りとした。

この日、堀内同志がいくつかの未知の連絡ルートで日本共産党アメリカ代表に任命された、というカリフォルニアのサイモン同志からの情報、アルピ同志から紹介された。アルピ同志は、そのようなことはいかなる共産党間でもありえない、日本共産党との公式の連絡は中央委員会言語局日本人部ビュローを介すべきだ、と述べた（この点は、サイモン同志は了解しているが、堀内同志は獄中で連絡できない）。

反帝同盟については、北村同志が引き受けた。彼の名が米国共産党中央委員会に報告された。ニューヨークの労働者芸術センターと日本人労働倶楽部の関係について長時間討論されたが、アルピ同志は、どちらも小さな組織なのだから、単一の強力な日本人労働者の組織を作るべきだ

と述べ、ビュローもフラクシオン会議で合同の方向を指導することにした。

ナショナル・トレーニング・センター（National Training School）には、ロスアンゼルスからサンフランシスコから学生が送られてくるが、ビュローは、ニューヨークからも一人を送り、可能なら卒業後に西海岸に派遣することを決定した。二宮同志と内田同志の名が挙げられた。次のフラクシオン会議で推薦者を決める。ニューヨークのローカル・ビュローは作らず、日本人部の西野、石垣同志がローカルな問題を扱うこととした。ILDは、幸地同志が内田同志を補佐する。党员拡大についての狭いナショナルリズム、セクト主義を改め、積極的に党员を拡大する。サンフランシスコのローカル・ビュローは、一〇人の新しい党员獲得をめざしており、ニューヨークでも、レーニン記念日までに五人を増やして一八人にすることにした。

ナショナル・トレーニング・センターには、最終的には現日本人部書記の内田同志が選ばれた。

以下、『労働新聞』の半月刊化、党英文機関紙『デイリー・ワーカー』への堀内・健物逮捕など日本人弾圧問題での寄稿、ニューヨーク地域の党活動日誌、サンフランシスコでは健物同志が逮捕されて大きなショックを受けたが、健物に代わって井上同志がローカル・ビュロー書記に任命されたこと、モスクワの同志田中（山本懸蔵）から手紙を受け取ったこと、等々が詳しく報告された。

さらに三月二〇日付けでも、詳しい報告がモスクワのコミンテルン東洋部に送られた。ところが、その報告の前半と後半とで英語の文体が大きく変わる。以下はその要約である。

恐慌下のアメリカにおける階級闘争は激化している。サンフランシス

コのデモで、六人の同志が検挙されたが、まもなく釈放された、堀内同志はまだ獄中だが、健物同志は保釈された、日本人労働協会第二回大会を準備中である。

二月一五日の会議（出席 瀧尾、石垣、内田、二宮、西野は欠席）で、中央委員会言語局が、現書記内田同志がナショナル・トレニーニング・センターに入るので、二宮同志を日本人部書記に任命した旨報告された。内田が責任者であった国際労働者救援会（ILD）の仕事は、瀧尾同志が全国委員会に推薦された。

ここまでは、普通の英文報告書のかたちになっている。ところが、二月二五日の会議（出席 西野、石垣、内田、二宮、欠席は瀧尾）の議事録は、英語でレジメ風に議事項目が列挙られるのみで、文章が極端に短い。明らかに、書記が内田から二宮に交代したためで、二宮の英語力不足を反映している。そこから重要決定の内容を読むことは困難であるが、「新入党员的イデオロギー的・政治的水準は大変低い、ビューローは新入党员的教育をローカル・ビューローに命じる」「日本人労働協会の行動綱領と規約の草案」「田中同志の手紙」「ニューヨークのローカル・ビューローの報告を日本人部は受け取っていない」「ロスアンゼルスでタガ同志が書記になった」「サンフランシスコについて井上同志は大規模な失業反対デモについて報告してきた」「シアトルの江崎同志からは何の報告もない」という具合である。

この変調の秘密は、末尾で明らかになる。報告前半の「D・内田」の文体とは異にして、「日本人部書記K・二宮」の署名があり、「この報告書には多くのエラーがあると思う。なぜなら英語上の困難があるからである。次の報告書はもっとよくしたい」という弁明が添えられていた。そして、以後三〇年末まで、「次の報告書」がモスクワに送られた形跡

はない。

つまり、一九二九年十一月の第一回日本人労働協会全国会議のさいのフラクシオン会議で再建され、書記D・内田のすぐれた政治的・組織的能力と英語力により、活発にモスクワのコミンテルン東洋部、米国共産党言語局と連絡をとり、ニューヨークと西部各都市日本人共産党員の連携をつくった新生米国共産党日本人部の活動は、三〇年二月に、内田が「ナショナル・トレニーニング・センター」に派遣されて、書記が英語力の乏しいK・二宮に代わった途端に、モスクワにも、おそらくニューヨークの米国共産党中央委員会言語局にも、英語の定期的報告を送れなくなり、どうやら活動停止状態に陥った模様である。

日本人部書記「D・内田」とはジョー小出の党名

私は当初、この『米国共産党レコード』中で米国共産党日本人部再建の立て役者であることが証明しうる「D・内田」こそ、「鬼頭銀一」のパーティ・ネーム（党名）ではないかと考えた。だが、日本の特高外事警察への鬼頭銀一自身の供述「昭和二年末米国共産党に入党日本人ビューローを確立し其の拡大強化に努め居たるが、昭和四年六月コムインターの指令に基づき東支鉄道紛争に絡まる日本側の策動に対し或種の秘密任務（任地到着同志と連絡するまでは不明）を帯び、上海經由京城に向ひたるも」という経歴と、微妙に時期がずれる。

鬼頭銀一については、二〇一〇年にモスクワの旧コミンテルン史料館から、二九年一月三日付けの米国共産党中央委員会宛「合衆国出国許可申請書」が見つかり、二七年十一月入党、二九年一月のアメリカ出国が確認された。鬼頭銀一は、内田の言う「再組織」前の書記、「旧日本人部（old national bureau）の書記」で、二九年秋にはコミンテルンの指

令でゾルゲ諜報団の一員となり、上海で尾崎秀実をリクルートする（加藤『ゾルゲ事件』）。

当時の共産党員の出入国は、自由ではなかった。公的パスポート・ビザ取得の他に、何らかの任務を帯びていても、ニューヨークの党本部、言語局の認可、出国先共産党に対する党員転籍証明・委任状（マンドー）の所持が必要であった。こうした連絡がコミンテルンのOMSを通じて行われた。

米国共産党日本人部のコミンテルン東洋部宛一九三〇年報告中で、内田が選ばれたという「ナショナル・トレーニング・センター」が、他の資料には出てこない。米国共産党の幹部養成学校かと推定して資料にあたっていくと、「D・ウチダ」の出てくる、もう一つの資料に突き当たった。邦訳『アメリカ共産党とコミンテルン』所収の文書三五として入っている（一九〇〇一頁）、米国共産党派遣モスクワ・レーニン学校派遣学生名簿の八番目に、「D・内田」が入っている。結論的に言えば、「D・内田」とは、鬼頭銀一でも矢野努でもなく、第二次世界大戦後にカール・ヨネダやジェームズ小田が「裏切り者」「スパイ」と非難してやまなかった「鵜飼宣道」ジョー小出」のことであった。

文書三五 アメリカ合衆国共産党書記局 一九三〇年九月五日
TRTSKIDN1515-1-1869

本状は以下のことを証明する。アメリカ合衆国共産党の重要な地位を占める活動家である以下に挙げた同志たちは、本状によつて、ソ連共産党への移籍が認められる。彼らは、レーニン学校の学生として、無制限にソ連邦に留まることができる。

1. Walter Burke, 2. Arnold Armio, 3. Phil Bart, 4. Herbert Irwin, 5. Edwin Wickstrom, 6. Rebecca Grecht, 7. Chas. Kapanaris, 8.

D. Uchida, 9. G. Hewitt, 10. Egan Anderson, 11. Kay Heikila, 12. Aphonso Gonzales, 13. H. R. Hutchins, 14. Gilbert Lewis, 15. Frank Mozer, 16. Esther Carroll, 17. Ben Gold

共産主義者の挨拶を添えて 書記局宛

この名簿は、一九三〇年九月に、米国共産党中央委員会からレーニン学校「ソ連共産党付属の上級党幹部養成学校（東方勤労者共産主義大学）」クートベよりランクが上の各国共産党中央幹部教育施設に送られた一七人のリストで、実に多くのことを物語っている。ジョー小出の自伝『ある在米日本人の記録』（有信堂）の信頼性を証明するものである。

ジョー小出は、『ある在米日本人の記録』で、自分のレーニン学校派遣を、一九三〇年夏、アメリカ共産党書記長ブラウダーにより抜擢されたという。ソ連入りは三〇年九月で、上記名簿にびつたり一致する。途中同行者は、目立たぬよう二人一組でベルリン経由ソ連に入るが、一緒になったのは「フランク」で、後のキューバ共産党書記長ブラス・ロカの党名であった（上巻、二五頁）。この名簿の一番番に Frank Mozer がいる。ジョー小出のレーニン・スクール同期生で、『ある在米日本人の記録』に名前が出てくるのは、「米国共産党女党员三羽鳥の一人、リベカ・グレヒト」であった（三一頁）。名簿の「6 Rebecca Grecht」そのものである。

第二次世界大戦後、ジョー小出が、カール・ヨネダ、ジェームズ小田らから「裏切り者」「スパイ」と断罪された大きな理由の一つは、一九五八年一〇月二日のサンフランシスコ移民局訊問会で、元共産党員ゆえの送還命令を受けていたフィンランド人ヘケラを「私とヘケラは一九三〇年にモスクワのレーニン講習所で同席だった」と証言したことであった（『在米日本人労働者の歴史』一二〇頁）。「昔の仲間を権力に売る」

という行為は、確かに共産党にとつては「裏切り」であるかもしれない。野坂参三の除名理由もそうであった。しかし、歴史の真偽は別である。名簿の一番には Kay Heikkila とある。

要するに、この一九九五年に明るみに出た名簿は、ジョー小出の自伝とびつたり一致する。これは、ジョー小出にとつては、レーニン学校一九三〇年入学同期生名簿なのである。ここから、以後のジョー小出の、数奇な人生が始まる。

ナショナル・トレニング・センターとは秘密党幹部養成学校

だが、問題は残る。D・内田Ⅱジョー小出が米国共産党日本人部ビューロー書記を離れK・二宮と交代したのは、一九三〇年二月のことであった。二月から九月のソ連渡航まで、どこに行っていたのだろうか。「ナショナル・トレニング・センター」とは、ソ連のレーニン学校と同義で、ロシア語の訓練でも受けていたのであろうか。しかしそうすると、日本人部ビューロー会議一月二四日議事録の「ナショナル・トレニング・センター (National Training School) には、ロスアンゼルスからサンフランシスコから学生が送られてくる」からして、西海岸在住日本人左翼からも、多数のクートベやレーニン学校卒業指導者が輩出されていなければならない。当時のコミンテルンと米国共産党の党幹部リクルート・システムが、ポイントである。

この点で参考になるのは、朝鮮戦争勃発直後に邦訳されたために、マッカードシズムのいわゆる反共本として見過ごされがちだった、元米国共産党員で同党機関紙『デイリー・ワーカー』編集員であったルイス・フランシス・ブデント『顔のない男達—アメリカにおける共産主義者の陰謀』(ジープ社、一九五〇年)中の、次の証言である。ずばり、米国共

産党「ナショナル・トレニング・センター」が出てくる。

党は二種の学校をもっている。一つは「公開」の学校で、昔は労働者学校といわれた。これには一般コミュニストの外にシンパも入学できる。第二次大戦中には、学校を大きくするため、この種の学校は色々の愛国の名前をつけた。そこでシカゴ労働者学校はアブラハム・リンカーン学校となり、ニューヨーク労働者学校はジェファースン社会科学学校となった。……これらの学校は色んなことを教えるが、厳密にマルクス・レーニン主義に基いている。党から厳重に統制されているから、党政治局がブロードに対して態度を変えた時、ジェファースン学校もすぐそれに従った。どんなに優秀なものであっても党の線に反対するものは退校させられる。これらの学校には数千人のものが学んでいる。

もう一つの種類の学校は秘密学校で、その筆頭は全国(ナショナル)訓練学校である。これは小数の選抜した赤色幹部を養成し「革命理論と革命戦術」を訓練するのを目的としている。全国訓練学校は普通はキャンプ・ペーコンという所で開かれるが、ここはニューヨークのキングストンの上の夏のキャンプ村で、ふつうはエトゲディアゲット・キャンプといわれてきた所である。通例の夏のシーズンが終ると、全国から選抜された党員がここに集合して、マルクス・レーニン主義についての六〇一〇週間の訓練をうけた。著名な講師の中にはヤコブ(ボブ)ミンデル—ゴロスの長年の相棒で、主だったソ連手先で深刻なスパイの一人—もいた。彼の講義は党の力と暴力主義を教えることであるが、また生徒をよくみて、秘密活動に向くものを発見することでもあった。この男は物静かな、陰気な男で、鼻ヒゲをはやし、若くはないが、ソ連スパイ網のスパイ養成の幹部だった。……党のそれぞれの支部(ディストリクト「地区」)や部(セクション)にも、小さな秘密学校があった。……

Page 1
7/24/79

在米日本人共産党に就いての歴史
(A BRIEF HISTORY OF U.S. JAPANESE COMMUNISTS)

(この文の一部又は全部が使用の際には必ず "FROM KARL YONEBU'S FILES
と記載 すること")

① 1925年には共産党史に JAPANESE NATIONAL BUREAU を設立
各都市の JAPANESE FRACTION と連絡をせる。BUREAU 内の
SECRETARIAT には SECRETARY に水野成夫、専断に銀物と称し
後にカール漢、藤井用西なども加。
当時の日本人党は主として在米カール漢一人、一主婦と称し
合計百名。1930年頃には二百名。二世の党員はこのうち
は一人か二人が在。

The Bureau regrets very much that our political outlook is still
narrow and could not correctly estimate the present crisis and act
accordingly. However we are striving.

With Communist Greetings,
D. Vick-ko
Secretary, Japanese Bureau

In the past we made some mistake and shortcomings, those we
will collect by the future work.

SECRETARY JAPANESE GROUPE
K. Yonebu

第一に、米国共産党日本人部そのものは、D・内田ジョー小出が書記に就任する二九年秋以前から、遅くとも二九年二月には、ニューヨークに存在していた。しかし本格的な活動が始まったのは、二九年夏のコミンテルン東洋部からの手紙を受けて、大衆組織である在米日本人労働協会の二九年一〇月第一回全国大会開催にあわせ、ニューヨーク、サンフランシスコ、ロスアンゼルス等の指導的党員が一同に会したフラクシオン会議が開かれ、D・内田ジョー小出が書記になってからだった。この三都市の情報と意見の交流が目的だったが、東部ニューヨークにある日本人部ビュローと西部のローカル・ビュロー、特にロスアンゼルスとは意見の対立が目立った。

第二に、カール・ヨネダ「略史」の「一九二八年には、共産党内に JAPANESE NATIONAL BUREAU を設立、各都市の JAPANESE FRACTION と連絡を計る。BUREAU の書記に水野成夫、局員に剣「健」物その他、後にカール濱「ヨネダ」、藤井周而らも参加。当時の日本人党員は主に一世で帰米が数名、一世婦人も数名、合計百余名。一九三〇年頃は二百余名。二世の党員はこの当時は一人か二人か位」が事実をある程度反映しているとすれば、ここでの「水野成夫」には、「D・内田」ジョー小出とその前任者X、及び後任の「K・二宮」が、更にその後の「武田」矢野努と共に、含まれることになる。また、日本での三一年鬼頭銀一供述が正しいとすれば、ジョー小出の前任者Xは、ニューヨーク地区所属の日本人党員で、二九年には上海ゾルゲ団に派遣される鬼頭銀一の可能性がきわめて高い。

第三に、米国共産党日本人部は、米国共産党中央委員会言語局に管轄される言語別グループの一つであり、全米一九に分けられた通常活動の組織体系Ⅱ地区活動とは別個のものだった。大衆組織である日本人労働

協会とも異なり、全国全党員集会は許されなかった。「日本人フラクシオン」とも呼ばれるように、あくまで米国共産党中央委員会言語局から選抜・承認された党員のみが出席できた。そのリクルートの場が、労働学校（ランド・スクール）やナショナル・トレーニング・センターであった。

第四、機関紙である日本語新聞『労働新聞』の編集体制は、大衆組織「日本人労働協会」の機関紙で労働新聞社発行とカモフラージュされたため、ビュローとは別個に構成された。しかし、当時のコミンテルンⅡ世界共産党の通例にならって、ビュローの指導が及ぶように、その任務に服する党員構成はビュローで決められ、掲載内容も常にビュローにより点検された。

第五に、日本人部の指導部Ⅱビュローの最高責任者Ⅱ書記は、米国共産党中央委員会言語局から直接任命された。ビュローの地域代表、ローカル・ビュロー構成員が地域から選ばれ推薦されることはあっても、ニューヨークの言語局の決定と指導に服した。

第六に、大衆組織である日本人労働協会、反帝同盟、国際労働者救援会、果ては労働組合指導部や芸術文化組織のあり方も、ビュローにより決定された。

第七に、日本人部は米国共産党中央委員会言語局とのみならず、モスクワのコミンテルン執行委員会東洋部とも直接につながっていた。書記の報告書は、ブラウダー書記長や言語局を介することはあっても、宛先はコミンテルン東洋部だった。

ただし、こうした日本人部の活発な系統だった活動は、どうも「D・内田」ジョー小出の書記時代のみのである。

一 ジョー小出訪ソ後の米国共産党日本人部の迷走

—スパイ摘発と疑心暗鬼

三〇年春の日本人部書記「二宮」は「野坂機関」の長谷川泰二？

一九三〇年のコミンテルン東洋部宛報告書と同じリール (LB-R.162/1, 515-1-2162) には、この三月二日付け報告書の異文（二宮は英語で幾度も書き直したらしく、同じ問題についての数種類の報告書）と、「アメリカにおける日本人部の活動の分析と今後の活動概要 一九三〇年十二月一日 Analysis of Work of Japanese Language Buro and Fraction in America and Outline of Future Work, Dec.1, 1930」二七ページ、及び同時に書かれたらしい「日本人部とニューヨーク・フラクシヨンの活動概要及び今後の任務概要 Outlines of Work of Japanese Language Buro and Fractions in N.Y.C. and Outline of Future Tasks」二〇ページという、執筆者名のない英文手書き文書がある。

三〇年三月の報告書を書いた書記「二宮」の名前は、内田「ジョー」小出の仕事を引き継いで、一カ月ほどで消える。以後は、「米国共産党レコード」に現れない。

いや正確に言えば、日本の特高警察文書にのみ現れる。ただし、三六年「岡繁樹聴取書」でも「小林勇供述」でも四二年「宮城与徳手記」でもない。出てくるのは、鬼頭銀一の供述にもとづくと思われる、三二年末内務省警保局「昭和六年中に於ける外事警察概要 欧米関係」である。そこには短く、「本籍愛媛県以下不詳 二宮某（三二、三位）紐育に於て家内労働に従事す」とある（『特高警察関係資料集成』第一六巻、一

五九頁）。このことは、西海岸で活動した小林勇、岡繁樹、宮城与徳らは知らなかったが、二九年に上海に向かった鬼頭銀一は、ニューヨークで「二宮某」を知っていたことを意味する。しかし、鬼頭供述にはデンバー大学同期生「内田」＝ジョー小出はなく、小出の自伝に鬼頭は出てこないから、鬼頭＝内田（ジョー小出）＝二宮とスムーズにはつながらない。

ただし、「小林勇供述」には、「一九二八年春頃、東部の邦人党员石垣榮太郎、西村義雄、土井某等が『日本人は英語会話不十分にして諸々の党活動に白人と伍して行くことは不便である』との理由により『党日本人部書記局』を結成すべしと提議し、西部の邦人党员小林勇、健物貞一、奈倉兄弟等が之に協力した結果、正式に党本部に附設せられ、東部の邦人党员が之を指導した」とあった。

この「土井某」は「三〇年頃レーニン大学へ」とあるから、小林勇が「内田」＝ジョー小出のことを「土井」と記憶していたこともありうるが、別の可能性もある。それは、野坂参三が『風雪のあゆみ』第八巻で回想している、アメリカで野坂参三が「野坂機関」の一員とした（ジョー小出以外の）もう一人の日本人、長谷川泰二であった可能性である。長谷川は、二九年ニューヨークで入党、レーニン・スクール本科に送られたという。野坂の回想では、三五年秋、コミンテルン第七回大会直後の場面に現れる。

それ「アメリカへの再入国」に先立って、手を打っておかなければならないことがあった。それは、ソ連に来ていた一人の日本人労働者を、ロサンゼルスでの「国際通信」の印刷業務の協力者として先行させておくことだった。その労働者について、少し詳しく述べることしよう。

彼の名は長谷川泰二といった。一八九九年に愛知県で生まれた彼は、

高等小学校を卒業した後、一九二一年に南米航路に就航していた東洋汽船の船に乗り組み、その帰路にアメリカのポートランドかどこかで脱船して、やがてニューヨークに出、そこで一九二九年にアメリカ共産党からモスクワのレーニン・スクールに派遣され、本科、すなわち、二年コースで学んだ。卒業後シベリアで二年ほど労働者生活をしたのち、アメリカ共産党のブラウダーからモスクワに呼び返された。それは一九三五年のことで、ブラウダーがわたしの要請に答えて彼をわたしに推薦するためだったのである。こうして、彼は、秋にモスクワを發つて、アメリカに向かった。その行く先は国際通信社のジョー「小出」のもとであった（野坂『風雪のあゆみ』第八卷、一〇九―一〇頁）

一九三五年秋以前にレーニン・スクール二年、シベリアで二年とする、長谷川泰二の米国からソ連レーニン・スクールへの旅は、一九三一年秋になる。この点からすると、「小林勇供述」の「土井某」は、ニューヨークで活動を開始した長谷川泰二であった可能性がでてくる。これは、三二年末官憲情報（鬼頭銀一供述）とも近似する。「二宮某」は三二年当時「三二、三歳」とあるから、一八九九年生まれなら年齢はぴったりである。「愛媛県出身」と「愛知県出身」は、官憲文書ではよくある混同だ。三〇年三月以降の米国共産党日本人部ビューロー書記「K・二宮」が、小林勇のいう「土井某」であると共に、野坂のいう「長谷川泰二」であった可能性が高い。長谷川はソ連に四年は滞在し、三五年ブラウダーの指令でアメリカに戻り、三六年春に野坂が再びアメリカに潜入すると、日本に『国際通信』などを持ち込む船員工作・宣伝物輸送を担当した。

米国共産党日本人部書記は、日本人党員の意向に関わりなくニューヨークの党本部で任命されたから、「二宮」が、三〇年二月から数カ月書

記の仕事を勤めた後、米国共産党の党幹部養成学校「ナショナル・トレニンング・センター」に派遣され、そこで、英語力を養い、党派性や決定の忠実な実行、口の堅さなど秘密活動への適性を認められて、ジョー・小出よりちょうど一年遅れて、三一年秋モスクワのレーニン・スクールへ派遣され、同じエリート・コースに乗った可能性は高い。

書記長ブラウダー好みの米国共産党日本人エリート党员とは、労働組合オルグやストライキにたけている労働者党员よりも、コミンテルンと共産党への忠誠、知的理論的能力、若さと英語力、秘密工作活動への適性であったことは、大いにありうることである。

一九三〇年末の日本人部再建指針

一九三〇年一二月の二つの分厚い文書は、筆跡からして、二人の英語力のある人物によつてほぼ同時に書かれた、ある種の日本人部用活動マニュアルになっている。これは、どこで、誰によつて、書かれたものであろうか。米国共産党日本人部の報告断絶にしばれをきらして、アメリカ共産党言語局で書かれ送られた可能性があるが、モスクワのコミンテルン東洋部のなかで作った可能性も否定できない。

前者「アメリカにおける日本人部の活動の分析と今後の活動概要 一九三〇年一二月一日」は、上述したD・内田Ⅱジョー小出書記時代の米国共産党日本人部再建と、K・二宮書記に交代して以降の活動の停滞を証明している。読みにくい英語であるが、冒頭「I 序論」を紹介しよう。

一九二九年一月にサンフランシスコで開かれた日本人労働協会全国大会以前は、日本語フラクションは、あまりにマルクス・レーニン主義の自己研究に時間を費やす、セクツ的傾向があつた。背教者ラヴストー

ンの除名と党のコミンテルンの路線上での再組織後、言語局の活動と党全体の活動との関係が明確にされ、中央委員会日本人部とニューヨーク地区ビュローの関係がうち立てられた。米国共産党第七回大会は、言語別ビュローの活動をより明確に定式化し、具体的な組織方針を与えた。

一九二九年一月以降、日本人党员は、彼らの所属するさまざまな党細胞の活動に積極的に加わり、この参加が実践的訓練とイデオロギー的發展を引き起こした。しかしながら日本人プロレタリアートのあいだで特殊に活動をするという任務は明確でなく、ネグレクトされた。

このプログラムは、革命運動と客観情勢の全体的分析の後に示される。

以下、次のように展開される膨大な調査研究プロジェクトである。行論に関わる限りで、重要と思われる部分を訳出しておく。①―⑧と⑨以下では筆跡が異なる。

①日本人移民の危機、②日本人移民の社会的構成とイデオロギー（A 社会的構成 プロレタリアート、プチ・ブルジョアジー、ブルジョアジー、B 日本人移民の全般的イデオロギー ナシヨナリスティックでセクト的、プロレタリアートの大部分がプチブル・イデオロギーを持つ、書き込み「東洋部はビュローに対してどの位の日本人労働者がそれぞれのカテゴリーにあり、賃金・生活条件がどうかの情報を与えなければならぬ」、③日本人部の活動の批判（A 達成されたもの、B われわれの活動の欠陥「中央委員会言語部との関係など日本人部の組織的構造の無理解、党決議・機構・戦術の理解不足、……」、C 欠陥の原因「ビュローと中央委員会言語部との連絡が極めて貧弱、党员全般が英語がほとんどできない、自己批判と規律に関心がない、労働時間が長く体系的党活動のための時間がとれない」、④任務（A「日本人部は中央委員

会の政治方針を実行しなければならず、重要な政治的問題で勝手に行動してはならない、日本人部ビュローはさまざまな地区のビュローが全体的性格を持つ問題について定期的報告を出すよう指導しなければならない、日本人部ビュローは毎週会合を持ち、その日時場所を中央委員会言語局に通知すること、中央委員会からのすべての通信はすみやかに関連する地区ビュローに伝えること、地区ビュローは地区言語部ないし組織部に定期報告すること、新聞やリーフレットは月二回、完全な報告は月一回提出すること」、⑤言語活動の重要性、⑥日本人大衆の間で党のキャンペーンをいかに実行するか、⑦党员拡大をいかに行い指導的幹部をいかに発展させるか（「ニューヨーク市の日本人部ビュローが全国の活動のモデルにならない」「二世の間での活動が重要」、⑧日本語新聞、

「以下、別の筆跡」⑨煽動宣伝活動と組織活動をいかに結びつけるか、⑩反動的諸組織への戦術、⑪広範な大衆組織の中の労働協会、⑫ローカル活動の集権化、⑬ポリシエヴィキ化と党規律、⑭地下活動とその組織、⑮政治的レベルの向上、⑯結論。

もうひとつの、「日本人部とニューヨーク・フラクションの活動概要及び今後の任務概要」は、上記文書の路線をニューヨーク地区に具体化したものである。「党员の活動」の項の「日本人の同志たちは、英語の知識の欠如ゆえに、自分の細胞内で指導的役割を果たすことができない。だが彼らは割り当てられた任務を忠実に実行している」という分析は、なにやらもの悲しい。だが誠実な党员にとっては、切実な問題であつたろう。

二つの文書とも、前半・後半が筆跡の異なる二人により手書きで書かれており、特に後半執筆者の筆跡は、二九年・三〇年報告書の「D・ウ

チダ」の筆跡に似ている。そうだとすれば、D・内田ジョー小出がモスクワでレーニン学校到着後に追記したものとなるが、確証はない。後にこれらは、一九三二年秋日本人部再建の指針となった可能性が高い。

「言語局アンケート」への回答——三一年ピラート書記と日本人部の活動停止

カール・ヨネダの『在米日本人労働者の歴史』を読むと、一九三一―二年の在米日本人共産主義者の活動は勇ましい。自伝『がんばって』で、カール・ヨネダは、「一九三〇年から三四年にかけては、私の人生のうちで、激烈な、嵐のような、情熱的な時期だった」という（五六頁）。大恐慌下での三一年二月一五日の全国失業保険デー、六―一二月の日米新聞社ストライキ、一〇月四日の黒人青年冤罪逮捕に抗議するスコッツボロ事件集会、三二年ロングビーチ事件、大統領選挙にW・Z・フォスター候補をたてた共産党、等々を生き生きと伝えている。「宮城与徳手記」によれば、宮城与徳の入党は一九三一年秋、ニューヨークから派遣された党オルグ矢野努の勧誘によるものだった。

しかし、旧ソ連で収集された「米国共産党レコード」の語る共産党日本人部の実像は、大きく異なる。一九三一年の「米国共産党レコード」中に、日本人部の定期活動報告書は残されていない。逆に、日本人部が機能を失った様を、米国共産党中央委員会言語局の英文記録として、描き出している。

確かに三一年五月五日、米国共産党言語局書記M・ブラウンの名で、全国の地区言語別ビューロー及び地区組織部に、日本に関する通達が出ている。

この手紙で、われわれは、アメリカのラヴストーン・グループと連絡

のある日本の背教者たちが、大衆党という新党「労農党」を結成し政府に保護されていることを、お伝えしたい。この新党は、日本共産党に対してばかりでなく、日本人労働者の住むあらゆる国々で、共産党に反対する煽動をしている。この党の三人の指導者がアメリカ合衆国にきて、日本人労働者の住む州をまわり、日本人労働者へのわれわれの影響力を取り除こうと試みている。もちろん合衆国政府の許可も得ている。……日本人同志から背教者による大衆集会の知らせが各地区にあった場合には、各地区は、日本人同志を助けて党員を動員し、背教者の集会をぶちこわし、背教者どものあらゆる策動を妨害するように。

これが、この頃訪米した浅原健三・賀川豊彦・大山郁夫排斥運動の実体で、当時のコミンテルンの「階級対階級」戦術、「社会ファシズム」論＝社会民主主義主要打撃論を、アメリカにおける運動の中で忠実に適用したものであった。賀川豊彦も大山郁夫も、西海岸の共産党員から悪罵された。

ではそれは、米国共産党日本人部のイニシアティブで全国方針になったのであろうか？ どうもそうではないらしい。この指令の入った第一七七リールには、日本人部と関連する二通の文書が入っている。

一つは、第一九地区デンバー組織部ジェームズ・アレンドラーの署名した、一九三二年三月三一日付け米国共産党中央委員会言語局宛手紙で、地区の日本入党員から日本人部宛で、日本人農業労働者を組織したいが地区に日本人労働者倶楽部も受け入れる労働組合もなくどう組織したらわからないという問い合わせがきたので、農民部の方に紹介したという手紙である。

もう一つは、署名は「カリフォルニア州サンフランシスコのワレン(Warren)」と白人風である。三一年一〇月二三日付けで、宛先は中央

委員会言語局書記ブラウン宛である。

同志へ 日本人フラクションと日本語新聞の状況についてお手紙します。同志たちは日本語の仕事ですばらしく闘う新聞を作っています。しかしながら、日本人部は、財政的にも記事のうえでも、彼らに何の助けもしていません。これは日本人フラクションについてばかりでなく、カナダのバンクーバーのフラクションについても同様です。同志たちの努力にもかかわらず、日本人部の助けがなければ、急速な進歩は望めません。この問題では日本人部に主要な責任があります。このことを取り上げて、至急、日本人部の実際の活動について、また貴方の『労働新聞』の記事と資金への援助についてお知らせ願いたい。同志 ワレン

つまり、サンフランシスコの日本人党員は機関紙『労働新聞』発行でがんばっているのに、ニューヨークの日本人部からは何の指導も援助もない、という苦言である。日本人部は、三〇年二月にD・内田ジョー小出が去り、K・二宮に書記が代わって以来、機能停止のままらしい。筆者ワレンは、たぶんサンフランシスコ地区党の言語別ビューロー担当ないし組織部書記であろう。

一九三二年の日本人党員は四五人、フラクション八箇所、影響下二二〇人。このことを裏付ける言語局の文書がある。この年米国共産党言語局は、二月二〇日締切で各言語ビューロー別党員実勢調査を行い、三一年五月一日付け党内文書にまとめている。そこには中央委員会言語局の各言語別組織担当・言語別機関紙統制委員・機関紙のリストも付されており、当時の米国共産党内がどのような「多文化社会」であつたかがわかる。

一九三一年二月の各言語別党勢は、拙著『ゾルゲ事件』一五七頁に下表で示したが、日本人部はフラクション数八、党員四五人、影響下組織

に二二〇人という最弱組織の一つである。この頃米国共産党中央委員会言語局側の日本人部担当はボリスフ (Borisoff) というロシア系の名前で、機関紙統制委員は今井 (Imai)、ジョー小出書記時代の言語局日本担当だったアルピ (Alpi) は、イタリア・スペイン・ドイツ担当の機関紙統制委員になっている。中国の担当はリヒトナー (Richner)、機関紙統制委員は Doompig とある。

各言語別ビューローの書記は、氏名・住所も記されている。中国人部の書記は J・モウ (J.Mo)、住所は労働学校気付 (c/o Workers School)、機関紙はニューヨーク発行の『前衛 (Vanguard)』となっている。一八の言語別全国組織の書記所在地は、ブルガリアとルーマニアがデトロイト、チェコスロヴァキアと南スラブがシカゴ、アルバニアがボストンであるが、他はすべて、党本部のあるニューヨークである。

日本人部については、書記は「フランコ・ピラート Franco Pilat T.O. 351 East 77 Street, New York City」、どうもラテン系の党員のよ

うである。ただし機関紙は、サンフランシスコの月刊『労働新聞』となっている。

このデータの母票と思われる、二月二〇日締切各言語ビューロー別アンケートの質問票と回答も一緒に綴られている。日本について回答したのは、言語局の担当者ボリ

米国共産党内の言語別グループ

言語別ビューロー	党フラクション数	党の影響下にある組織の構成員	その中の党員数
チェコスロバキア	16	7800	114
フィンランド	200	18000	1600
ユダヤ	275	38000	940
中国	33	300	72
ユーゴスラヴィア	39	4000	120
ロシア	50	5000	250
エストニア	3	200	25
ハンガリー	85	8000	265
ポーランド	20	?	?
イタリア	38	1000	100
日本	8	220	45
スペイン	5	?	?
小アジア	25	15000	300
アルメニア	23	800	100
レバノン	6	515	100
ドイツ	4	200	75

ソフであろうか、日本人部書記のフランコ・ピラートであろうか。英語はうまいが、「月四回会合」「日本人労働協会二〇〇人中四五人党员」等と実務的で素っ気ない。八つのフラクション・党员四五人の所在地について明示はない。ニューヨーク、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、シアトルのほかに、サクラメント、ボストン、シカゴ、デンバーであろうか。

この調査が力を入れている、保守的・非政治的言語組織内の活動にちなんだ言語別親睦組織とそでの党勢欄には、「日本人協会 会員一万人 党员ゼロ」、青年組織については「沖縄青年会 Y・M・A 構成員五〇人、党员六人で党の統制あり」「Y M C A 構成員二〇〇人で党员二人・影響力なし」、その他「日本人プロレタリア芸術グループ 構成員二〇人で党员一人だが党の統制あり」という具合である。

『労働新聞』については、通常他の党内英文文書では RODO-Shinbun と表記されるのだが、執筆者が日本語がわからないためか「Japanese Workers News」半月刊、定期購読者二〇〇人、発行部数一五〇〇、と報告されている。

日本人書記のいない状態で、カール・ヨネダという池田豊耕・石垣榮太郎の日本人労働協会除名は二月の党勢調査の後であり、日本人部のあるニューヨークでは更に党员が減ったであろう。主力のカリフォルニアでは、その後指導的党员の大量検挙・ソ連脱出が相次ぐから、党組織が大打撃を受けたであろうことは、想像に難くない。

一九三三年、ニューヨーク日本人部のカリフォルニア移転提案

翌一九三三年の記録では、ニューヨークの日本人部が、三〇年初めてのジョー小出書記辞任以後約二年半、開店休業状態だったと判明する。リ

ール第二一四 (LB-R214, 515-1-2768) に、重要な手紙が入っている。

中央委員会書記局殿 ニューヨーク市 一九三三年七月一六日
親愛なる同志へ フリスコからの手紙とわれわれの日本人同志たちの活動に関連して、私は、中央委員会日本人部とその構成が大変弱体で、これこそが日本人部とカリフォルニアのフラクションとの関係の弱さの原因であると、言わなければならない。この弱さのために、日本からやってきた社会ファシストの代表者どもに反対するキャンペーンは、大変低調なものに終わった。…

日本人部を強化するために、一月前にボリソフ同志を日本人同志たちへの補佐に任命した。日本人部ビューローは、大陸を横断してきた (from across) 一人の日本人によつて、さらに強化された。私は、日本人部をカリフォルニアに移転すべきだとは思わない。ここニューヨークにある日本人部を強化し、カリフォルニアの同志たちと連絡を密にし、これから労働新聞にもつと物質的援助をすることが、必要不可欠だと信じる。

同志的挨拶を ブラウン (署名)

これは、党本部の言語局書記であるブラウンが、前年の浅原健三排撃全党キャンペーンの失敗を総括して、あまりに弱体な日本人部の指導と組織の問題を、ブラウダーを書記長とする中央委員会執行委員会に提起し、必要な決定を求めたものである。日本人部のニューヨークからカリフォルニアへの移転問題も提起されている。ただし言語局官僚ブラウン自身は、ニューヨークにおいて連絡を密にすればよい、と述べている。そのすぐ後に、一九三二年一〇月六日付けの、英文手書きとタイプで同文の、無署名メモ二枚が入っている。

日本人部は、中央委員会執行委員会に対して、日本人部ビューローをニューヨーク市からカリフォルニア州のサンフランシスコ市に移転する

ことを提案する。その理由は以下の通りである。

- ① 在米日本人人口の九〇パーセントは、太平洋岸に住んでいる。
 - ② これらの日本人の八〇パーセントは、労働者・農民である。
 - ③ サンフランシスコは、日本人一五万人がいるハワイに近い。
 - ④ 太平洋岸では、資本主義的な日本語新聞が毎日五紙も発行されている。
 - ⑤ 太平洋岸には、ファシスト的・社会民主主義的・改良主義的等の反共產主義組織が数多く存在している。
 - ⑥ われわれが闘わねばならない多くの日本人宣伝者たちが、日本政府によつて太平洋岸に派遣され、日本人の間で活動している。
 - ⑦ 日本人にとつての大部分の社会的問題は、太平洋岸で生起している。
 - ⑧ 日本語機関紙『労働新聞』、『PPTUSの』『太平洋労働者』『海員新聞』は、サンフランシスコで発行されている。
 - ⑨ 日本入党員たちは、太平洋岸の日本大衆に集中的に働きかけるべきである。
 - ⑩ われわれの公式機関紙が発行され日本大衆がいる所から、四千マイルも離れたニューヨークに日本人部ビューローがあるのは、活動に不便である。
 - ⑪ 各地区の日本人部ビューローは、日本人部全国ビューローのニューヨークからサンフランシスコへの移転を望んでいる。
- すべての地区日本人部ビューローは、全国ビューローを以下の様にしたいと推薦している。
- ロスアンゼルス地区ビューロー 赤城鉄同志、彼は食品労働者である（果物店員）。一九三一年六月入党、現在所属党細胞と地区日本人部ビューローの双方のメンバー。
- サンフランシスコからS・武田同志、彼は『労働新聞』編集者で地区日

本人部ビューローのメンバー。シアトルとワシントンからは返事がない。ニューヨークからN・セタ（Seeta）同志、彼は現在日本人部全国書記である。

三三年一〇月「アメ亡組」出国時はS・セキ書記、日本人部はサンフランシスコに

この具体的提案は、中央委員会を動かしたようである。決断は、一九三三年一〇月一七日付けで下された。ちょうど、「アメ亡組」ソ連渡航の手続き中である。

米国共産党中央委員会殿 一九三三年一〇月一七日

親愛なる同志へ

米国共産党日本人部は、この国の日本人労働者の九〇パーセントが太平洋岸に住んでおり、日本語新聞と三人のフルタイムでの日本語部活動専従者が確保できるという革命運動の諸条件に鑑み、全国ビューローをニューヨーク市からカリフォルニア州サンフランシスコ市に移すことを決定した。日本人部ビューローは、これらビューロー専従者の生活費とビューロー維持に毎月一〇八ドルを必要とするが、この費用を広範な大衆からの支援で調達することは、われわれにはなお出来ない。そのためわれわれは、党に対して、以下を決定していただくよう要請する。

一、全国ビューロー書記の月六〇ドルを中央委員会から支払ってほしい。

二、ビューローのニューヨークからサンフランシスコへの移転費用六〇ドルを党から支払ってほしい。

同志的挨拶を

米国共産党日本人部書記（タイプ）
この決定書に費用請求書は、署名はないが、この時点での日本人部書

記により書かれたものだろう。一緒に付された、手書きでほとんど判読不能な一九三二年二月五日付けポリソフ宛三三ページの報告書（移転理由・活動方針・費用計算詳細の説明書？）の末尾に、その署名がある。ただし署名は、本文中も含め「Sudy? Seki」と読め、上記ブラウン宛メモの「N・セタ」は「S・セキ」のタイプミスと思われる。

その中の判読可能な箇所に、以下のように書かれている。

日本人部全国ビューローは、移転の承認を得て最初の会議を（二）（ニューヨーク？）で開き、本日、以下のように決定した。

1 構成 組織部 武田、Sody?、「ミドルネーム判読不能」Seki

煽動宣伝部 赤城（赤城の到着まで加藤が代行）

（中央委員会言語局との連絡・接触は全国ビューローの
Sody? New York およびニューヨーク地区日本人部ビュー
ローに任命されたT・ホリ Hor 同志へ）

2 名簿の方針（Course of Directory）

一九三〇年に中央委員会によって採択された「言語活動のガイダンス」が基礎となり、基礎的任務の目的は、移転前の全国ビューローのそれと変わらない。

3 計画……

ここで「S・セキ」の述べる「一九三〇年に中央委員会によって採択された『言語活動のガイダンス』が、先に見た日本人部のマニュアル「アメリカにおける日本人部の活動の分析と今後の活動概要 一九三〇年二月一日」であった可能性があるが、中央委員会言語局の各言語部用共通マニュアルであった可能性もあり、断言はできない。

これまで検討してきた日本人部書記についていえば、一九三二年五月（三二年七月のある時点で、「内田」「二宮」を引き継いでラテン系のフ

ランコ・ピラートになり、それが三二年七月には西海岸出身でニューヨークに出てきた日本人（二世？）の「S・セキ」に変わっていた。このニューヨークのセキ全国書記のもとで、サンフランシスコへのビューロー移転が決定された。「S・セキ」が何者であるかは、現在のところ不明である。

宮城与徳を入党させた「武田」＝矢野努の日本人部書記就任は三三年初めしたがって、ゾルゲ事件の宮城与徳がロスアンゼルスで入党した一九三一年秋時点での推薦者矢野務は、まだ日本人部の全国ビューロー書記ではなく、カリフォルニアの地区ビューローと『労働新聞』編集責任者を兼ねる立場であった。宮城与徳供述が語るように、一九三二年末に、すでに矢野と「ロイ」から日本帰国の話が切り出されたとすれば、それは、米国共産党の正規ルートで言えば、中央委員会言語局書記ブラウン、言語局日本人部担当ポリソフ、日本人部書記ピラート又はセキの三段階を経て、サンフランシスコ地区日本人部ビューローの武田＝矢野努に伝えられなければならない。だがもちろん、宮城与徳は、そうした党構造を知らない。また、ブデンツ『顔のない男達』の証言によれば、ブラウダー書記長をはじめ当時のアメリカ共産党中央幹部は、それぞれにコミンテルンやソ連共産党の諜報機関に直結する秘密工作ルートを受けていた。

このことを考慮すると、『アメリカ共産党とコミンテルン』に収録された次の文書が、武田＝矢野や「ロイ」の問題を考える際に、重要な意味を持つてくる。これは、ブラウダー書記長ルートの国際工作員ハリソン・ジョージと、モスクワ帰りの武田＝矢野努が、汎太平洋労働組合ルート（海の仕事）について打ち合わせる文書と解説されている。文中の

Nは名倉ジョージであろうか。中国人オーデン・リーについては、不明である。

文書一八 汎太平洋労働組合書記局サンフランシスコ・ビューロー議事録 RISKHIDN15344422

議事録第4号（汎太平洋労働組合書記局サンフランシスコ・ビューロー）一九三二年三月二日

出席 武田、ハリソン

議題 1、『汎太平洋労働者』の出版、2、ビューローの完成、3、海員との連携

1. 第一号の記事は全部翻訳され、チェックも済み、印刷屋に手渡す直前だったのだが、印刷屋に記事を持っていくのを任されていた同志Nが突然、入院手術をすることになり、印刷はどうしても二週間遅らせざるをえなくなった、との報告があった。日本語の活字は、以前の打ち合わせ通り日本に発注済みであり、値の安い印刷屋探しが進行中である。「田中メモランダム」が討議された。 決定―翻訳に要する時間を考慮し、田中メモランダムの翻訳（英語から日本語へ）に直ちに切りかかり、第二号でわれわれ自身の序文とともに特集する。

2. 当地の中国人同志の適正検査は進行中であり、中国人同志一人をビューローに加える見込みは十分ある。 決定―政治的適正を調べるため同志Orden Leeと会見すること。

3. 困難ではあったが、さらに三人、客船乗込みの日本人海員と予備的な接触をし、ある種の人脈を利用することによって、この点でわれわれの実際の組織を改善できる見込みがある、との報告があった。しかし、政治的な審査結果を通じて接触はさらに深めなければならないし、その上で初めて、彼らが活動に有効かどうかが決定される。概して、貨

物船の船員の方が客船の船員より階級意識が高く大胆であるけれど、同志の懸命の努力にもかかわらず、われわれの同志が貨物船に乗船することをあつさり拒絶されてしまった。（アメリカ）海員労働者産別組合の地域リーダーが当地を留守にしているため、彼との協議は延期されている。 決定―新規加入の同志がもし計画通りに偽装に成功すれば、彼とともに（二人で）客船との接触工作を強化すること。日本人貨物船員との接触の困難をどうやって回避するかを決定するには、海員労働者産別組合との相談結果を待つこと。

散会

ビューローを代表して

ハリソン、武田

宮城与徳が武田こと矢野務（本名豊田令助）と「白人の男」から日本帰国を指令されるのは、この文書より先の一九三二年末のことであるが、矢野がここで、正規ルートの党地区委員会日本人部書記活動機関紙『労働新聞』編集のみならず、かつて汎太平洋労働組合初代書記長であった米国共産党最高指導者ブラウダーが「ゲハルト・アイスラーやルディ・ペーカーと共に―サンフランシスコの汎太平洋労働組合書記局（PPTUS）指導者ハリソン・ジョージから直結する「闇の仕事」と関わっていたことはまちがいない。しかも、その「闇」の対日工作は、对中国工作と同じルートだった。宮城が一度だけ会った「白人の男」とは、ハリソン・ジョージであつたらう。そして、「ロイ」もそのルートの末端にいる。

いずれにせよ、ゾルゲ東京諜報団結成における矢野の役割は、末端メツセンジャーであつたらう。決定は、もつと上部でなされた。ただしそれが、「オモテ」の公式ルートからの活動指令であるか、「ウラ」の闇ルートからの秘密指令であるかによって、その後の平党员宮城与徳の運命

は決定した。「オモテ」で活動した宮城与三郎がソ連に向かった頃、従弟の宮城与徳は「ウラ」から日本に派遣された。

そして、どうやら、「オモテ」ルートで活躍した代表的日本人共産主義者カール・ヨネダは、ほとんど「ウラ」の流れをつかめなかったようだ。ヨネダが「水野成夫」と名付けた「米国共産党日本人部書記」の集合名詞は、ジョー小出の前任者Xとおそらく鬼頭銀一、内田ジョー小出、二宮長谷川泰二、ピラート、S・セキに、次に見る武田矢野努を加え五人に膨れあがった。

一二 矢野努追放劇におけるカール・ヨネダ、ジェームズ小田の役割と沈黙

三三三矢野書記の直訴とカール・ヨネダ『労働新聞』編集長就任

サンフランシスコに全国ビューローを移動した米国共産党日本人部は、しかし、スムーズには行かなかった。それまで機関紙『労働新聞』を編集してきた武田矢野努が「書記」ではなく「オルグ（組織担当）」の名前で出した一九三三年五月二三日付けの中央委員会組織局宛の報告文書（G151-3189）がある。

サンフランシスコの矢野務の全国書記就任は、たぶんニューヨークからの移転が完了した三三三年初頭からで、三三三年一月二七日付けで、『労働新聞』刊行の遅れを自己批判しつつ、各地からの記事があまり集まらないこと、印刷工は厳しい生活をきりつめて献身的に努力しているが印刷所の電気代未払いで印刷機が動かなかったこと、党活動の重要な一部なのに党員たちからの援助が弱く、自分には全国的な日本人部組織の活

動もあること、等々政治的・財政的援助を要求していた。

三三三年五月の報告書も、その延長上で、「日本人部ビューローの組織変化と現在の問題点」と題している。内田ジョー小出ほどではないが、読みやすい英語の文章である。

日本人部全国ビューローの構成員は、地区組織部のダーシー同志の了解のもとに、以下の理由によつて、これまでの三人から一人に変更した。理由一、日本人部の活動はまだ大衆の中に入っていないので、地区での活動を強化することが必要である。二、言語活動が大衆に浸透していないこととの関連で、三人の全国ビューローメンバーを財政的に支える手段はない。

日本人部の活動は、オルグである武田「矢野」一人によつて実行し、他の二人はそれぞれ地区に戻される。そのため、武田は、日本人部全国ビューローの活動を一人で行わなければならない。同時に、月三回刊の『労働新聞』編集を追加の仕事として行わなければならない。いまや彼はこの二つの活動を行っているわけで、身体的に不可能であるばかりでなく、党の正しい路線に沿っていまや発展しつつある言語活動と『労働新聞』の発展の双方を傷つけることになる。

そこで日本人部としては、早急に適当な機関紙編集者を必要としている。しかしわれわれの言語活動は大衆に浸透していないため、日本人部に責任を持つ同志にも、機関紙編集の同志にも、財政的援助をする手段を持たない。再びいえば、現時点での日本人部の組織の活動は、日々の生活を維持するための労働後のパートタイムではなく、機関紙編集に日常的に従事することとは、両立できない。したがって、日本人部ビューローは、われわれの活動が大衆的になるまで、党中央委員会が最低限月二五ドルを日本人部ビューローに支給することを望む。われわれはこの

問題を、地区委員会の返事がないので、直接中央委員会に訴えることをお許し下さい。……

この中央委員会への直訴状は、言語局書記ブラウンを通じて、中央委員会書記局にまわされた。三三年五月二八日付けのブラウンから書記局宛の文書には、武田＝矢野務の言い分を認めた同情的なメモが付されていた。

しかしながら、事情を調査しての中央委員会からの返事は、財政的援助どころか、『労働新聞』の編集内容を問題にし、批判するものであった。末尾に「一九三三年五月 米国共産党中央委員会言語局」と機関名で記されたタイトル抜きの手紙は、『労働新聞』が一九三二年前半期のような「個人新聞」から、日本人部の指導で「党機関紙」らしくなってきたことは認めつつも、「a、政治的仕上がりが弱い、b、組織的活動が全く不十分」と厳しく批判する内容であった。

「政治的仕上りの弱さ」とは、第一に、労働新聞紙上には、現状についてもその他の問題でも、さまざまな生きた政治的論題が欠けており、第二に、ニュースや問題の非政治的な、したがって正しくない扱いが時々現れることである。そこでは、ソ連の五カ年計画も資本主義の経済恐慌もほとんど報道されていないこと、単に「ソ連を守れ」というスローガンだけで、日本帝国主義の世界戦争への企ても中国民衆の広東蜂起も論じられていない、と断じる。

「問題の非政治的扱い」の事例として批判されるのは、共産黨員奥津をピストルで撃ち「背教者」「スパイ」として除名された、井上元春の件である。この事件は、戦後にカール・ヨネダ『在米日本人労働者の歴史』で、以下のように書かれている（二二―二頁）。

日本領事館の「スパイ」をしていた者に、『北米朝日』記者井上元春が

いる。彼は一九三二年二月二六日、『労働新聞』を北米朝日社印刷工場に配布中の奥津敏夫（二世、一九歳）をピストルでうち、傷害罪で起訴されたが、「自分は領事館より日本人共産主義者の取締り役をひきうけている」と証言して無罪になり、どこかに姿をくらましてしまった。

この事件を、当時武田＝矢野が「個人新聞」風に編集していたため、『労働新聞』が号外を出して報じたことが、中央委員会の批判を招いた。たとえば労働新聞は、われわれの同志の一人である奥津が、裏切り者によって襲撃された事件について、号外を出した。それは正しかったか。われわれはそうだったと思う。しかしそれは、他の問題をさしおいて号外を出すべき唯一の問題であつただろうか。とんでもない。中央委員会言語局の意見としては、第八七号・八八号にローカル・ニュースとして報道されている「日本人労働者の大量国外追放」こそ、号外に値するニュースであった。さらにいえば、このニュースは、他をさしおいて報じられた一人の同志への銃撃事件よりも、より直接的に大衆に関わるものであり、少なくともより大きく扱われるべきものだ。そのうえ、井上事件の扱い方は全く正しかったわけではない。この事件を政治化しようという努力はなされたにもかかわらず、あまりに多く井上に対する個人攻撃に費やされ、銃撃の政治的意味に矮小化されて、そこに含まれた現実的論点を曖昧にする傾向があつた。

こうした事例を延々と挙げて『労働新聞』の記事に立ち入った批判を加え、結論する。

以上に述べたわが日本語新聞の弱さの根本的原因是、中央委員会言語局の考えでは、彼らの孤立、あるいはより穏やかにいえば、党指導部との密接な連絡の欠如にある。もしもより緊密な連絡、意見交換、助言、指導性が彼らに与えられていれば、中央委員会言語局は、以上に見た労

働新聞の誤りの多くが避けられ、欠陥は正されたと考える。……中央委員会言語局は、日本人部が、地区委員会及び機関紙編集部と共に、この手紙を注意深く学習し討論して、指摘された弱さと欠陥を正し、そこに含まれた示唆を実行に移すよう望んでいる。

この手紙は六月二日夜カリフォルニアに到着し、六月七日付けで、武田Ⅱ矢野は言語局に自己批判書を送った。内容的には全面的に誤りを認め、さしあたりの方策として、機関紙編集を日本人部の仕事から切り離し、「最近ロスアンゼルスからサンフランシスコに移った同志浜」Ⅱカール・ヨネダが『労働新聞』の編集にあたる、というものであった。もちろん「自分の二年半の経験」で機関紙編集も助ける、と決意して。そして、追伸に書き添えた。「言語局への通信を日本語で書いてはいけませんか。翻訳のトラブルがなければ、もっとスピーディーな連絡ができるのですが」「機関紙活動と日本人部の活動が切り離されても、日本人部全国オルグに月二五ドルの生活費の支給をぜひ」と。

この頃、武田Ⅱ矢野については、日本の外事警察も注目していた。内務省警保局「昭和八年中に於ける外事警察概要 欧米関係」には、次の記述がある。

矢野リ्यूゾー（通称）（約四十才） 同人は升田、関、今井、鈴木、勢木、鈴石、後藤、小山等種々変名を用ひ最近多く升田「武田」と称す。新潟県人、早稲田大学中途退学、約二年前紐育方面より桑港に来れる者にして、船員として欧州より渡来せる者の如く、以前にも嘗て在米せることありと。平常家庭労働に従事す。雄弁にして相当素養あり。労働新聞を編集し、邦人党员中の巨頭人物なり。住所を常に転々し昨年中市内311-1/2 Elm Streetに通信所を設け居たるが、本年より同市2119 Bush Streetに通信部を移せる模様あり。

この三三年内務省警保局の米国共産党情報、先に見たように、異様に内部事情に詳しい。矢野が「今井」名をも使っていたとすれば、ピラート書記時代の一九三〇年、中央委員会言語局機関紙統制委員であった可能性がある。実際三三年六月段階で『労働新聞』編集が「過去二年半」であったとすれば、三〇年は機関紙統制をニューヨークで担当し、三一年からサンフランシスコに移り『労働新聞』編集にあたったと考えれば、辻褄が合う。党名「武田」を漢字の「竹田」の誤写と思われる「升田」にしているのはともかく、日本の特高外事警察が三二年書記「セキ」に通じる「関」「勢木」をも矢野の党名として挙げているのは――実際には矢野とは別人であつても――、三一年鬼頭銀一の逮捕後の日本官憲が、米共産党中央委員会言語局直属の日本人部全国ビューロー指導者に注目していたことを意味する。おそらく鬼頭銀一自身が、かつてその地位にあったことを、供述していたからであろう。

一九三三年七月、ジョー小出のサンフランシスコ到着

一九二九年に日本人部を再建した名書記「内田」Ⅱジョー小出は、ソ連の外国人指導者養成機関レーニン学校を卒業し、ソ連の工場で働いたり、コミンテルンの東洋部及び英米部の仕事をした後、三三年三月には米国に帰国した（『ある在米日本人の記録』上巻）。ニューヨーク経由でサンフランシスコに潜入し、七月には、ハリソン・ジョージの汎太平洋労働組合書記局で、アメリカでの活動を再開した。

ニューヨークでは、結局、二カ月近くも待避させられた。党の本部にも立寄り禁止だったし、たずねる知己もなかった。……やっと、夏も近ずき、セントラル・パークの青い木の葉が、緑色にかわりだす頃になって、サンフランシスコ行の命令がでた。即日、デンバー経由で西部行

を手配した。デンバーは、アメリカにきて、最初の四年間をすごした、なつかしい土地であった。旧知の人も少なくなかったが、学生時代に世話になったフアード・ラプトンの黒河幸治郎夫妻にあいさつするのが目的だった。サンフランシスコについたのは、七月の初めだった。第三丁目とハワード街の貧民地区の小さなルーミングハウスに部屋をとって、地下生活の第一歩をふみ出した。……ここにいう地下生活とは、一次入国者として上陸した人間が、そのままドロンをきめこみ、移民局の監視の目をさける必要が生じたことと、また、共産主義者追及のために血まなこになっている日本の出先官憲の目をのがれるために、『おしのび』の生活をしたという位のところであった。……

サンフランシスコについた時には、既にハリソン・ジョージが先着していた。彼は、汎太平洋労働組合書記局の漢口での創立大会に参加した一人であった。彼には、もう、アメリカ国籍の日本人が翻訳者としてつき、日本語『太平洋労働者』の米国版も、その第一号が発行されていた。だから、ニューヨークでまたされた理由が、尚更、不可解だった。与えられた仕事は、単に、翻訳だけでなく、協力者として、ハリソン・ジョージと組んで、『太平洋労働者』の編集発行に当ることであった。但し、彼は、日本語を解しなかったから、資料の蒐集、材料の提供は、こちらの役目だった（上巻一七一〜四頁）。

実はこの時、ジョー小出の最重要な仕事は、モスクワからやってくる予定のコミンテルン執行委員野坂参三の非合法地下活動を準備し助けることにあったのだが、自伝『ある在米日本人の記録』では、野坂との関係は一切明かしていない。

上記『アメリカ共産党とコミンテルン』文書一八からは、矢野武田も汎太平洋労働組合書記局の活動にあたっていたように見えるが、ここ

でジョー小出が、三三年七月サンフランシスコ到着時にハリソン・ジョーの助手として会った「アメリカ国籍の日本人翻訳者」とは、武田矢野努であろうか？ これまでの検討からして、矢野は、すでに「オモテの活動」として米国共産党日本人部書記と『労働新聞』編集の仕事で一人で担い、経済的にも逼迫していた。ちょうど、ジョー小出のサンフランシスコ到着は、矢野の直訴により『労働新聞』編集がロスアンゼルスから引越してきたカール・ヨネダに引き継がれるところだった。しかし、ここでのハリソン・ジョーの助手は、矢野でもヨネダでもない。

ハリソン・ジョーの汎太平洋労働組合書記局助手ジャック木元

大森実が一九七五年に発表した、ジョー小出への貴重なインタビューが残されている。「D・内田」ジョー小出が判明した今日の時点で、彼が何を語り、何を語らずに死んだかを確認するため、やや長めに引用しておこう。

大学の最後の年に、デンバー大学に社会問題研究所ができて、ベン・マーク・チャリントン博士が初代所長になったんです。彼はマッカーシー旋風のときに巻きこまれて……それに、ぼくのことではひどい目にあつたそうですがね。ぼくがその研究所の手伝いをするという形をとってもらい、スカラシップをもらって大学は卒業したんです。ニューヨークへ出るときも、その人の世話でフランク・オームテッドを紹介してくれました。……共産党のやっていたワーカー・スクール（労働者学校）に行つたんです。ちょうど、一九二八年、コミンテルン第六回大会のすんだあとだから、コミンテルンの活動がひろがりだしたころなんです。アメリカ代表で世界大会に出席したサミュエル・A・ダーシーが、ワーカー・スクールの校長をやつてました。

そこで一九二九年、大恐慌がきて失業者があふれ、デモンストレーションがある。ぼくは共産党に入党したんです。一九二九年の冬です。……ブラウダーはアメリカにいなかった。あとになって知ったけど漢口にいたんです。一九二七年、ブラウダーは漢口で汎太平洋労働組合書記局の発会式をした。ハリソン・ジョージも日本軍の厳重な警戒の中を潜り込んだのです。そのブラウダーが、一九三〇年の春にニューヨークに帰ってきたんです。彼が帰ってきたのは、おそらくスターリンの指令でしょう。アメリカ共産党の内部闘争の中でラプストーンを追いつき、党をスターリンのもとに再編成するためでしょうね。ブラウダーは、中国で活動していたので、国内の党派闘争に関係がなく、中立だったことを買われて、呼び帰された（大森実『戦後秘史 3 祖国革命工作』二九八～三〇〇頁）。

ここには、敬虔なキリスト教徒であった鵜飼宣道（東京銀座教会牧師鵜飼猛長男、憲法学者鵜飼信成の兄）Ⅱジョー小出が社会主義に近づく影響を与えたデンバー大学での恩師が社会問題のチャールリントン教授であったこと（鬼頭銀一も同じだった）、ニューヨークの労働学校に通ったこと、その校長が、後の第一三地区（カリフォルニア等）党指導者サム・ダーシーであったことなど、多数の有益な情報がある。

しかし、時期についてはいい加減で、カモフラージュされている。「D・内田」Ⅱジョー小出は、二九年一月には米国共産党中央委員会言語局の任命で日本人部書記になっていた。入党時期が二九年冬ということとはありえない。おそらく二八年には入党していたであろう。アール・ブラウダーは、確かに二七～二八年中国にいた。しかし彼は二九年一月にはアメリカに戻り、モスクワと往復しながら、三〇年六月の第七回米国共産党大会で党務担当書記になった（B・ラジッチⅡM・M・ドラチビッチ

『コミンテルン人名事典』至誠堂、一九八〇年、三八頁）。

そして、ブラウダーに勧められてレーニン学校へ行く前の、肝心なポイントが抜けている。三〇年春から夏の、党幹部学校Ⅱナショナル・トレーニング・センター在学経験である。おそらくそこで『君、レーニン・スクールに行く気はないかね。九か月の速成科の方だ。三年の本科じゃない』——話しかけているのは、アール・ブラウダー。やせぎすで、あごが四角。地味な洋服をきて、大学の教授か、ドクターをおもわせる。場所は、ニューヨーク。一九三〇年の夏」という「ある在米日本人の記録」冒頭の場面になった。「ブラウダーとしてみれば、PPTUS「汎太平洋労働者会議」は自分の教え子だ。……アメリカの共産党から、レーニン・スクールに送る十何人かの中に、一人位は日本人をいれても、文句は出まい。入れるとすれば、日英両語のわかる人間、こんなわけでお鉢が廻ってきたのであろう」とジョー小出は自伝で述べたが、無論、語学力だけではありえない。短期間だが鮮やかに日本人部を再建してコミンテルン東洋部とも直接連絡できた政治的能力と忠誠心が評価されたにちがいない（『ある在米日本人の記録』上巻、一五～一六頁）。

そして、大森実直撃インタビューでは、自伝にはなかった野坂参三との関係が明かされる。

この点は今まで書かなかったけど、野坂君がもう時効にかかったというんだからいいですけど、これ初めてですよ。……サンフランシスコに来て、サム・ダーシーに会ったとき、日本人がもう一人そこにいて『太平洋労働者』の翻訳をやっていた。ハリソン・ジョージが編集した『太平洋労働者』の第一号の翻訳を、その帰米二世の男がやっていた。ハリソン・ジョージは誰かが来ることを知っていたのですよ。そこにぼくが来たものだから、その男に用がなくなっただけです。その場合どうするか

というと、アップステア（二階）に送るしかないでしょ。だからレーニン・スクールに送ったんです。……ハワイ生まれの婦米二世で、ジャックという名しか知らない。この男をモスクワに送りこんで、ぼくとハリソン・ジョージが、えらく苦勞して仕事をしたんです（『戦後秘史』3『二九九〜三〇一頁』）。

ここから、サンフランシスコで野坂受け入れのOMSの仕事を引き受けるハリソン・ジョージの助手は、武田＝矢野ではなく、当初はハワイ生まれの婦米二世で、ジョー小出到着後、入れ替わりでレーニン学校に派遣されたことがわかる。今日では、渡部富哉の旧ソ連秘密資料およびハワイ大学ジョン・ステファン教授の協力による調査で、「一九三三年一〇月一九日ソ連到着、三五年五月アメリカへ帰国」と確認できるジャック木元＝木元伝吉のことである。渡部作成の年譜によると、木元は三一年夏にハワイからロスアンゼルスに行き、米国共産党に入党、三二年にハリソン・ジョージの助手となっている（渡部『野坂参三とゾルゲ事件の深層を追う』）。

宮城与徳を日本に送りだした「ロイ」も集合名詞？

同時に渡部富哉は、このジャック木元こそ、「宮城与徳供述」中の「ロイ」であつたという。そこでのジャームズ小田等の「ロイ＝野坂参三」説への批判は綿密で、説得力がある。渡部富哉が、ソ連の歴史学者ゲオルギーエフから示された間接メモ中の「一九三四年四月一日に行われたヤンソンとフレークの会談記録」に出てくる「フレークに関して言えば、彼は、ほかでもない有名な情報員ロイで、彼の本名はクモトデンイチである」が、確かに有力な情報である。

宮城が三二年末に「白人の男」＝ハリソン・ジョージと矢野に日本帰

国を指令された後、「昭和八年九月ころ矢野とロイと二人で私の所に来て、至急日本に帰れと申されましたので、十月初め頃私は米国を發つた」という宮城の供述が事実とすれば（『現代史資料三 ゾルゲ事件三』三一頁）、「木元は宮城の日本への出發を見届けてから、十月十九日にレーニンスクールに留学している。おそらくモスクワで宮城が東京に向けて出發したことを、ヤンソンに報告する義務を課されていたのだろう」という渡部の分析も、「ロイ」がハリソン・ジョージの助手木元伝一であれば、筋が通っている。

ただ、渡部は、三二年九月の矢野と「白人の男」との会見後、「宮城は日本での任務につくために、極秘のロイとの線だけが残されて米国共産党の組織から切り離された」とするが、矢野が最後の帰国指令まで「ロイ」と共に宮城と会い、サム・ダーシーが「日本では特高のスパイが充滿している」と宮城に注意したりするのは、モスクワのカール・ヤンソンからニューヨークのアル・ブラウダー、サンフランシスコのハリソン・ジョージという米国共産党内コミンテルン連絡ルート（OMS担当者）の全体で、宮城与徳を送り出したと考えるべきだろう。宮城の任務やゾルゲとのつながりは知らなかったにせよ、「米国共産党の組織」にある矢野やダーシーは、ハリソン・ジョージの線で宮城が日本に送られることを、了解していたであらう。

さらに、北林トモの供述が残されていないため追及は難しいが、宮城が「北林夫人の話によればロイは私の帰国以来数回北林方に行き未だ帰って来ないかと私の消息を訊ねたさうであります」と供述しているのも、気になるところである。このアフターケアをした「ロイ」が実在したとすれば、すでにモスクワに出發したジャック木元ではありえないことになる。後任のジョー小出でもありうる。私は、この「ロイ＝木元伝一」

説については、渡部富哉の探索と執念に敬意を払いつつも、ちょうどカール・ヨネダにとつての「水野成夫」と同じように、宮城与徳にとつては、自分を送り出した「アメリカ共産党の闇」の全体が「ロイ」であり、ハリソン・ジョージやサム・ダーシーや野坂参三、ジョー小出、ジャック木元らを含む「ウラの共産党」「野坂機関」の集合名詞であつたと考える。

ここでの問題は、ジョー小出が三三年七月にはサンフランシスコに到着し、ハリソン・ジョージのもとで木元伝一とも会つていたこと、したがつて、宮城与徳と直接会うことはないにせよ、矢野やサム・ダーシーと同様に、ブラウダーⅡハリソン・ジョージのラインで日本に向かう諜報員の存在を知りうる立場にあつた、という点である。

リヒアルト・ゾルゲのベルリン出発は、三三年七月中旬、ちょうどジョー小出のサンフランシスコ到着の頃である。パリ・イギリス経由で八月初めにアメリカに入り、ニューヨークに八日間滞在して連絡員と接触、シカゴに出て万国博覧会場で日本入国後の協力者Ⅱ宮城与徳との接触方法の連絡を受け、バンクーバーから太平洋航路で、九月六日に横浜に到着したという（外事課「中間報告」『現代史資料四 ゾルゲ事件四』三六頁、なお、四二年七月二八日「予審訊問調書」『現代史資料一 ゾルゲ事件一』三四七頁以下も参照）。

この頃、宮城与徳にも、日本帰国を急ぐよう指令が出る。宮城は一〇月初めに出発した。七月から「地下活動」を始めたジョー小出は、この動きに、無縁であつたろうか。ゾルゲのバンクーバーから横浜への船は、コミンテルンのOMSが手配したであろうが、ニューヨークやシカゴの連絡員は、米国共産党のどの部門の誰が派遣し担当したのであるか。ゾルゲが船出したカナダのバンクーバーは、カナダ共産党の管轄地域で

はあつても、米国共産党日本人部の工作対象拠点地域であつた。

矢野努追放劇におけるジョー小出の役割

大森実のジョー小出インタビューには、矢野努も登場する。ジャック木元Ⅱ木元伝一のレーニン・スクール派遣の話に、すぐ続けてこういう。

あのとき、東方勤労者大学、通称クートベを卒業したのち、レーニン・スクールに入れてもらえずにアメリカに送られた男が、ナショナル・ピュローのヘッドをしていたんです。いわゆるアメリカ共産党日本人部長という肩書です。日本の高等師範の出身でね。見たところはとても堅牢で、労働者の恰好してるけど、根がインテリなんです。田中さん（山本懸蔵）が信用しないで、レーニン・スクールに入れなかつたのです。その男も辞めさせろという命令が、モスクワから届いたんですよ。そのころはなんのためにそんなことをするかわからんでしょ。その男を辞めさせたことでえらい目にあつたんです。上から辞めさせたのですが、周囲はよくがその男をクビにしたと思いますわな。

この事件を通じて、ぼくの存在もばれました。「ジョー・小出というヤツがオレを辞めさせた」と、ぼくが悪者にされた。一九三三年の冬です。暮ですよ。その男を辞めさせると、すぐそのあとに、岡野……野坂参三がパツと顔を出したんですよ。ぼくは肝を潰しました（『戦後秘史 3』三〇一頁）。

ここでジョー小出の語っているのは、「ナショナル・ピュローのヘッド」とあり、明らかに武田Ⅱ矢野努のことである。『ある在米日本人の記録』にも、関連する叙述がある（上巻一三三―一三五頁）。そこで矢野は、クートベ卒業後レーニン・スクールに進学しなかったが、インテリ嫌いの山本懸蔵の眼鏡にかなわず一年で帰つたことになっている。

当時の日本共産党では、スパイMⅡ中央委員松村Ⅱ飯塚盈延の事例のように、クートベ帰りがさまざま中央委員であり、風間丈吉や山本正美は帰国すると党委員長になった。幹部活動家の層の厚い米国共産党の場合は、レーニン・スクール出とクートベ出身では、大きな差があった。それが、コミンテルン内での米国共産党と日本共産党の序列の違いであり、また、米国共産党内での欧米系とアジア・アフリカ系の違いでもあった。

ジョー小出は、いわば革命の超エリートであり、武田Ⅱ矢野努は中堅幹部だった。このことは、ジョー小出自身も『ある在米日本人の記録』で語っている。

レーニン・スクールは、コミンテルンを「世界革命の参謀本部」と規定した第六回世界大会（一九二八年）の決議に従い、『革命の幹部養成』の目的をもって設立されたものだった。

第一期生は、各国共産党の中央委員級で、数も限られていた。米国からは、クラレンス・ハサウェイ、チャールズ・コロンバイン、ルーディ・ペーカーなどが入っていた。本科は三年、速成科は一年、一年といっても本での勉強は九カ月余、そのあと六十日間の自治見学旅行、それで卒業となる。……高橋貞樹が、レーニン・スクールに学んだといわれているが、むろん変名を使っていたのであろう。聞いたこともなかった。米国から、もう一人行った男がいるが、彼は、片山潜氏の世話で入学したのではないかと思われる。彼は本科の方で、こちらは速成科だったから、関係がなかった。……

当時、モスコーには、レーニン・スクールとは別に、東方勤労者大学（略称クートベ）というのがあり、日本人の学生の大部分は、そこにいた。彼等は、日本から来たという理由で、コミンテルンやプロフィンテルン

の仕事に与っていたようである。……アメリカから送られてきた学生のなかに、幾人かの黒人がいた。大部分は「学力不足」で、クートベの方に廻され、二人だけ、レーニン・スクールの本科に編入された（二七〇八、四四、六三頁）

日本の官憲記録のいう「早稲田大学中退」の真偽はともかく、党中央エリートの道に入り損ねた『労働新聞』編集者武田Ⅱ矢野努は、日本人部書記になって三三年春から夏に待遇改善を中央委員会に直訴し、逆に『労働新聞』編集上での自己批判を迫られた。

カール・ヨネダの疑心暗鬼、ジエームズ小田の野坂スパイ説

三三年六月には、カール・ヨネダがロスアンゼルスからサンフランシスコへと転居する。五月末に『労働新聞』主筆就任を要請され、それを「いい知らせ」と受け取って編集に加わった。ちょうど直後の三三年六月一五日が第百号で、特別増大号を三〇〇〇部発行した。

この頃について、カール・ヨネダ「在米日本人共産主義者略史」には「JAPANESE BUREAUは一九三三年LOS ANGELESに移り書記は藤井周而が選ばれる」とあるが、それを示す文書はない。全くのでたらめで、カール・ヨネダの政治的に屈折した党史研究の姿勢が現れている。彼の著書には、自身の過去をおおい隠すための作為が、いたるところに見られる。

勇躍『労働新聞』編集を始めたカール・ヨネダは、その直後に、ジョー小出と会ったという。先に引用した「一九三三年に私が『労働新聞』主筆を引き継いだとき、アメリカ共産党日本人部書記のS・水野は、定例の会合で、ジョーという名の身なりのいい若い日本人を、日本人部の新メンバーとして紹介した。日本人部は一世二人と帰米二人で構成され

ていた。私は帰米の一人だった。新人が加わって、日本人部は五人の組織体になった。……週に一度、私はジョーの要請で、あらかじめ指定された時刻と場所で、党務処理のため彼に会った」という、例の闇を含んだ『がんばって』の文章である。

だがカール・ヨネダは、ジョー小出を自分に紹介した「水野」＝矢野努がその後どうなったかは、何も記していない。ジョー小出の「日本領事館スパイ」説を語る文脈で、「水野」は一度出てくるのみである。ジョー小出の大森実インタビュー中で「その男も辞めさせろ」という命令が、モスクワから届いた」と語られた後に書かれたにもかかわらず。

この頃のカール・ヨネダを、同じロスアンゼルス出身の若き活動家として近くで見てきた「二世」ジェームズ小田は、一九九二年に伝聞調で書いていた。

一九三〇年代の初期、彼はアメリカ共産党日本語機関紙『労働新聞』の編集長を務めていたのであるが、内部の人達の話では、それは彼がその当時唯一の米国市民権保持者であったために選抜されたもので、必ずしもほんとの指導者ではなかったとのことである。……別個に共産党日本語全国書記局というレッキとした指導部があったとのことである。一九三四年末、書記長であったロイ矢野（本名豊田令助）がその頃アメリカに潜行してきた野坂参三によつて強引に追放された時、カール・ヨネダはその後釜に座り込もうとしたが成功しなかった。仲村幸輝が書記長になり、その次には上里良光が選ばれ、書記局には錚々たる一世マルクス主義者が君臨してヨネダを抑えつけていた。

一九九五年のジェームズ小田『スパイ野坂参三追跡』では、矢野努追放劇の黒幕が野坂参三とされ、次のように語られる。ここでジェームズ小田は、野坂参三がアメリカに到着したのは三三年であり、野坂こそ宮

城と徳を日本に送りだした「ロイ」であったと前提している。

野坂はサンフランシスコに着くや、日本語書記局の書記ロイ・矢野を肅清することにとりかかった。と言っても、初対面の明くる日から早速肅清工作を始めることはできない。野坂にとってサンフランシスコは未知の都会であり、異国である。周囲の勝手はわからなかったはずである。モスクワの方から指令があり、政治路線に差異があったというのであれば、肅清も容易であつたかもしれない。論争の中心は、ロイ・矢野が武士風情の独裁者で、非民主主義的であるということであつたらしい。こんな個人攻撃では、論争は泥試合になりがちである。その上、アメリカ共産党書記長のアール・ブラウダーやカリフォルニア州の党責任者サム・ダーシーも論争に参加したとのことであるから、討議の翻訳に莫大な時間が空費されたとのことである。

矢野は一九二〇年代にモスクワで訓練を受けており、片山潜や山本懸蔵とは顔見知りで、先生たちには矢野に反対する何の理由もなかった。野坂は野心家のカール・ヨネダの支持を得ており、英語に堪能なため白人関係者の支持を得ていたことと思う。また、野坂はその頃からすでにコミンテルン日本人部を乗っ取る野望を持ち、片山や山本と敵対することも辞さないという意気込みであつた。その頃の古い黨員たちによると、論争は長い期間持続し、一年以上もかかったとのことである。一般黨員の反応は、どちらかというと無関心で、それが済んだ時には「やれやれ、とうとう済んだか」というような感じであつたらしい。矢野反対の急先鋒を努めたカール・ヨネダは書記に選出されず、また矢野支持者の間に離党者が続出した（同書、三五頁）。

しかし、野坂のサンフランシスコ到着は、「密使」神達八郎の東京到着後、一九三四年四月末以降と旧ソ連秘密資料から特定できるから、ジ

エームズ小田のここでの野坂の記述は、誤りである。カール・ヨネダと同じく、ジェームズ小田も、歴史の語り部としてはきわめて政治的であり、史実としては信用できない。

ただし、カール・ヨネダこそ矢野追放Ⅱ「肅清」の「急先鋒」であったという小田証言は、傾聴に値する。ここでの「野坂参三」を「ジョー小出」と置き換えれば、ある程度真相に近くなる。ジョー小出にとつて、サンフランシスコは「異国」ではないが「未知の都会」であった。ちょうどモスクワでは、三三年一月の片山潜の死亡で、野坂参三がコミンテルン執行委員になり、日本では、日本共産党が宮本顕治らの「スパイ査問致死事件」で自滅し、ただ一人逃亡した中央委員袴田里見が政治的に孤立して、山本秋・宮内勇らの「多数派」が形成される頃の話である。当時『労働新聞』周辺にいたサンフランシスコ金門印刷所主岡繁樹は気がつかなかったようだが、一九四二年の「宮城与徳手記」は、「昭和十六年八月羅府から母国訪問で一時帰国した旧党员赤城鉄（竹本康雄）の私（宮城）に談話せる其の後の党運動経過」という「付記」として、この矢野努追放劇を、以下のように描いていた。

- 一 昭和九年に至りコミンテルンは党組織者矢野の組織方針の相違を指摘し、其の批判が行はれたが、三度に亘る矢野の反駁となり其結果矢野及び彼を支持する赤城哲、中村幸輝外二、三名党员は党除名となった。
- 一 同九年、斉藤、小田を中心とする第二世の活動が活発に展開され、サンピードロ港ターミナル漁業労働者の間に組織を持つ事に成功した。
- 一 同年平塚某その他二、三党员、支持者のスパイ事件があり、これにより大衆団体に相当動揺があつた模様で脱会者が多数であつた。

三三年秋、カール・ヨネダによる「武田」Ⅱ矢野努告発

矢野努の直訴状や中央委員会言語局の手紙を収録した「米国共産党レコード」には、一九三三年六月以降の文書も入っている。六月七日の中央委員会言語局宛「武田」報告の後に入っているのは、八月二五日付け、カール・ハマⅡヨネダがニューヨークの米国共産党書記長ブラウダーに宛てた手紙であつた。

あなたの手紙が遅れたため、われわれがそれを受け取つたのは二二日で、同封した論説を、すぐにお送りすることができませんでした。しかしながら、われわれは全力を尽くし、この論説が『デイリー・ワーカー』特別記念号の締切前にあなたに届くよう希望しています。別添で、『デイリー・ワーカー』掲載のあなたの論説「党記念日は何を意味するか」を訳載した『労働新聞』をお送りします。われわれの新聞の次号は九月五日付けですが、党記念日特別号となるでしょう。

過日私は、中央委員会煽動宣伝部に手紙を送り、『デイリー・ワーカー』紙の労働新聞社への送付が止まつたのはなぜかと、中央機関紙管理の問題を問い合わせましたが、まだ返事を受け取っていません。労働新聞の財政は大変厳しく、紙代の支払いはできません。しかしながらわれわれは、『デイリー・ワーカー』にいつも注目し、とりわけ二世に同紙の定期購読者になるように、われわれの新聞で宣伝しています。中央委員会が、恒常的に全国情勢に触れるために必要不可欠な『デイリー・ワーカー』を、われわれが受け取ることを認めてくださると信じます。八月二五日付けの『労働新聞』四面には、『デイリー・ワーカー』の広告を入れて二ドルの定期購読は価値あるものだと宣伝しています。

どうやらカール・ヨネダは、党書記長から各国語機関紙編集部宛の党記念日キャンペーンの指令への返答にかこつけて、書記長ブラウダーに、

『労働新聞』への援助と新編集長の自分自身をアピールしたようだ。

その二カ月後、一九三三年一〇月三十一日付けの長い英語の手紙が、同じファイルに入っている。「Dear E.」と書記長アール・ブラウダーにファースト・ネームで話しかけるサンフランシスコ日本人部についての報告で、「中央委員へ回覧」と書き込まれている。署名欄は読みにくいのが、内容からして、日本人部書記武田Ⅱ矢野の正規ルートでの報告書ではなく、日本人部ビューローの一員で『労働新聞』編集長であるカール・ヨネダが個人的にしたためた、日本人部書記TⅡ武田Ⅱ矢野努の告発状である。

前便以降のことから出発します。日本人部が九月に成し遂げた三つの分野のことを書きますが、率直に言って、われわれはなお客観的情勢に立ち遅れております。第一七回中央委員会決定は主たる危険は右翼的偏向にあると述べていますが、このことは日本人部について全くその通りです。あまりにもしばしば、われわれは情勢に対応できていません。

こうして挙げるのが、『労働新聞』の問題、労働組合の闘争、反戦闘争や佐野学・鍋山貞親ら日本での共産党幹部の裏切りの問題である。「私はあなたに労働新聞各号のすべての記事のタイトルを翻訳してあなたに送つてきました」というから、カール・ヨネダから中央への連絡は熱心に行つたようである。そのうえで、『労働新聞』の内容は、なお現実の日本人労働者・農民の階級闘争を反映し、改良主義的諸組織や日本帝国主义と闘争するには立ち遅れているが、この間各号二〇人の日本人労働者からの通信を掲載したこと、最新号はそれまでより五〇〇部多い二五〇〇部を印刷したことなど、自分が編集長になつての前進面をアピールする。

日本政府からの『労働新聞』郵送禁止措置の連絡が郵便局からあつた

ことを伝え、それは、自分が編集した八月一五日号が、日本の帝国主義強奪戦争の企てと佐野学・鍋山貞親の陰謀を暴露したからだと述べる。機関紙財政では、自分の就任以来、黨員のみに頼る体制から支持者大衆の定期購読を拡大する方針に改め、計画をたてて基盤を作っていく方向にしたという。ルーズベルトのニューディール政策への労働者のなかの幻想と闘い、日本人労働者組織化の問題では日本入党員間で独自の労働組合を作るべきかTUUに加わるべきかで意見が分かれていること、失業者の組織化は遅れていること等が報告される。

佐野・鍋山の裏切りと陰謀については、当初ブルジョア新聞の報道だけだったので慎重に扱つた。『インプレコール』（コミンテルン機関紙）の論説が出てから裏切り者として糾弾したが、『プロレタリア芸芸』誌のように、佐野・鍋山に同情的な議論も出ている。「理論的討論の欠如はわれわれの弱点である。わが機関紙と日本語の特別のブレティンでの黨員教育が必要である。われわれはこれまで社会ファシストの理論と日和見主義的实践に対する闘争があまりにも不十分であつた」と。

問題は、この機関紙『労働新聞』活動についての報告に付された、カール・ヨネダの「日本人部ビューローの内部問題について」という一頁の文書である。

前便にて、ビューロー内で起こつたある種の困難について、言及しました。ビューローメンバーのほかに地区委員会代表と私も加わつた最近のビューロー会議で、この問題が徹底的に討議されました。地区委員会の批判は、つまらぬ問題でこんな問題を抱えた理由はビューローがなすべき大衆活動をしていないからだというものでした。実際に大衆活動を開始すればこんなつまらぬ問題に時間を割けなくなるだろうというのです。地区委員会は正しいと思います。ビューローが将来よりうまくいく

よう、私も望みます。しかしながら実際の実践ではなお問題を抱えています。

私はここで、なお問題だと思われることを記します。ビューローの関わった誤りについての私の批判は厳しすぎると、地区委員会の同志からは（婉曲に）批判されましたが、私はこの意見を、ビューロー会議でも表明しました。私の意見では、ビューローの、また当時は同じ人間が担当していたので機関紙についても、誤りは現在の書記T [Taketa II 矢野努]にあります。この事実は、去る六月に日本人部に宛てた中央委員会の手紙にも記されています。私は当地に到着後この状況を打破しようと努力しましたが、この努力は必然的にTの欠陥に対する鋭い批判を余儀なくするものでした。

この批判はきわめて具体的であつたにもかかわらず、Tは、私の批判を「同志的でない」と考えたらしく、批判の仕方を問題にしました。例えば、彼がロスアンゼルスからの小旅行から戻った後、私は彼を労働新聞の定期購読者拡大の努力が十分ではないと批判しました。彼が努力しなかつたのは事実であつたにもかかわらず、彼は私の批判を彼の信用をおとしめるためのものと考え、一カ月以上もよくよく考え込んでいました。私はその会議で表明したのは、われわれが真に活動を成し遂げようとするならば、彼のロスアンゼルスへの旅行の場合のようにビューロー書記が関わるものであれ、ビューロー全体の問題であれ、その誤りは鋭く批判されなければならないということでした。このような基礎にたつてのみ、われわれは前進できるのです。私は、Tがビューロー内での（書記への批判の禁止を意味する）「平和」を求めているのではないかと危惧すると述べました。そのビューロー会議の後、その出来事は、外見上はクローズされました。それは、われわれは後退したり同じ様な誤りを繰

り返してはならないという些末な問題として残され、われわれの大衆的活動をさまざまなかたちで妨げています。

この関連で、専従活動への給与 [the paid functionary business] について説明しなければならぬ。地区委員会の見解は、日本人部が専従書記に給与を出すかどうかはビューロー自身で決めるべきだということです。ビューロー会議が開かれる前に、私は書記に、われわれの同志は（とりわけ全国でも）たつた八五人で、機関紙は独立では採算がとれない等々の理由で、専従者に給与を払うのはよくない、この問題の中心は、一人がすべてを支配し、他の同志たちのイニシアティブを窒息させ、過去のわれわれの活動を妨げてきたという私の意見を、繰り返しのべました。私は政治的に（とりわけ他の同志たちを活性化する観点から）、また他の理由でも（とりわけ財政的に）、われわれは専従者に給与を出すべきでないと述べました。さらにはさしあたりは必要ありません。Tは別の意見でした。そしてビューロー会議では、月二〇ドルの専従給与という彼の提案を、二対一の多数決で通してしまいました。かつてのTの意見は、党本部からの二〇ドルは書記局の維持費にまわされるというものでした。事実彼は私に、彼自身と地区委員会は党本部に二〇ドルをビューローに与えられその事務に使うために要求したと幾度か述べていました。

このカール・ヨネダによる書記長ブラウダーへの日本人部書記T II 矢野の政治的責任追及と公金私消の告発 II 直訴は、一九三三年末〜三四年の日本人部内紛の発端であり、原因であつた。その背後に、週一度ヨネダと連絡を始めたジョー小出の示唆——さらには野坂参三やコミンテルンの指令があつたか否かは、ジョー小出の先の戦後証言以外は、確認できない。

カール・ヨネダは、この告発状の翌週三三年十一月六日にも、米国共

産党書記長アール・ブラウダーに手紙を書いた。ただしこれは、モスクワのコミンテルン執行委員片山潜の逝去を悼む、コミンテルン中央執行委員会宛のメッセージの転送依頼であった。そして「アメリカ合衆国在住の日本人大衆」を代表するというその追悼メッセージの名義人は、「米共産党日本大部」ではなく、『労働新聞』編集長 カール・ハマ」であった。ブラウダー宛の手紙には、手書きで「われわれの新聞の十月革命特集号を発行次第送ります」という追伸も忘れなかった。

一九三四年、野坂参三米国到着時の日本大部内紛―矢野对ヨネダ

『労働新聞』編集長カール・ヨネダによる日本大部書記武田「矢野努の告発に発するその後の米共産党日本大部の党内紛争は、矢野の抵抗によって、紆余曲折を遂げる。『米共産党レコード』(515-1-3505)には、この件に関する文書が収録されている。

一九三四年三月一三日付け中央委員会言語局宛日本大部報告には、それまでの「D・内田」「ジョー小出や「武田」」矢野努という日本大部書記単独署名の報告書とは異なり、五人の自署の連名になっている。署名者は「Takeda, Karl Hanna, Oguma, M. Nata (Field, Org), George Miki」である。第一署名者が「武田」であることは、なお矢野努が書記として活動していることを示している。書記職は中央委員会言語局に任免権があるから、ニューヨークの党本部も、カール・ヨネダの直訴「矢野告発を、当初は両者の個人的いがいみあいととらえていた証左である。実際、両当事者が署名したこの四頁の報告書には、サクラメントで三人から一人になるなど全国で党員が一〇二名に増えたこと、共産主義青年同盟も五人から一人三人に増えたこと、機関紙『労働新聞』は定期購読を七八部増やし労働者・農民の中での大衆闘争も前進していると、半

年間の「社会主義的競争」キャンペーンが成果をあげていることが報告された。しかしながらストライキの波が起こっている客観情勢にはなお立ち遅れているとして、反戦闘争や失業者組織化、ブルジョアの組織内での活動などの不十分性を認め、その原因を、「わが同志たちが大衆闘争の先頭に立っていないこと」と共に、「日本大部ビューローの指導性」に求めている。ただし、「日本大部書記は、この間毎日十時間以上も活動せねばならず、少なくともあと一人はフルタイムのオルグが必要だ」と書き込んだのは、書記である矢野の抵抗で、中央委員会へのデモンストレーションであつたらう。この三四年三月報告書には、ビューローでの内紛への言及はない。

直後の三四年三月二一日付けで、三月九日付け米共産党中央委員会からの問い合わせに答えるかたちで、日本大部の現勢報告が提出されている。これが日本大部のみに要求された特別の調査か、他の言語別ビューローにも出された一般的アンケートへの回答かは特定できず、署名もないが、書記の矢野による執筆であろう。「党の影響下にある大衆団体」の項では、次のように答えている。

	構成員	フラクション党員数	結成時期
ロスアンゼルス			
ロスアンゼルス二世同盟	五〇	三	一九三三年春
ロスアンゼルス日本人レストラン			
労働組合(独立系)	一〇〇	二	一九三三年九月
文化連盟	二〇	三	過去数年來存続
沖縄青年同盟	五〇	三	
庭師組合(ボス組織)	数百人	八	一九三三年夏
ニューヨーク			

日本人労働倶楽部 二一 一二 数年来
サンフランシスコ

日本人労働倶楽部 二〇 一〇 最近組織化

日本人協会（ボス支配） 五〇人以上 一 一〇年以上

大日本青年会（反動的青年組織） 三〇 二 一九三二年夏

シアトル

市民連盟（ブルジョア的青年組織） 五〇 一 数年来

日本語新聞については、機関紙『労働新聞』が、一九三〇年の一〇〇〇部から現在二五〇〇部へと一五〇〇部増えたこと、月二回刊から三回刊にして、特に三三年だけで一〇〇〇部増やした、それで日本政府は昨年八月以来日本への郵送を禁止した、とする。その他『新聞労働者』（サンフランシスコ）、『農業労働者』（サクラメント）、『レストラン労働者』（ロスアンゼルス）、『フルーツ・スタンド労働者』（ロスアンゼルス）、『食品労働者』（ニューヨーク）の五紙、さらに日本人部ビュロー・ブレティン等も刊行中、という。ちょうど野坂参三が、米国に潜り込む直前である。

矢野のシアトル更迭と「東」問題のフィッシャー調査報告書

一九三四年五月一六日、「日本人部書記 S・武田」名で、「同志ブラウダー」宛の手紙が出されている。

私は第一四地区委員会への転任に関するあなたの一四日付け直接指令を受け取った。ただちにその指令と私の新しい任務を実行に移すために、私は日本人部の仕事を、サンフランシスコに残る同志ハマ「ヨネダ」を長にしてM「松井周二？」が積極的に助けるかたちで委任し「entrust」、転任を終えたい。一九日には新任地に向かうつもりだ。

しかしながら、新任地に向かう前に解決すべき二つの問題、a 日本人部の再組織、b 新書記への仕事の引継を、以下の理由により、私の出発前に決めることができない。そこで私は、地区組織の許可を得ていったんサンフランシスコに戻り、六月五日以後にそれらを解決したい。その理由とは、最も活動的で最も指導的な同志Hはインベリアル・パレーにおり、同志Amはロスアンゼルスにいて、彼らを会議のために招集することは実践的活動の観点からして現時点では不可能だからである（上記の私の提案は、同志Mも出席したビュロー会議で承認された）。

（署名）S・タケダ

PS つまらぬ問題であるがややこしい、私個人の問題も解決しなければならぬ。私の妻は一カ月前に流産し、なお病床にある。私のボスは休暇中で、私は二カ月間の家屋管理を委任されており、そのボスに借金がある、等々。これらはなお未解決であるが、「問題が生じた」ということは、問題解決の諸条件が存在していることを意味する」という「マルクスの」見地から、真にボルシェヴィキ的に問題を解決し、指令の実行を妨げないようにするつもりである。

つまり、ニューヨークの中央委員会は、ようやく三四年五月に、日本人部の内紛に介入した。書記長ブラウダーの直接指令で、日本人部全国書記の矢野をシアトルのあるワシントン州を管轄する第一四地区委員会に転勤させることにし、その突然の指令を矢野は「ボルシェヴィキ的に」受諾することにした。仕事の引継は告発者ハマ・カール・ヨネダに仮委任したが、正規の次期書記には、HとAmという、カール・ヨネダとは別の党員名を挙げて暗に推薦し、ヨネダの書記昇格には反対の意向を伝えた。

ところが問題は、意外な方向に向かう。ここで矢野が暗に書記候補の

一人とした「Am」と同一人物であると思われるロスアンゼルス有力
黨員「Arima＝有馬」が、日本人労働者黨員「Azuma-Higashi＝東」
の検挙と国外追放に関わる事件についての党中央委員会の調査で、その
「分派活動」を指摘され、新たな問題に発展する。「カール・ヨネダ・ペ
ーパーズ」中の「アメリ組」探求のために作られた「送還者名簿」では、
「東ジョージ(当時二八才?) フルーツ・スタンド労働者、ロスアンゼ
ルスの労働組合活動で三四年一月三〇日逮捕、三四年七月二八日サンペ
ドロ港から離米」とある。

六月一日付けで、中央委員会言語局書記ブラウンに宛てた、ウィリア
ム・L・バタースンの手紙が綴じ込まれている。たぶん、ロスアンゼル
スを管轄する第一三地区委員会の組織担当であろう。そこには「フィッ
シャー」名義の、「Azuma＝東」についての党歴・党活動調査報告書が
付されている。

ここでの「フィッシャー」とは、ハリソン・ジョージの党名である可
能性が一番高い(『アメリカ共産党とコミンテルン』九一―一〇三頁)。
ただし渡部富哉の調査によると、リヒアルト・ゾルゲの上海時代の仲間
であり、野坂参三のアメリカ潜入の手引きをした、コミンテルン本部か
らのアメリカ派遣代表ゲアハルト・アイスラーの可能性もあるという。
ちょうど野坂参三のサンフランシスコ到着の時期に、ブラウダーとジョ
ージないしアイスラーは、「矢野対カール・ヨネダ」問題に決定を下す。
以下は、「フィッシャー調査報告書」の要約である。

問題の東は、三〇二九人の労働者をストライキで組織した最良の黨員活
動家の一人で、フルーツ・スタンド労働者であるが、二月中旬に検挙され、
共産黨員であることを供述で認め、移民局から追放処分を受けた。ここ
ろが日本人部ビューローは、ILD(国際労働者救援会)を使ってすべ

に釈放のための大衆闘争を行うことなく、東が法廷で自ら共産黨員であ
ると認めてしまつてから、「労働新聞」紙上で釈放キャンペーンを始めた。

東は日本への送還を拒否し、自由意志でのソ連入国を希望している。
過去の国外追放者ソ連入国の例はあるが、スパイがわざと捕まつてソ連
に入国しようとする場合もありうるから、東の場合は慎重に身元調査が
行われた。調査にあつたのはロスアンゼルスの方の Arima, Hannoff,
Goodman の三人の黨員であつたが、このうち Arima＝有馬同志だけが
『労働新聞』を読むことができ、しかも彼は、同紙編集長 Hana「＝カ
ール・ヨネダ」同志に対して、「分派的精神で」闘争中であつた。

東はスパイではなく、すぐれたストライキ組織者であつたが、法廷で
黨員であると認めてしまつた。この東自身の「暴露」の前に、日本人部
ビューローと「労働新聞」は大衆的釈放運動を組織すべきであつたが、
沈黙していた。日本人部ビューローのT同志＝矢野努の支配が、正しい
路線を採ろうという東及びビューローのM同志の問題提起を妨げ、また
調査にあたつた同志 Arima＝有馬は、東についての報告書で『労働新聞』
が彼の黨員帰属を明かした「などと」Hana＝カール・ヨネダを困らせ
ようという個人的利害で、歪んだ報告をした。

Azuma 東はソ連に出国させるのは好ましくなく、兄弟のいるブラジル
に出国すべきだろう。有馬については、分派的にこの事件の真実を歪め
た上で、査問 (be censured) すべきだろう。一緒に署名した Hannoff,
Goodman にも党の利益の観点から注意を与えるべきだ。

矢野がブラウダーの転任指令に服する際、次期書記候補と挙げたのが
「Am」で、略号は Azuma も Arima も該当するが、どうやら新たな事
件の当事者 Azuma 東はカール・ヨネダに近い人物で、それを調査した
Arima 有馬の方は、矢野努直系であつたらしい。

その有馬の行動がほかならぬ「フィッシャー」の調査で「分派的」と中央委員会に報告されたことで、問題は、ロスアンゼルス有馬の査問から、シアトルに移ったばかりの前書記武田⇨矢野努の分派活動査問・除名へと展開する。

注意すべきは、「スパイがわざと捕まってソ連に入国しようとする場合もありうる」という、米国共産党中央から日本人部への警告である。この頃フランス共産党からモスクワに入った勝野金政やドイツ共産党から亡命した国崎定洞は、山本懸蔵から「スパイ」と疑われ、勝野は強制収容所に入っていた。東はソ連ではなく、ブラジルに送られる。

日本人部のロスアンゼルス移転とジェームズ小田のワンポイント書記就任

これら「矢野追放劇」の入ったリールとは異なるが、「米国共産党レコード」第一三地区（カリフォルニア等）の地区委員会記録（第二八〇リール、地区委員会ビューロー会議事録綴り）中に、一九三四年六月二二日の地区委員会ビューロー議事録があり、「日本人フラクション」について、次のように実務的に記録されている。HotaはHataのタイプライスであろう。

- ① 日本人部全国ビューローは、ロスアンゼルスに移転される。
- ② 新しい全国ビューローは、同志Oda, Arima, Saito, Hota, Hama, Murata, Tsudaとなる。
- ③ Hanoftが、ロスアンゼルスにおける日本人部全国ビューローへの地区委員会代表となる。
- ④ 日本人同志たちは、直ちに日程、期限付きの具体的活動プランを作ること。
- ⑤ 失業者のなかでの実践的任務。

⑥ 日本人センター「リトル・トーキョー」での定期的街頭集会。

⑦ 日本人労働者の関心は、米国における日本人労働者の抱える経済的政治的問題に再び向かっている。党活動を、これら労働者の同志たちだけの活動にまかせないこと。

⑧ 国内の日本人労働者のなかでの大衆活動に同志を派遣するさいには、党書記局の活動を優先すること。

「矢野問題ファイル」に戻ると、一九三四年七月二三日付けで、米国共産党中央委員会宛に、この問題での日本人部ビューロー決議が送られている。そこで中央委員会に新たに任命されて、「日本人部全国書記」として署名しているのは、『労働新聞』編集長になつて以来ブラウダーやコミンテルンに自分を売り込み書記就任の野望を持っていたらしいカール・ヨネダでも、矢野の推したH t、A m⇨有馬でもなく、いわば喧嘩両成敗で局外にあった人物だった。カール・ヨネダは、三四年一〇月、カリフォルニア州議会選挙のサンフランシスコ第二二地区候補者に体よく棚上げされ、選挙で一〇一七票を獲得することで「オモテの共産党」に戻っていく。それは、『労働新聞』編集長の解任をも意味した。

驚くべきことに、その決定に署名した日本人部の新全国書記は、「J. Oda」、即ち戦後に抽象的な伝聞風に矢野追放劇を記録に残した「二世」黨員ジェームズ小田であった。新たな日本人部ビューローの決議は、以下のように、前書記「同志T」⇨矢野努のとつた行動を、分派活動として厳しく告発するものだった。日本人部ビューローの住所も、小田の住むロスアンゼルスに変更されている。ただしカール・ヨネダの権力闘争を苦々しく見てきたジェームズ小田は、この問題では、直ちに矢野の除名を提起することはせず、手続きを重視した調停派的対応を示す。Tが武田⇨矢野努、AはArima、HはHataであろう。

サンフランシスコ言語部ビューローの報告と、日本人部ビューローが受理した党中央委員会の政治的書簡以降に同志Tが彼の「個人的」同志であるAとHに宛てて書いた手紙類に基づく、同志Tが中央委員会及び日本人部ビューローに反対する分派活動を行ったことは明白である(同志Tは、サンフランシスコの幾人かの友人に電話し、中央委員会の書簡は英語がよくできるが中央委員会に正しい事実を伝えなかったある同志たちにより提供された情報に基づいて書かれている、と述べていた。同志Tはまた、同志AとHに宛てた手紙の中で、ある同志たちの側のマヌーバーによって彼はシアトルに左遷された、あの中央委員会書簡はあまり重要でない、などと書いていた)。とりわけ彼はサンフランシスコに戻って以降、中央委員会と言語局を攻撃する煽動を行った。運動の目的のために、われわれは以下のように決定した。

- ① 同志Tがこのような分派活動を実行した理由、及び、なお(一部とはいえず)中央委員会書簡が、日本人同志全体、とりわけT同志により、政治的に十分理解されていないことに鑑み、
- ② 日本人部ビューローは、真の討論を指揮することによって、中央委員会書簡の政治的意義を大衆化する、更なる措置をとることを決定した。
- ③ 同志Tの今日の活動は、疑いなく分派の性格を帯びている。日本人部ビューローは、特別委員会(SCC)と協議したうえで、同志Tが直ちにこのような分派活動を中止するよう要求する。
- ④ もしも同志Tが中央委員会書簡について何らかの言明をなしたいと望むならば、彼はそのようにする権利を認められる。しかしながら、彼は適切なチャンネルを通じて、彼が行った分派的で非政治的なやり方ではなく、なされなければならない。

以上の決議は関係するすべての党委員会及び日本人部ビューローに送付される。

一九三四年の日本人部書記ジェームズ小田は、さらに三通の手紙を中央委員会に送っている。七月二五日付けで、再び「同志Tに反対する決議」が出される。どうやら全国の日本入党員内では、とりわけサンフランシスコでは、矢野に対する同情者も、少なくないようである。もう一度「同志T」は矢野に分派活動中止をよびかけている。

サンフランシスコ言語部の報告書は、同志Tに反対しており、また、同志T自身が直後に同志Arimaと同志Haraに書いた個人的手紙は、自己了解にほど遠い根拠なきものであった。同志Tがサンフランシスコに戻って以降の行動は、明らかに分派活動を意味している。そこで、日本人部全国ビューローは、すべてのローカル・ビューローに、この文書を発送する。

- ① 同志Tと党員全般は中央委員会書簡の政策を政治的に不十分にしか理解していない。
 - ② すべての同志たち、とりわけ同志Tは、中央委員会書簡の政策の重要性をはつきりと政治的に理解すべきである。
 - ③ 同志Tは党規律に反する分派活動を行っており、そのような行動は直ちにやめるべきである。
 - ④ もしも同志Tが中央委員会書簡の路線に沿って中央委員会書簡についてアピールしたいのであれば、彼はすべての党員と同様に、アピールの権利を持つ。日本人部全国ビューローに言明を寄せよ。
- 八月五日付けのタイプは判読困難であるが、日本人部ビューローと『労働新聞』をサンフランシスコからロスアンゼルスに移転した事後報告のようである。一〇月二二日付けで、ジェームズ小田は、党本部言語局の

日本人部担当者に、ILD（国際労働者救援会）ロスアンゼルス支部から、「Higashi」＝東事件についての説明を求められていると伝え、言語局書記ブラウンに取り次いでくれるよう頼んでいる。

『労働新聞』編集長はカール・ヨネダから藤井周而へ

この内紛＝権力闘争で、矢野追放の急先鋒だった『労働新聞』編集長カール・ヨネダは、州議会議員選挙候補者に棚上げされ落選して、体よく解任された。『労働新聞』編集部は、ロスアンゼルスに移り、一月二七日付けで新編集長「J. Saito」＝藤井周而名での、手書きの中央委員会宛手紙が残されている。内紛問題には触れず、中央委員会から『労働新聞』への通信が、編集部がロスアンゼルスに移転した後もサンフランシスコ宛で送られていることへの苦情である。

どうやらロスアンゼルス日本人部書記ジェームズ小田、『労働新聞』主筆藤井周而の新執行部は、カール・ヨネダと矢野努の確執から起こった日本人部全体を揺るがす混乱の、緊急避難のためのものであったようだ。この点でも、カール・ヨネダの「在米日本人共産主義者略史」は、虚偽に満ちている。

①『労働新聞』の一九三〇年から三三年までの主筆は水野、一九三三年か「ら」三六年まではカール・ハマ編集」の記述中の「水野」は矢野努のことであったが、「カール・ハマ編集」は、主筆としての活動は一年ほどで、後の『同胞』主筆藤井周而こそ、米国共産党日本人部の代表的ジャーナリストであった。

②「カール・ヨネダ・ペーパーズ」目録の『労働新聞』の項も、カール・ヨネダの歴史の隠蔽癖を端的に表している。「編集 1929.3-31.12 健物貞一、32.7-33.5 Hideo Mizuno、33.6-34.12 浜「カール・

ヨネダ」、35.1-36.12 浜及びShiro Miyazaki」の「Hideo Mizuno」は自らが追放の火をつけた矢野努だったが、『同胞』編集については藤井周而の名を挙げながら、『労働新聞』については「Shiro Miyazaki」というカモフラージュ名を作為し、しかも自分の名前を共同編集者として挙げ、三四年も一二月までは自分が主筆だったと偽ることに、藤井周而の足跡を小さく扱おうとしている。

実は、ジョー小田＝鶴飼宣道と斉藤＝藤井周而の二人こそが、カール・ヨネダが晩年まで付き従おうとした岡野進＝野坂参三の最も信頼し評価した有能な活動家だった。カール・ヨネダにとって、「Shiro Miyazaki」も、「Hideo Mizuno」と同じように、政治的カモフラージュであると共に、「闇の世界」であった。

『米国共産党レコード』リール第二八〇の第一三地区委員会ビューロー議事録には、一九三四年二月一八日の会議で、「Takeda」問題について「同志HがTの声明を批判する声明を書いた。次回ビューロー会議に持ち越し」とある。Hがビューロー・メンバーに残ったHama＝カール・ヨネダだとすれば、二人の確執は、なお党内で続いている。

三五年ハタ＝仲村幸輝？、三六年ヤマト＝上里良光？書記のほとんどで人民戦線へ

だがもう一人のHの可能性もある。リール第二九一（LB-R-291, 515-1-3798）には、翌三五年二月二二日付けの、日本人部全国ビューローから中央委員会宛報告書が入っている。ビューローの所在地はロスアンゼルスで変わらないが、再び書記は交代している。今度は Masao Hataで、前任者ジェームズ小田の先の回想（「カール・ヨネダの歩んだ道」）を参照すると、「一世」仲村幸輝の党名となる。いずれにせよ、若や「二

世」ジェームズ小田は、緊急避難の臨時執行部でワンポイント・リリースの書記だった。「帰米」のエース活動家カール・ヨネダは、またしてもトップにはなれなかった。

この三五年二月日本入部報告書によると、前年六月の中央委員会の日本入部宛書簡に沿った新指導部の活動によって、あらゆる領域で前進を遂げた。同時に、党内に長く潜んでいた日本領事館のスパイ＝Tsukamoto (Tezuka) が摘発された。

「カール・ヨネダ・ペーパーズ」には、一九三五年一月一〇日付けの「大衆の威力で手づか米国より放逐せよ！」という「米国共産党中央委員会日本語記局、同羅府地方委員会日本語記局」名のビラが入っており、塚本＝手塚は、サンフランシスコで三二年に入党した商店員であつたらしい。その除名理由は「塚本は米国共産党日本人党员間にあつて、日本天皇制政府の手先、スパイとして暗躍し、日本天皇政府に在米日本人共産党员の活動を系統的に報告し日本人党员の活動を妨害攪乱せんが為に、党内に分派的行動及紛争を組織的に引き起こしたのみでなく、内地の共産主義者及同情者を日本政府に密告せる階級的裏切りである」とある。「分派活動」が「スパイ」と結びつく、当時のコミンテルン＝共産党世界では、情状酌量の余地はなくなる。

このTsukamoto 塚本＝手塚好公を除名した日本入部ビューローと活動家の党会議で、それまでの日本入部の活動全体の自己批判が行われる。地区委員会から提案された、「同志Nと同志Tの分派活動」は「わが党の党员であることは相容れない」という決議が承認された。おそらくここで、T＝矢野努は、除名か除籍になったのだろう。もともとまだ「同志」とあるから、自発的離党の勧告であつたかもしれない。

Nは特定できないが、「宮城与徳手記」中の一九四一年夏に来日時

赤城哲（竹本康雄）の証言を信じるならば、「昭和九年に至りコミンテルンは党組織者矢野の組織方針の相違を指摘し、其の批判が行はれたが、三度に亘る矢野の反駁となり其結果矢野及び彼を支持する赤城哲中「仲」村幸輝外二、三名党员は党除名となった」——すなわちカール・ヨネダの日本入部書記批判に発した「矢野努追放劇」は、ようやく幕を閉じた。この時点での仲村幸輝・竹本康雄の除名は確認できなかった。私は未見だが、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校で二〇一五年には公開されたはずの「ジェームズ小田ペーパーズ」及び「幸地新政ペーパーズ」等の精査が求められる。

斉藤＝藤井周而の『労働新聞』編集長は継続されて、三五年五月二〇日付けでも、『労働新聞』一五〇号記念の報告を中央委員会に送っている。日本入部ビューロー名では、M・Hata名での三五年三月報告書があるが、「米国共産党レコード」中から私が見出した最後の日本入部ファイル(515-1-4001)は、一九三六年二月二八日付け、及び三月二七日の米国共産党中央委員会言語局宛報告書であつた。そこでは、日本入部書記が、今度はT・Yamatoに変わっている。当時のコミンテルンの政策転換を反映し、「反ファシズム人民戦線」の時代に入っている。

この三六年書記Yamatoが、ジャームズ小田がもう一人の「書記長」として挙げた上里良光であれば、先の一連の記録中に出てきた矢野努擁護派＝有馬Arimaとは四一年に事態を宮城与徳にうち明けた赤城鉄（竹本康雄）で、同じく矢野から後継書記に推薦されながら、矢野追放・ヨネダ棚上げを果たした三五年書記Iidaは仲村幸輝となる。仲村幸輝は、三五年には中央委員会から書記に任命され、自らの手で「同志」武田＝矢野努との党的関係を絶つて、同じ沖繩出身の上里に新路線を委ね、権力政治から身を引いたのかもしれない。

一三 おわりに

「アメリカ亡命組」の運命と残された課題

カール・ヨネダのいう「水野成夫」は「ウラの共産党」の符牒だった

当時の党内文書から浮かび上がる米国共産党日本人部の真実は、カール・ヨネダやジェームズ小田の戦後の回想とは、大きく異なるものであった。「コミンテルンの指令」を待つまでもなく、共産党指導部にありがちなポスト争い・個人的確執と専従給与をめぐる小さな争いから、一〇〇人前後の米国共産党内日本人党员全体を巻き込む権力闘争・路線問題になった。そうした内紛は、ソ連共産党や日本共産党でも、しばしば見られた。

一九三四年から米国で地下活動を開始する野坂参三やジョー小出にとつては、対日工作を進める上で、迷惑なコップの中の嵐だった。同時期に日本でも、袴田里見らの中央委員会に反対する「多数派」問題がおきていた。そんな問題に、コミンテルン米国駐在「フィッシャー」ことハリソン・ジョージないしゲアハルト・アイスナーと米国共産党書記長アール・ブラウダーが直接に重要な役割を果たしていることが、異様といえば異様である。だがそれは、「オモテの共産党」の話であつた。ブラウダーもジョージもアイスナーも、中国での活動を体験したコミンテルンソ連共産党のアジア工作の幹部であり、アイスナーは、上海時代にリヒアルト・ゾルゲとも直接の関係を持っていた。

カール・ヨネダが「水野成夫」の符牒に託した「闇の世界」とも通じる米国共産党日本人部書記は、一九二八年米国共産党第六回大会の言語局強化により設けられたもので、二八年から二九年のある時期、その後

上海でゾルゲと尾崎秀実や水野成を結びつけた鬼頭銀一であつたろう。その後、二九年一〇月から三〇年二月は鵜飼宣道、ジョー小出が書記であつたと確認できる。「内田」ことジョー小出は、「ナショナル・トレイン・センター」からモスクワ・レーニン学校へと抜擢され、野坂参三を助ける黒子として帰国して、影響力を行使し続ける。

日本人部書記の仕事は、三〇年の二宮（長谷川泰二）、三一年のフランコ・ピラート、三二年のS・セキと、ニューヨーク党本部の意向でめまぐるしく交代するが、三三年のクートベ帰りの武田、矢野努のサンフランシスコ赴任で安定するかに見えた。そこにジョー小出の帰国と野坂参三の渡米が影を落として、カール・ヨネダの矢野攻撃による党内闘争が泥沼化した。

ヨネダにとつての「水野成夫」とは、三四年の追放劇最終局面では、ロスアンゼルススのジェームズ小田、三五年ハタ、仲村幸輝、三六年ヤマト、上里良光？と、鬼頭銀一から数えろと実に九人も名前が含意された謎の符牒だった。それは、「闇の世界」への出入り口で、日系米国共産党员の「ウラの顔」のシンボルだった。その「闇」の本格的説明は、これからである。

「アメリカ亡命組」のソ連亡命にも「コミンテルンOMSと日本人部が関わった

藤井一行教授遺稿の解明したソ連における「アメリカ亡命組」の運命は、右の問題と連動していた。世界恐慌期に大量の弾圧犠牲者を出した米国共産党は、多くの移民労働者を抱えており、検挙され国外追放になった党员は、出身国に戻るか、いずれかの国に送還されるかの選択を迫られた。移民局や各国公館でのパスポート審査・ビザ取得ばかりでなく、「オ

モテ」の党員であっても、自由な選択はなかった。党員の出入国は、ニューヨークの党本部、言語局の許認可事項であった。

米国で共産党に入ったのであるから、共産主義者として「プロレタリア国際主義」に従うのが義務であった。故国に帰る際には任務が与えられた。他国共産党への秘密連絡に使われることもあった。「労働者の祖国」ソ連への亡命を希望しても、カモフラージュのために、国際赤色救援会（MOPR）、国際労働者救援会（ILD）などの招待状が必要だった。それらを整える技術的ネットワークが、コミンテルンの国際連絡部（OMS）で、偽造パスポートや偽金造りもお手のものだった。そこには「ウラの共産党」の意向と指示が、強く作用した。

したがって、健物貞一や照屋忠盛・宮城与三郎らのソ連「亡命」も、一見自発的に見えながら、コミンテルンと米国共産党の決定に従ったものであり、同時期に宮城与徳が日本に派遣されたことと、表裏の関係にあった。本人たちがどれだけ自覚していたかは別として、資本主義の世界恐慌と対照に描かれたソ連の急進的工業化・農業集団化、第一次五カ年計画への移民労働力、クートベやレーニン・スクールを通じての国際活動家養成、必要に応じてのソ連から世界への工作員派遣の予備軍になることを意味した。

無論、資本主義世界の各国対外公館、軍・警察・諜報機関もソ連に注目していたから、実際の「スパイ」や工作員が各国共産党に入り込み、ソ連に入国することもありえた。一九三六～九年のスターリン大粛清が、「社会主義のもとでの階級闘争」「人民の敵」摘発」を口実に進められ、外国人に対して特に厳しかったのは、世界革命をめざすコミンテルン組織と連動し、実際にはソ連外交に従属した情報戦・諜報戦が、地球的規模で展開されていたからだった。

米国共産党内日本人のその後については、「カール・ヨネダ・ペーパーズ」略史⑦以下の描く、日米戦争開戦時の米国共産党の反ファシズム連合・ルーズベルト政権支持、「敵国」日本人党員の党籍剥奪・日本人部解散、日系人強制収容所内での路線対立・内紛と組織的崩壊にいたる。カール・ヨネダらは「米国市民」として前線で銃をとり、ジョー小出・石垣綾子らは、戦時米国の諜報機関OSS（戦略情報局、戦後CIAの前身）に登用され、対日プロパガンダ作戦に動員される。その帰結が、スターリン主義一色の戦後米国共産党にほとんど日系人が残らないことであつた。これらはまた別個の歴史に属する。

「矢野努＝豊田令助」の日本名は新潟県佐渡出身「将月令助」だった

藤井一行教授を追悼する本稿の最後に、一つだけ、藤井教授には伝えることのできなかつた最新の研究成果を組み込んで、本論を閉じることしよう。

ロングビーチ事件をきっかけとした「アメ亡組」訪ソでも、ゾルゲ事件の宮城与徳日本派遣でも、その後の野坂参三・ジョー小出らの西海岸対日秘密工作でも、「オモテ」と「ウラ」をつなぐ実務上の要にあり多くを知っていたのは、カール・ヨネダが権力抗争で敗れた日本人居書記「武田＝矢野努」であつた。その本名は長く「豊田令助」とされてきた。

二一世紀に機密解除された米国国立公文書館のナチ・日本帝国戦争犯罪記録中では、陸軍情報部（MIS）個人ファイルのリストに「豊田令助」の名はあるが、表紙カバー一頁のみで、中身はすべて機密扱いである。米国情報公開法で三度も個別に請求したが非公開のままで、昭和天皇・岸信介ファイルなみである。米国戦時諜報機関OSSにも「豊田令助」の一九四四年一月の勤務記録があるが、日本語翻訳・ラジオ聴取

要員とあるのみで、ジョー小出や藤井周而のような対日宣伝作戦関与の痕跡はなかった。

ところが思わぬ所から、「豊田令助」も米国での仮の名で、本当の名は「将月令助」であることが、ちょうど藤井教授が永眠された頃に判明した。それは、幾度か言及した米国の研究者ジョセフィン・フォーラー女史が、博士論文執筆のために収集した米国共産党関係個人資料の一枚で、「将月（まさつき）令助 一八九六年二月生、原籍 日本新潟県佐渡郡両津町」という日本語「履歴書」が出てきた。カリフォルニア大学ロスアンゼルス校所蔵「ジョセフィン・フォーラー・ペーパーズ」中の資料であるが、記された「492/280/309-6」は旧ソ連秘密資料の番号である。「一九二六年二月入党」、炭鉱・鉄道労働のなかでマルクス主義に目覚めニューヨークで入党した際の「入党理由、クートベ入学等」「党履歴」、カリフォルニア活動歴・職歴があり、モスクワのクートベ在学中に書かれたものようである。

それは、日本官憲の三一年記録に党员名「将月某」が出ていたこと、三三年記録には「矢野〓新潟県人」とあったことを想起させる。その後の調べで、日本戸籍名は「将月令助」で、一九五一年米国サンフランシスコより帰国し、東京で（おそらく占領軍相手の）高級カーペット清掃業を始めたこともわかった。カール・ヨネダの「豊田令助（矢野務）」が五〇年マツカン法成立で元共産党员ゆえに強制送還という記述とも合致する。

まだまだ断片的ではあるが、ゾルゲ事件にとつても貴重な戦後への生き残り証人となり、関係資料が残されている可能性がある。この件は、本誌に寄稿している京都大学大学院の進藤翔太郎氏が探求しているが、今後の研究成果が期待される。

「飽食した悪魔」の戦後

731部隊と二木秀雄『政界ジープ』

加藤哲郎 著 本体 3500 円



雑誌「政界ジープ」創刊、ミドリ十字創設、731部隊隊友会、日本イスラム教団——残酷な人体実験・細菌戦を実行した医師がたどる戦後の数奇な運命。GHQと旧軍情報将校の合作による731部隊「隠蔽」「免責」「復権」の構造。

父の遺言

戦争は人間を「狂気」にする

731部隊に多くの中国抗日活動家を送った罪で特別軍事法廷で裁かれた父。娘の心の旅。推薦の言葉 澤地久枝

伊東秀子 著 本体 1700 円

「反戦主義者なる事 通告申上げます」

反軍を唱えて消えた結核医・末永敏事

森永玲 著 本体 1500 円

皇軍兵士、シベリア抑留、撫順戦犯管理所

絵鳩 毅 著 本体 2000 円

カント学徒、再生の記

花伝社

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-5-11 出版輸送ビル2F

電話 03-3263-3813 FAX 03-3239-8272

URL: <http://kadensha.net> e-mail: kadensha@muf.biglobe.ne.jp

価格税別

発売：共栄書房